
ロックマンエグゼ ~ 願いが希望に変わるとき ~

フレイム・ナイト

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

ロックマンエグゼ 願いが希望に変わるとき

【Nコード】

N8998M

【作者名】

フレイルム・ナイト

【あらすじ】

20??年、小惑星衝突の危機が去った世界で、熱斗とロックマンは仲間達と一緒に平和に日々を過ごしていた。

そんなある日、父・祐一郎に呼び出された科学省で事件が発生し、ロックマンが……!!

復活したネビュラ、ネビュラと手を組んだ謎の科学者、物語の鍵を握る謎のプログラム、そして二百年の時を越えて、流星が再び舞い降りる……!!

現在、最後のプログラム争奪戦を投稿中、最後にパーツを手に入れるのは、熱斗達かネビュラか・・・！！

プロローグ

あのと、僕はまだ五歳ぐらいのときだった。

「おじさんなにやってるの？」

ここはパパの研究室。知らないおじさんが立っていて、手にはペンダントが握られていた。

「あつ、それは！」

僕がペンダントに気づくと、おじさんは慌ててペンダントを隠そうとした。

「返して！それはパパの大切なものなんだよ！」

「だまれ……」

おじさんは僕を押しつけて部屋を出ようとする。

「だめ！！それを返して！！！」

僕はおじさんに飛びついて、ペンダントを取り戻そうとして『それ』に触った。

すると突然、『それ』が光ってすべてを包み込んだ。

僕の意識はそこでいったん途切れる。目が覚めると、

『じじは……どじじ？』

僕は見知らぬ場所に立っていた。

青いナゴの姿で・・・。

プロローグ（後書き）

始めまして！！これからロックマンの小説を書くことになりました、フレイム・ナイトです！！

初めての小説なので、無理矢理な設定で書き進んでいくかもしれませんが、そこは温かな目で見てください。

先輩の方々、なにかアドバイスをもらえたら、うれしいです。

これから、よろしく願います！！！！

「遅いよ、熱斗!!」

ここは学校の教室、メールが遅刻ギリギリでやって来た熱斗に声をかけた。

「は、はは・・・」

熱斗は苦笑いをして席に着いた。すると後ろから、デカオが声をかけてきた。

「まったく、終業式に遅刻してくるなんてバカだな、熱斗」

「本当よ、まったく・・・」

「なっ、遅刻してねえよ!!ギリギリだ!!ギリギリ!!」

熱斗は後ろを向いてデカオとやいとに講義する。

「熱斗君、静かにしなさい!!」

熱斗達の担任・まり子先生が熱斗に注意する。

「はい・・・」

熱斗は前を向いてしかめっ面になる。その後ろでデカオが忍び笑いをしている。

「それじゃあ、一学期最後のホームルームを始めます。」

放課後

「それじゃあ、みんな夏休みを有意義に過ごしてね!!」

「はーーーーい!!!!!!」

「やっと終わった。」

熱斗は大きく伸びをしながらいった。

「さて、なにをしようかな。」

『宿題をするってのは?』

「却下だな」

ロックマンの提案をあつさり却下する熱斗。

『たまには宿題早くやるべきだよ!!熱斗君!!』

「うっ……」と、そのとき、

PPP!! PPP!!熱斗のPETにメールが着信した。

『あつ、メールだ。』

「ナイスタイミング!!」

『……熱斗君、なんか言った?』

「べ、別に!それよりロックマン、メールにはなんて書いてある?」

ロックマンの問いにあわててたぶらかす熱斗を冷たい目を見たロックマンはメールを読んだ。

『パパからだ。えっと、「熱斗、ロックマン、至急科学省に来てくれ!!とんでもないものが発見されたんだ。」だって!!』

「とんでもないものってなんだろう?まあいいや、ロックマン科学省に急ごう!!」

『うん、熱斗君!!』

「熱斗、どうしたの?」

メールが熱斗に話しかけてきた。

「メールちゃん!うん、今パパからメールで科学省に来てくれって。」

「

「そっか、それじゃ何かあったら教えてね。」

「うん、じゃあね……」

熱斗はそついうと教室から飛び出して行った。

第一話 パパからの呼び出し (後書き)

この小説はロックマンエグゼ 5 チームオブブルース、チームオブカーネルを土台にアニメ設定やオリキャラを加えた感じの話なんです。

設定のことは前書や後書きで説明していくつもりですので、余裕があつたら読んでください。

第二話 科学省襲撃！！（前書き）

組み込んだアニメ設定の一つで、熱斗や炎山はネットセイバーになっ
ていますが、アニメのオリジナルキャラクターは出しません。

第二話 科学省襲撃！！

科学省

「パパ！！」

「熱斗、来たか。」

ここは科学省の熱斗のお父さん、光 祐一郎博士の研究室。ここには熱斗とロックマン、光博士しかいない。

「パパ、メールに書いてあったとんでもないものって何？」

「ああ、実は部屋を整理しているときに偶然、その在りかを示したテキストデータを見つけたんだが、それをお前に見つけてきて欲しいんだ。ネットセイバーとしてね。」

「うん、分かったよ、パパ。でもそれってそんなにとんでもないものなの？」

「ああ、それは、……………」

ビーー！！！！ ビーー！！！！突然、科学省の警報が鳴り出した。

「な、なんだ！？」

「誰かが科学省に侵入したんだ！！」

と、そのとき研究室の内線電話から電話が入ってきた。

「ひ、光博士！！」

「落ち着け！一体何が起きたんだ！？」

「突然、科学省の電腦世界に謎のネットナビが現れて科学省の機能を停止しようと暴れているんです！！！！」

「なんだって！！！！」

「パパ、オレがなんとかするよ！！！」

「熱斗、頼む！！！」

『熱斗君！！！！』

「いくぞ！ロックマン！！！」

「プラグイン！！ ロックマン・EXE、トランスミッション！！！」

第二話 科学省襲撃!! (後書き)

短かつ!!!

そして次回、ロックマンが・・・!

第三話 捕らわれた親友

『っ、大変だ、熱斗君！！この辺はほとんど火の海だ！！』

ここは科学省の電脳世界。普段は科学省や一般のナビたちが右往左往しているのだが、

今は謎のナビによって火の海と化している。

「ロックマン、科学省を襲撃しているナビはその奥だ！！」

『うん、行くよ！！熱斗君！！』

ロックマンは、行く道の火をかき分けながら進んでいった。

『そこまでだ！！』

ロックマンの目の前には、スキー板をつけ、ストックを持った雪だるまのようなナビが立っていた。

『ヒュルル、なんだオマエは！？』

『僕はロックマン！！どうしてこんなことをしたんだ！！』

『ヒュルル、僕はブリザードマン。僕はあの方の命令でやってきたんだ。あるナビを連れて来いってな。』

「あるナビ？誰だそのナビは！？」

P E T越しにその様子を見ていた熱斗がブリザードマンに問いかけた。

ブリザードマンは熱斗の問いにヒュルルと笑って答えた。

『オマエのナビだよ!! ロックマン!!!!』

コロコロコロ……。ブリザードマンが答えた瞬間に研究室にボールが投げ込まれた。

「ん、何だこれ？」

「! 熱斗伏せ……」

光博士が言い切る前にボールからガスが放出された。催眠ガスだ。うつ……。」「くつ……。」「
ガスを吸ってしまった熱斗と光博士はそのまま倒れてしまった。

『熱斗君! 熱斗君!! どうしたの? 返事をして!!』

ロックマンはPETに呼びかけるが、熱斗からの応答はない。

『ヒュルル、今オマエのオペレーターがいる部屋に催眠ガス入りボールを投げ込んだのさ!!』

『なんだって!?!』

『ロックマン、このままおとなしくオレについてくるなら、これ以上オマエのオペレーターや父親には手は出さない。

拒むならボールの中の毒ガスを放出する!!!!』

『なっ!!!!』

『さあ、どつする? ロックマン……。!?!』

『ぐっ……。!?!』

ロックマンは嫌な笑みを浮かべるブリザードマンを睨みつけるが、静かに構えを解いた……。

「う、うん・・・ここは？」

「熱斗！！良かった、目が覚めたのね！！」

ベットの側で見守っていたメールが安堵の表情を浮かべる。

熱斗はその後、駆けつけたネット警察に光博士と一緒に保護され、体に異常がないので、

家に運ばれたのだ。

そして今、熱斗の部屋には、お見舞いに来たメール、デカオ、やいとがいる。

「メール、デカオ、やいと！！どうしてここに！？」

「オマエが倒れたつて聞いてな。」

「あわててお見舞いに来たんだよ。」

「でも来てみたらあんた、ぐーぐー寝てるんだから拍子抜けしちゃうたわよ。」

デカオ、メール、やいとに順に答える。

「そっか、あの時研究室にヘンなボールが投げ込まれてそのボールから出た煙を吸って気を失って・・・、」

そのとき、熱斗はブリザードマンとの会話を思い出した。

『オレはあの方の命令でやってきたんだ。あるナビを連れて来いってな。』

「あるナビ？誰だそのナビは！？」

『オマエのナビだよ。ロックマン！！！！』

「そ、そっか、ロックマン、ロックマンは！！！！？」

熱斗は科学省での出来事を思い出し、メールたちに問いかける。

「・・・・・・・・・・。」

みんな熱斗の問いに黙り込んでしまった。

「ど、どうしたのさ、みんな？」

「熱斗・・・。落ち着いて聞いて・・・。」

そのあとのメールの言葉に、熱斗は言葉を失ってしまった。

「ロックマンは、科学省を襲撃したナビに連れさらわれてしまったの……。」

第四話 流星再び！！（前書き）

タイトル見れば分かりますよね？
ついに来るぞ、蒼き流星！！！！

第四話 流星再び！！

——ニホン某所——

ロックマンは色々な種類のコードでイスに体を縛り付けられていた。
『僕に一体、何の用なんだ。』
ロックマンは目の前の画面に映し出されている男に問いかけた。

「ロックマン……、私の野望を確実なものにするには、君の力が
必要なんだ。」

『一体……、何をする気なんだ！！！！』

「君が知る必要はない……。」

男がそう言うと、ロックマンの目の前の画面が消えた。

『……熱斗君……。』

一人になったロックマンは、熱斗の名を呟いた……。

——熱斗の部屋——

「ロックマン……。」

熱斗はベットに寝転びながら、ロックマンの名を呟いた。

あの後、熱斗は急いで科学省に向かった。ロックマンを連れ去ったナビがどこにいるか
分かるかもしれないと思って……。

「パパ！！」

「熱斗！体は大丈夫なのか！？」

「大丈夫だよ!!それより、ロックマンがさらわれたって、早く助けに行かなくちゃ……!!!」

「熱斗!!落ち着きなさい!!!」

光博士はパニツクになっている熱斗を落ち着かせた。

「今さつき、やっと科学省の修復が始まって、科学省を襲撃したナビの行方をネット警察が追っているんだ。」

「ロ、ロックマンは?」

熱斗の問いに光博士は、

「科学省の電腦、その近辺も探したんだが行方が分からないんだ。やはり、あのナビに……。」

「そ、そんな……。」

「とにかく、何かあったらすぐに知らせるから、お前は家で休んでいるんだ。いいな……。」

「う、うん……。」

そうして今、熱斗は家で科学省からの連絡を待っているのだ。

「ロックマン……。」

PPP!!! PPP!!! 突然、PETにメールが着信した。

「!パパからか!!!」

メールには、『ネットセイバーの方々に連絡します。今さつき科学省にまたナビが襲撃してきました!!至急、科学省へ来てください!!!』と、書いてあった。

「な、また!!もしかして、ロックマンをさらったナビかも!!!」

そう言つと熱斗は家を飛び出し、科学省に向かった。

「あ、開かない・・・!!」

ここは科学省の入り口。

今ここには熱斗だけではなく、メールを見てやって来たネットセイバーや非難した科学省の研究員たちがいる。

だが扉は電子ロックがかけておられ、入ることが出来なくなっている。

「ち、ちくしょう・・・。ロックマン、どうす・・・、」

熱斗はロックマンに話しかけようとするが、ロックマンのいないことに気づき黙ってしまふ。

（オレには何も出来ないのか・・・。）

「ど、どうすれば・・・」

「僕に任せて!!熱斗君!!!!」

そう聞き終わるか終わらないうちに熱斗の前に青いナビが現れた。

「な・・・!!?」

青いナビは扉に手をかけ、扉を無理矢理こじ開けた。

「オ、オマエは・・・
熱斗は震える声で青いナビの名前を言った。

ス、スバル！！！！」
「久しぶり！！熱斗君！！！！」
青いナビ、スバルは笑顔で答えた。

第五話 新コンビ結成！？（前書き）

こちら辺からギャクが入ってきます。

第五話 新コンビ結成！？

「ス、スバル！！！」

「久しぶり！！熱斗君！！！！」

熱斗の前に現れたのは以前、クロックマンというナビにロールとハープ・ノートがさらわれたとき、二百年の時を越え、一緒に協力してクロックマンから二人を助けたことのある流星のロックマンごとと星河 スバルだった。

「オ、オマエ、どうしてここに！？」

「説明は後！！早く科学省を襲撃しているナビを何とかしなくちゃ！！！！」

『そういうこった、急ぐぞコラ！！』
突然、スバルの左腕がしゃべった。

「げ、腕がしゃべった！？」

熱斗が驚くと、

『コラー！！オレを忘れたのか！？ウォーロックだ！ウォーロック！！！！』

と、腕がまたしゃべった。そう、この腕のアーマーに変身しているものこそが、

スバルとともに数々の戦いを繰り広げてきた相棒、ウォーロックである。

「あ、ごめん、忘れてた。」

『わーーーーすーーーーねーーーーるーーーーなーーーー!!!!!!
!』

「ロ、ロツク、落ち着いて……。」

熱斗、ウォーロツク、スバルの順に話す。

「と、とにかく急ごう。」

スバルの言葉に熱斗とウォーロツクはケンカをやめ、科学省の中に入った。

「襲撃されているのは、科学省のメインルームの電腦だ。」

熱斗とスバルは、急いでメインルームへと向かった。

———メインルーム———

「って、急いで来たはいいけど、ロツクマンがいないからプラグインが出来ないの
すっかり忘れてた!!」

「えっ、ロツクマンいないの?」

『なんでだよ?』

スバル、ウォーロツクの順に問うと、

「あ、それは……。」

熱斗は答えに声を詰めさせてしまう。

「熱斗君、それなら僕をプラグインして!!」

「えっ!!!?!」

「僕が電腦世界に行つて、ナビをやつつけてくる!!!熱斗君は僕をオペレートして!!!」

「スバル・・・、分かったぜー!!」

スバルは熱斗が了承すると、熱斗のPETに入っていくた。

「行くぜスバルー!!」

ブラグイン!!! シューティング・スターロックマン、トランスミ
ッションー!!!」

「そこまでだー!!!」

ここはメインルームの電腦の中心地、スバルは今科学省を襲撃し
ているナビと向き合っている。

『ヒュルルー、ロックマン!?どうしてここに!?!』

「オ、オマエはブリザードマンー!!」

「熱斗君、知っているナビなの!?!」

ブリザードマン、熱斗、スバルの順に話す。

「ああ、あいつがロックマンを連れ去ったんだ。」

「なんだって!?!」

『ヒュルルー、どうやらオマエはロックマンではないようだな。』

「今すぐ科学省への襲撃をやめるんだ!?!」

『ヒュルルー!!! そうはいかないぞー!!!』

ブリザードマンはスバルに向けて戦闘体勢をとる。

「熱斗君いくよー!!!」

「任せろ、スバルー!! バトルオペレーション、セット!?!」

「インー!!!」

第五話 新コンビ結成！？（後書き）

次回、初のネットバトル！！！！

第六話 VS ブリザードマン!!!

「ロックバスター!!!」

『ヒュルル、当たるもんか!!!』

ブリザードマンはロックバスターを難なくかわす。

『次はこっちの番だ!!!スノーローリング!!!』

ブリザードマンの目の前に突然、二つの雪玉が現れてスバルの方に転がってきた。

「バトルチップ・クラックアウト、スロットイン!!!」

熱斗がバトルチップを送ると、スバルの前に落とし穴ができて雪玉は二つともその中に落ちていってしまった。

「ありがとう、熱斗君!!!」

「ああ、でもこれ以上ここで戦うと科学省が機能しなくなっちゃう。早くケリをつけよう。」

「うん、熱斗君!!!」

『ヒュルル、そう簡単に倒されるもんか!!!ローリングスライダ
ー!!!』

ブリザードマンは雪で身を包むとスバルに向かって転がってきた。

「バトルチップ・フウジンラケット、カスタムボルト、ダブルスロ
ットイン!!!」

熱斗がバトルチップを送ると、スバルの腕がラケットに変化した。

「フウジンラケット!!」

スバルがラケットを振ると、突風が起こりブリザードマンの身を包んでいた雪は吹き飛ばされ、ブリザードマンは無防備同然になった。

「ゲツ、ま、まずい!!」

「トドメだ!!カスタムボルト!!」

スバルの腕はいつの間にかラケットから細長いキャノンに変わっていて、そこから放出された電撃がブリザードマンに直撃した。

『あぎゃぎゃぎゃぎゃ~~~~!!』

変な叫び声をあげ、ブリザードマンはその場に倒れた。

「答える!!ロックマンをどこに連れてった!!」

熱斗はブリザードマンに問いかける。

『ヒュ、ヒュルル、あ、あいつは僕達の、ネビュラのき・・・ちに・・・』

そう言つとブリザードマンは力尽き、消滅した。

「ネ、ネビュラだつて!？」

ネビュラとは、地球征服を企んでいたDr・リーガルが結成した組織で、

熱斗とロックマンの活躍で壊滅したはずの組織だ。

「やっぱり、ネビュラだつたんだ。」

スバルは、静かにそう呟く。その呟きを、熱斗は聞き逃さなかった。

「やっぱりって、スバル！？オマエ最初からネビュラの仕業だって知っていたのか！？」

スバルの最初から知っていたような口ぶりに驚く熱斗。

「うん、実は僕たちはそのためにここにきたんだ。」
そうしてスバルは驚愕の言葉を口にする。

「僕たちはネビュラと手を組んだ二百年後の科学者、Dr・ガルナを追ってきたんだ。」

第六話 VS フリザードマン……！（後書き）

短かつ！！

それより次回、敵の正体が明らかに！！？

第七話 再び、この時代へ・・・

科学省襲撃前 二百年後の世界

「ヨイリー博士、それはどうゆうことですか!？」

『クロックマンの暴走は事故じゃないってどうゆうことだよ。ヨイリーばあさん!?!?』

スバルとウォーロックはヨイリー博士に詰め寄っていた。

スバルとウォーロックはヨイリー博士に呼ばれ、ここ、WAXA研究室に来ていたのだ。

「スバルちゃん、ロックちゃん、落ち着いて。順に話すから。」

ヨイリー博士が二人を落ち着かせる。

「今言ったとおり、クロックマンの暴走はただの事故じゃないの。」

『だから一体、どうゆうことだよ?』

ウォーロックの問いにヨイリーは、

「実はクロックマンの暴走する数日前、誰かがクロックマンのデータをコピーしようとしていたの。クロックマンは無理矢理データをコピーされたことが原因で暴走していたのね。」

「そ、そうだったんだ。」

『たくつ、誰だよそんな人騒がせなことしてくれたのは!?!?』

「私だよ……………」

「……………!!!!」

謎の声が聞こえると同時に、研究室の画面に謎の男が現れた。

「誰だ!!オマエは!!!?!」

スバルの問いに男は、

「私の名は…………、Dr・ガルナ!!!」

「Dr・ガルナ…………?」

『一体何のようだ!?!』

ウォ・ロツクの問いにガルナは、

「なに、あいさつがてらの宣戦布告にね。」

「なつ…………。」

「ああ、その前にヨイリー博士には謝罪しておかなくてはね。クロツクマンのデータをコピーしたのは私だ。」

「なんですって!!!」

「クロツクマンのデータを使って、なにをする気だ!!!」

「過去に行くのさ…………。」

「…………えつ…………」

「過去に行き、我が偉大なる先祖Dr・リーガルと共に世界を手

入れるんだ!!!」

『じゃ、正気か?こいつ?』

「信じる信じないも君たちの勝手だ。だが、クロックマンの力で過去に行けたのは実証済みだろ?」

「……!!!」

「私はここに宣言する!!! 私はDr・リーガルと共に、この世界をダーク・キングダムへと創りかえるのだ!!! フッフ、ハーハーハ!!!」

Dr・ガルナがそう言い終わると同時に通信は切れた。

「……ヨイリー博士。Dr・リーガルとは?」

「ええ、二百年前、ネビュラという組織を結成し、世界を混乱に陥れた人物よ。」

「二百年前!!!?」

スバルとウォーロックは驚いた。二百年前の世界といえば、熱斗とロックマンのいる時代だからだ。

「まずい!!!このままじゃ熱斗君たちが危ない!!!」

『ヨイリーのばあさん!俺たちも過去に行こうぜ!!!』

「……ええ!!!」

次の日

「覚悟はいいわね、ロックマン?」

「はい!!!」

ここはWAXXA本部前、今ここには、スバルやウォーロックを始

め、ハーブ、ミソラ、委員長にゴンタ、キザマロ、ツカサ、そしてヨイリー博士にクインティアやジャックなど、スバルたちを見送りに来た人々が勢ぞろいだ。

「スバル君、がんばってね!!」

『ポロン、ウォーロック、あんま心配かけるようなことしないでね。』

「スバル君、帰ってこなかったら承知しないわよ!!!」

「スバル君、必ず帰ってきてください!!!」

「ウオ~~~~!!スバル!!!大盛り牛丼作って待ってるからな!!!」

「必ず、帰ってきてね!!!」

「決着つける前にくたばるんじゃないぞ!!!」

「・・・がんばって!!!」

ミソラ、ハーブ、委員長、キザマロ、ゴンタ、ツカサ、ジャック、クインティアの順に話す。

「うん、まかせて!!!」

「さつさとあのガル何とかいうやつぶっ飛ばして帰って来てらるぜ!!!」

「あらあら、元気ねえ、ロックちゃん。でもね・・・」

この後のヨイリー博士の言葉にみんな黙ってしまう。

クインティアの順で、
スバルたちに声援を送る。

「みんな・・・、ありがとう!!!」
スバルはそう言うとワープホールに飛び込んだ。スバルが入ると、
ワープホールは消滅した。

「がんばって、私たちの青き流星・・・。」
ミソラはそういって、空を見上げた。まるで、流星に願いを懸けるように・・・。

第七話 再び、この時代へ・・・（後書き）

暁ファンの皆さんスイマセン、暁はクライマックスから出てくるんです。

第八話 目指すはオラン島！！（前書き）

この小説、過去を変えてしまつとかそついつこと考えないで進んでいきます。

（m）——（m）じゅめんなさい、許してください。

第八話 目指すはオラン島！！

「・・・と、いう理由なんです。」

ここは科学省のメイnlーム。ブリザードマンを倒した後、スバルは自分がなぜ、未来からやって来たのか、Dr・ガルナのこと、Dr・ガルナがネビュラと共に世界をダーク・キングダムに作り変えようとしていることを話した。

「なるほど、それで君は未来から・・・。」

光博士が言った。今ここには、熱斗、スバル、光博士に名人、伊集院 炎山がいる。

「まさか、あのDr・リーガルが生きていたとは・・・。」

「しかも、未来の科学者と手を組んでいるとは・・・。」

名人、炎山が話す。

「でもスバル？犯人がネビュラだとして、なんで奴らはロックマンを連れ去ったんだ？」

熱斗の問いにスバルとウォーロックは、

「さあ、僕もそこまではわからないよ・・・。」

『っていつか、俺たちが知りたいぜ！！』
と、答える。

「おそらく、アレが関係しているんだろう。」

光博士が突然話し出した。

「博士、何か心当たりがあるのですか？」

名人の問いに光博士は、

「ああ、熱斗、前に『ネットセイバー』として探してきて欲しいものがある』と話したことを覚えているか？」

「うん、何かとんでもないものの在りかを示したテキストデータが見つかったって。」

「実はブリザードマンはスバル君と接触する前、そのテキストデータを引き出そうとした形跡があるんだ。」

「……………!!」「……………」

「熱斗に探してきて欲しいと頼んだものは『ホープ・キー』といい、私の父、光 正が作り上げた究極プログラムを遥かに凌ぐ力を秘めたプログラムなんだ。」

「なっ、あの究極プログラムを遥かに凌ぐ……………!!!?」

みんなが驚くにも関わらず、光博士は話を続ける。

「詳しいことは私にも分からないが、父はそのプログラムが悪用されることを恐れ、世界のどこかにそれを隠し、私はそのプログラムの在りかを探し続けてきた。」

「そして、その在りかを示したテキストデータを見つけた……………」
「そうだ。」

炎山の言葉に光博士が頷く。

「でも、それとロックマンがどう関係してるって言うんだ!？」

熱斗の問いに光博士は、

「それは私にも分からない。だが、ネビュラは『ホープ・キー』の力を使って何かをしようとしている可能性がある!! 熱斗! オマエは炎山君と一緒に『ホープ・キー』を手に入れてきてくれ!!」

「僕たちも力を貸すよ。熱斗君!!」

『まっ、大船に乗った気でいな!!』

「スバル、うでナビ・・・、ありがとう!!」

「うん!!」

熱斗に笑顔で返事をするスバル。

『だからうでナビ言うな!!!!』

怒るウォーロック。

「オレからもよろしく頼む。」

そついうと炎山はスバルに手を差し出した。

「はい、よろしくお願ひします!!」

『まかせときな!!』

スバルは差し出された手を握る。

「で、パパ!! テキストデータには『ホープ・キー』はどこにあるって書いてあったの?」

「ああ、『ホープ・キー』は・・・」

オランダ島にある!?!?!

第九話 それぞれのチーム

「着いた!!!」

ここはオラン島。ホープ・キーを手に入れるため、熱斗、炎山、スバル。

そして、これまでのいきさつを聞いた、メイル、デカオ、やいとが来ている。

「ここがオラン島か。」

「風が気持ちいい。」

「いつ来てもいいわね。」

「ふん……。」

「おお〜」

『「ペットの中だと良く分からない（分からん）……」』（スバルは通常は電波変換したままで、熱斗のPETの中にいる。）

熱斗、メイル、やいと、炎山、デカオ、スバルとウォーロックの順に話す。

「パパの話だと、おじいちゃんはホープ・キーを廃鉱の中に隠したみたいなんだ。」

「よし、何人かに分かれて探そう。」

炎山の提案にみんなは、

「私、熱斗と行く!!!」

「オレは絶対メイルちゃんと!!!」

「しょ、しょうがないから炎山と行ってあげるわ!!!」

上から、メイル、デカオ、やいとの順に、チーム分けを言い争っている。

「クジにしよう……。」

『妥当なラインです。炎山様。』

三人が言い争っている間に炎山とブルースがくじで決めようとする。

三十分後……

やっと3チームに分かれて廃鉱探検に向かった。

（炎山・デカオチーム）

（まさかこいつと組むことになるとは……。）

（メ、メイルちゃん、オレはなんてついてないんだ……。）

「な、なあ、炎山。」

デカオが炎山に声をかける。

「どうした？」

「……お前、卵料理好きか？」

「……どこを見て思った、そんな質問？」

「あ、いや、なんとなく……。」

異色のコンビはそれ以後、何も話さず黙々と廃鉱の中を進んでいく……。

（メイル・やいとチーム）

「岩ばかりだね、やいとちゃん。」

「そうね、メールちゃん。」

メールたちは辺りを見渡しながら進んでいく。

「熱斗、大丈夫かな・・・」

「大丈夫よ、メールちゃん。一緒にいるスバル君ってしっかりしてるみたいだし。」

「そうじゃないの。熱斗、ロックマンのことで不安になってるんじゃないかなって・・・。」

「あっ・・・」

そう、熱斗にとってロックマンは頼れる親友であり、大切な家族なのだ。

それを危険極まりない組織に連れさらわれてしまったので、気が気ではないはずだ。

「大丈夫ですよ、メールさん。」

突然、やいとナビ・グライドが話に入ってきた。

「グライド・・・」

「ロックマンは死んだり（デリート）しません。それに、ネビュラにとって」

「ロックマンは何か必要な存在みたいですから、危害を加えるようなことはしないと思います。」

「グライド・・・」

「そうだよ！メールちゃん！！」

今度はメールのナビ・ロールが話に加わってきた。

「ロックマンは大丈夫、必ず帰ってくる。ううん、今度は私たちがロックマンを助ける番なんだよ！！！！今まで、助けてもらってき

たように……!!!!」

「グライド、ロール……。うん、そうだね!!」

メイルはグライドとロールの話を聞いて、元気が沸いてきたようだ。

「じゃ、キー探しに戻るわよ!」

やいととメイルは、廃鉱の奥に進んでいく……。

〈熱斗・スバルチーム〉

「ここにもないか……。」

熱斗は廃鉱の中をくまなく探していた。

「熱斗君……。」

不意に、PETの中からスバルが熱斗に声をかけてきた。

「どうした、スバル?」

「ちよつと気になることがあるんだ。」

「なんだよ?」

「なぜ、リーガルはホープ・キーのことを知ってたんだろう?」

「えっ……。」

熱斗は、スバルの疑問がよく解っていなかった。

「だって、悪用されるのを恐れて、こんな場所に隠したんでしょ? なら、熱斗君のおじいさんは光博士以外にはホープ・キーのことについては誰にも言っていないはずだよな?」

「た、確かに……。でも、ならなんでリーガルはホープ・キーのことを知ってたんだろう? いやそれよりも、なんでロックマンを……?」

「なにか、関係があるんじゃないかな。ロックマンとホープ・キー

には……。」

「関係って？」

『どんなだよ？』

熱斗とウオーロックの問いにスバルは、

「僕にも分からないよ。でも、きっと過去に何かあったんだ。

光 正博士とロックマンの間で、何かが……。」

「ロックマンとおじいちゃんの間で……？」

『けっ、んなことより、鍵探すほうがいいんじゃないのか？』

ウオーロックの言葉に熱斗とスバルは、

「そ、そうだな。」

「今、こんなこと考えてもしょうがないよね。」

熱斗はまた、廃鉱をくまなく探し始めた……。

—— 同時刻 某所 ——

『リーガル様……。』

「シールドマンか……。」

『光 熱斗たちがオラン島にいることが判明しました。』

「そうか、ホープ・キーを捜しに来ているのか。」

シールドマン、奴らよりも先にホープ・キーを手に入れる。」

『はっ……!!』

そういうとシールドマンは一瞬で闇の彼方へと消えた。

「リーガル様……。」

そこに一人の男が部屋に入ってきた。

「ガルナか……。」

そう、部屋に入ってきたのはリーガルの子孫、Dr. ガルナである。

第九話 それぞれのチーム（後書き）

スバルとかは、OSSみたいに電波変換を解かずに、常時PETの
中にいます。

第十話 意外な落とし穴? (前書き)

ウォーロック

『 眞実はいつも一つ!?!! 』

スバル

「何やってるの?ウォーロック」

ウォーロック

『 いやな、この話でオレの名推理が披露されるからその決め台詞の練習を・・・ 』

フレイム・ナイト

「えっ、そんな風にしたっけ?迷推理すらやってないと思うんだけど・・・?」

ウォーロック

『 うおおおおおい!!? 作者!?!?!? 』

第十話 意外な落とし穴？

熱斗たちが廃鉱探検に出発して一時間三十分後・・・

「・・・・・・・・どこにもない・・・。」

みんなはそれぞれ違うところにいて、PETで連絡を取り合っている。

「廃鉱内はくまなく探してはみたが・・・」

「全っ然見つからねえ。」

「こつちも・・・」

「ほんとにそんな鍵あるの!？」

「パパはオラン島にあることは確かだつて。」

「どこにあるんだろう。」

炎山、デカオ、マイル、やいと、熱斗、スバルの順に話す。

熱斗たちは廃鉱の中をくまなく探したが、鍵らしき物はどこにも見つからなかった。

『こりゃ、意外な落とし穴があつたのかもしれないなあ。』

突然、ウォーロックが話に入りこんできた。

「えっ!」

「どつゆつことだよ。うでナビ。」

『ウォーロックだ!! 考えても見る。そのホープ・キーって鍵は熱斗の野郎のじいさんが作ったプログラムなんだろ。プログラムなら、現実世界より電脳世界を探したほうが良くないか?』

「あつ、そうか！」

ウォーロックの推測に、みんなハツとした顔になる。

「このオラン島で隠し場所にもってこいの場所といえば・・・」

「大くうどうの削岩機の電腦よー！」

「よし、みんな行くぞー！」

——大くうどう——

「削岩機は全部で四つか・・・。」

炎山が呟く。大くうどうには四つの削岩機があり、その四つが中央の巨大ドリルを動かすのである。

「どうする？」

「四つに分かれて探そう。」

熱斗の問いに炎山はまた分かれて探すことを提案する。

「じゃ、じゃあ今度こそオレはメールちゃんと・・・。」

「クジで決めるぞ・・・。」

『妥当なラインです。炎山様・・・。』

デカオの言葉を炎山とブルースが遮る。

五分後・・・。。。

——さくがんきの電腦——

『メールちゃん、がんばって探そうー！！』

「ええ、頼んだわよ。ロール!!」

ロールは一人、とてもはりきっている。

(ロック、必ず助けるから待っていてね!!!)

ロールはその思いを胸の中に秘め、電腦世界を進んでいく。

—— さくがんきの電腦 二 ——

「ブルース、何か変わった反応はあるか？」

『いいえ、炎山様。特に目立った反応はありません。』

「そうか……。よし、その電腦のコントロールシステムのところへ行ってくれ。」

そこが一番怪しい。」

『はっ、炎山様。』

ブルースはそう言うと、電光石火の速さで奥へと向かった。

—— さくがんこの電腦 三 ——

「ど、どうしてまた……。」

「がたがた文句を言わないの!!」

しょぼくれるデカオをやいとが怒鳴る。

『デカオ、大丈夫でガッツ?』

『元気を出してください、デカオさん。』

ガッツマンとグライドがデカオを励ます。

「さっ、とにかく進むわよ!」

「とほほ……。メールちゃ〜ん。」

ガッツマンとグライドは苦笑いをしながら進んでいく。

—— さくがんきの電腦 四 ——

「さて、どこから探そうか・・・。」

『テキストに探せばいいじゃねえか。』

スバルの言葉にウォーロックはどうでもいいような声を出す。

「だめだよ、真面目に探さなくちゃ！ 熱斗君、何か心当たりない？」

「そうだな、初めてきたからな！。とにかく奥へ行ってみよう。」

「了解、熱斗君。」

スバルはそういうと奥へと向かって行った。

シールドマンにつけられてるとも気づかず・・・。

第十一話 パストビジョン（前書き）

今回入るパストビジョンはゲームとは違うところですよ。

第十一話 パストビジョン

『んっ！待てスバル！』

奥へと進むスバルをウォーロックが止める。

「どうしたの？ウォーロック？」

『あそこに何か光るものがないか？』

ウォーロックが指し示す場所を見ると、そこには青白く光る扉のようなものがあつた。

「な、なんだあれ！？」

「分からない。でも、もしかしたらこの中に……。」

スバルはそういうと、扉に手をかけた。

「入るよ……。」

スバルはそういうと扉を開け、中に入ってしまった。

「……ここは、オラン島？」

スバルはオラン島の砂浜に立っていた。

だが所々が違っていた。砂浜と港には壊れたスピーカーが立っていた、

廃鉱入り口にはいくつかの壊れたトロツコが散らばっていた。

『まるで、過去のオラン島のようだな……。』

「そうだね、十年くらい前のオラン島みたいだ。……あれ？」

『どうしたスバル？』

ウォーロックの問いにスバルは、
「あそこ、なにかキラキラ光ってる。」
スバルが指差す方向には、小さな滝が流れていて、滝つぼがきら
きらと光を放っている。
「もしかしてあそこに……!!」
「行ってみよう!!」

『くろうだつたな……』

「……!!!!」
「……!!!!」
スバルが声がした方向を向くと、そこにはコウモリのような姿を
したナビが空中に浮いていた。

「オマエは誰だ!!?」
『キーキキキ!!私の名はシェードマン!!ネビュラのナビだ!!』
「!!」
シェードマンは腕の翼を広げながら言った。

「シェードマン……?」

『ネビユラのナビだと!?!』

「生きてたのか……!?!」

上から順に、スバル、ウォーロック、熱斗の順に話す。

『私はリーガル様の命により、ホープ・キーを手に入れに来たのさ・
……。』

「なんだって!?!」

『だが自分で探すより、君たちがキーを見つけるのを待ったほうが
効率がいいと思って、』

ずっと君たちの後を付けてきたのさ。』

「相変わらず卑怯なやつだな!?!」

熱斗はシェードマンに向かって叫ぶ。

『キーキキキ!?!自分のナビも守れないような奴に言われたくない
ね。』

「……!?!」

シェードマンの言葉に熱斗は黙ってしまふ。

「ひどい、全部お前たちがやったことじゃないか!?!」

スバルは怒鳴るようにシェードマンに向かって叫ぶ。

「スバル……。」

「熱斗君、シェードマンに絶対ホープ・キーは渡しちゃいけない!

!?!」

『スバルの言うとおりだぜ!?!熱斗!?!』

スバルとウォーロックが熱斗を励ますように呼びかける。

『キーキキキ!?!美しい友情だね。だが……、』

それも砕け散る！！！』

「熱斗君、いくよ！！！！」

「ああ、いくぜスバル！！！！ バトルオペレーション、セット！！！！」
「イン！！！！」

第十二話 VS シェードマン!!!

「ロックバスター!!!」

スバルはシェードマンに向かって数発の弾を撃ち込む。だが、シェードマンはそれを余裕で交わす。

「次はコチラの番だ！クラッシュユノイズ!!!」

シェードマンは超音波をスバルではなく、砂浜の壊れたスピーカーに向かって放つ。

「けっ!どこ狙ってやがる!!!」

ウォーロックはシェードマンが見当違いの場所に超音波を放つことを鼻で笑う。

「君をだよ・・・」

シェードマンが言い終わるとスピーカーに超音波が当たった。すると超音波はスピーカーを中心に広範囲に広がり、砂浜にいたスバルは超音波をモロに食らってしまった。

「うわああああ!!!」

スバルは悲鳴を上げながら海に吹っ飛ばされた。

「ど、どうなってるの!?!」

スバルは、けほけほとむせながら言った。

「キーキキキ!!!私の超音波は物に当たるとそこを中心として広範

「困に広がるのだ!！」

『ちっ、厄介な技だぜ!！』
ウォーロックが舌打ちする。

『キーキキキ!！まだまだ!！レッドウイング!！!』
シェードマンの前に黒い三日月の裂け目が現れ、そこから黒い小さなコウモリが出てきて、スバルに襲い掛かる。

「バトルチップ・ヒートボディ、スロットイン!！」

熱斗がバトルチップをスロットインするとスバルの体が燃え上がり、コウモリたちは燃えてしまう。
しかしあまりのコウモリの多さに燃え尽きなかったコウモリたちがスバルを襲った。

「うああああ!！!！」

「スバルは悲鳴を上げるとそのまま地面に両膝をついてしまった。

「くっ! はあ、はあ、はあ!！」

スバルはあまりのダメージに立てなくなっている。

『キーキキキ!！弱い、弱すぎる!！お前の力はその程度の力なのか!？』

「ぐっ……!！」

熱斗はシェードマンの圧倒的な力の前に言葉が出せない。だが、

「僕は……、あきらめない!！!！」

スバルはそういつと立ち上がり、シェードマンをにらみつける。

『なに！！オマエの体力はすでに限界のはずだ！！なぜ立てる！？』
シードマンはスバルが立ち上がったことに驚きを隠せないでいる。

「当たり前だ！！友達を助けたいと思う心が力を、勇気をくれる！
！それがキズナの力だ！！！」

「……！！！」

スバルの言葉に熱斗は目を見開く。　スバルはさらにシードマンに向かって叫ぶ。

「お前たちはみんなの未来を奪おうとしている、そんなこと絶対させない！！」

そして……、ロックマンは必ず助け出す！！！」

（そうだ……、こんなところでへこたれてる場合じゃない。リーガルとガルナの野望を食い止め、そして、ロックマンを助けるんだ！！！！）

熱斗はスバルの言葉に、自分のやるべき事と勇気を取り戻しているのを感じた。

「スバル、シードマンを倒すぞ！！！」

熱斗はPETに向かって叫ぶ。

「熱斗君！！！！」

『当然だ！！！！』

スバルとウォーロックは元気よく返事をする。

『キーキキキ！！やれるものなら……やってみろ！！！！』

シールドマンはそういうと胸元に力をこめ始めた。

「くっ、どうすれば……、まてよ……。」

熱斗はそういうとさっきシールドマンが言ったことを思い出した。

『私の超音波は物に当たるとそこを中心に広範囲に広がるのだ!』

「そうだ!!!」

熱斗はホルダーから一枚のチップを取り出した。

『ハイパークラッシュユノイズ!!!』

シールドマンはそういうと今までと比べ物にならない超音波を放った。しかし……、

シールドマンの目の前に小さな『プリズム』が現れた。

『なっ・・・！！！！』

シールドマンがすごい終わるか終わらないうちに、超音波を吸収したプリズムが

超音波を四方に広げ、シールドマンに超音波が直撃した。

『くおおおお！！！！』

シールドマンは体が麻痺してしまい、動けなくなってしまった。

「やった！！！！」

熱斗はすごいながら、ガッツポーズを組む。

『ど、どうなってんだ？』

ウォーロックは状況が飲み込めず、呆然としている。

「そ、そうか！！シールドマンが超音波をだした瞬間に熱斗君はバトルチップ・プリズムを

シールドマンの目の前に出現させ、超音波の威力を何倍にも上げてシールドマンに食らわせたんだ！！！！」

「そういうこと！！スバル、今がチャンスだ！！！！バトルチップ・フミコミクロス、スロットイン！！！！」

熱斗がバトルチップを転送するとスバルの両手がロングソードに変わった。

「ウォーロックアタック！！フミコミクロス！！！！」

スバルはウォーロックアタックでシールドマンの目の前に現れると、両手のソードでシールドマンを思いっきり切りつけた。

『があああああああああ！！！』
シェードマンはそのまま灰に変わり、消滅した。

「か、勝った……。」

スバルはそう言うと静かにその場に倒れこんだ。

第十二話 VS シェードマン……！（後書き）

次回、ホープ・キー発見!!!？

第十三話 THE PEACE OF ONE

「う、うくん・・・？」

スバルは少し唸りながら、ゆっくりと目を開けた。スバルは砂浜に仰向けに寝転んでいて、ロール、ガッツマン、グライド、ブルースが心配そうにスバルの顔を覗き込んでいた。

「あれ、みんな・・・？どうしてここに？」

スバルは寝転んだまま問いかけた。

『熱斗さんから連絡があつてみんなで来たの。』

『来たらスバルが倒れていてビツクリしたでガス。』

『それでここまでスバルさんを運んで、ロールさんのいやしの力でスバルさんの怪我を治したんです。』

『しかしここにパストビジョンがあつたとは・・・』

ロール、ガッツマン、グライド、ブルースの順に話す。

「パストビジョン？」

『現実世界の特定の時間や場所をまるごとデータ化し、保存しておく技術のことだ。』

保存された現実世界は、電腦世界でそのまま再現される。

二十五年程前に作られた技術なんだが、実用化されず、電腦世界のいたるところに

ここのようなパストビジョンへ通じる扉が残されてしまったらしい。

『

「そうだったんだ・・・。」

スバルはそういいながらゆっくりと起き上がる。

「スバル!!!大丈夫か!?!」

熱斗が心配そうな声でスバルに呼びかけてきた。

「熱斗君!!!うん、ロールちゃんのおかげで全回復だよ!!!」

スバルは元気な声で熱斗を安心させる。

「おいスバル、こんなことしていいのかよ?」

突然、ウォーロックがスバルに話しかけてきた。

「えっ、あ、そうだ!!!」

スバルはそういうとみんなを退け、小さな滝つぼに向かって走った。

「スバル君、どこいくの!?!」

「ガツガツ?」

ロールとガッツマンがそういうとみんなスバルの後を追って、滝つぼに走った。

「ここに何かがあるんだ……」

スバルをそういうと滝つぼの水に両手を突っ込んで探し始めた。

ブルーたちも事情を熱斗から聞き、探し始めた。程なくして、スバルの指に何か金属のようなものが触れた。

「あつた!!!」

スバルはそういうと金属をつかみ、水の中から引き上げた。

「これが、ホープ・キー……」

ロールが金属を見て眩く。だが、

「……………これが……!?」「……………」

みんなはそれを見て、鍵と思うことが出来なかった。なぜならその金属は、ペンダントにするような長いチェーンが付いてあるが、

淡い光を放つただの約五センチの長さ金色の棒だったからである。

「これは……」

『どうみても……』

『鍵じゃねえよな……』

言葉をにがらすスバルとグライドに変わってウォーロックが話す。

「見つけたのか!!よくやったなみんな!!!」

あの後みんなはパストビジョン内を探索したが、鍵らしき物は見つからず、

光博士に連絡をとったのだ。

「いや、見つけたというか……。」

熱斗はさっき見つけた金属の棒を光博士に見せた。

「おお、これで一つ目のパーツが見つかったな!!!」

「……………えっ?」「……………」

オラン島にみんなの怒りの怒鳴り声が響き渡っていった・・・。

第十三話 THE PEACE OF ONE (後書き)

パストビジョンは後二、三回出そうかなって考えています。

第十四話 次の目的地と少しのインターバル（前書き）

ウォーロック

「あいつが来るあいつが来るあいつが、あいつが~~~~」

スバル

「ウォーロック……」

スバルは電腦布団に潜りこんでぶるぶる震えているウォーロックをあきれた眼で見ている。

熱斗

「ウデナビがこんなになっちまうなんて、よっぽど恐ろしい奴がいるんだな……。」

熱斗は全長333メートル、全身に真っ赤な装甲を付け、般若のような仮面を付けたロボットを想像していた。

フレイム・ナイト

「熱斗、そんなの出すわけないじゃん、あいつはウォーロックと同じ電波体で、この話の最後に出てくるよ。」

ウォーロック

「なに~~~~~~~~?!?!?!?」

第十四話 次の目的地と少しのインターバル

「まったく、そういう重要なことは早く言ってよ!」

熱斗は光博士にまだ文句を言っていた。

ここは科学省、オラン島でホープ・キーのパーツを見つけた熱斗たちは、

科学省に帰ってきたのであった。

「すまん、すまん、言うのをすっかり忘れてしまっていた。これからは気をつけるよ。」

今日は遅いし、みんな泊まっていたって、ゆっくり休んで明日に備えてくれ。」

光博士はそういうと自分の研究室に戻ってしまった。

「熱斗のお父さんって、けっこうマイペースだよな。」

メールがぼつんと呟く。

『そうだね。』

ロールが相槌を打つ。

「みんな!」

そっぴいなながら、突然名人が部屋に入ってきた。

「名人さん!」

「さんは要らないよ、熱斗君。みんなお泊まりよつのベットは準備できてるから、」

明日に備えて、早めに寝なさい。」

「……は……い」「」「」

みんなそういうと部屋を出て行った。

「……メール・やいとのリベット……」

「やいとちゃん、まだ起きてる？」

ベットに入り込んだメールがやいとに声をかけた。

「起きてるよ、どうしたの？」

やいとがメールの方に顔の向きを変えて答える。

「今日さ、熱斗、廃鉱から帰ってきたときすがすがしい顔してたでしょ？」

あれって、スバル君やウォーロックに元気付けられたんだと思うの。」

「たぶんね、それがどうかしたの？」

やいとの問いにメールは、

「なんか、私がいなくても熱斗は大丈夫な気がして……。」

「……。」

やいとが黙ってメールの話を聞く。

「今日、熱斗はロックマンがいなくなっただけで不安でしようがないはずだから、

私が支えてあげなくちゃって思ってたんだけど、私はいなくても熱斗は……。」

「そんなことないわよ。」

突然、メールの話をやいとが遮る。

「えっ……」

「確かに今回はメイルちゃんじゃなくて、スバル君が熱斗を元気にしたよ？」

でもそれは今回のこと。今までにだってメイルちゃんのおかげで熱斗は元気になったことなんていっぱいあったじゃない。それにこれからだって……。」

「やいとちゃん……。」

「さっ、明日に備えて早く寝よ。」

「うん、やいとちゃん……。」

「んっ？」

「ありがとう。」

「どーいたしました。」

そういうと二人は静かに寝息を立てていた。

~~~~~デカオのベット~~~~~

「ぐおーーーーー、熱斗、オレ様の大勝利だぜ~~~~~……。」

デカオの辞書に緊迫感という文字はない……。

『恥ずかしいでガスよ、デカオ……/ / /』

~~~~~熱斗のベット~~~~~

「うん、ここは……？」

熱斗は真っ白な空間に一人立っていた。

「ど、どこだここ!？」

「夢の中だよ……。」

熱斗が声をしたほうを振り返ると、そこにはノースリーブの白いシャツと白いズボンを着た五歳くらいの男の子が立っていた。

「君は・・・？」

熱斗は男の子に問いかけた。

「僕は、自分が誰かは知らない。肉体だけの存在なんだ。」

「どういうことだよ！？オマエは人間か？それともネットナビ？」

熱斗は少し声を高くして、男の子に問いかけた。

「僕は人間だよ。人は肉体に魂があるときのみ、自分が何者かを知り、肉体は成長する。」

僕は魂を闇に捕らわれてしまっているから、自分が何者か分からないし、肉体の成長は止まったまま・・・。」

「魂がやみに捕らわれているって・・・。」

熱斗の問いに男の子は、

「君の大事な人もそこに捕らわれている。」

「なっ、それってロックマン！！？答えてくれ！！ロックマンはどこにいるんだ！！？」

熱斗は男の子の肩を掴みながらあわてて聞き出そうとする。

「それは僕にも分からない。でも、ホープ・キーを手に入れることがすべてにつながる。」

僕はそれを伝えに来たんだ。」

「えっ？それってどういうことだよ！？」

男の子が何かを話そうとしたとき、突然空間が歪み始めた。

「わっ！！？なんだ！！？」

熱斗は突然のことに驚く。すると男の子が熱斗の手を握って、話した。

「熱斗君、パーツに強く願って、」自分がなぜネビュラと戦うのか
”そう・・・ば、ホー・・・キの・・・力が発・・・する。」
「えっ、それどういうことだよ!!!?」
熱斗は男の子に聞き返すが、その瞬間、男の子の体は薄らいでい
った。

「お願い・・・、」

男の子は熱斗の手を握り締めながら声を振り絞るように言った。

「僕たちを助けて!!!熱斗君!!!!」

ガバツ、

「はあ、はあ、ゆ、夢?」

目が覚めた熱斗は布団から起き上がっていた。

——屋上——

「・・・・・・。」

炎山は一人、屋上に立っていた。

「ブルース・・・。」

『はっ、炎山様。』

「この戦いには、今まで以上に複雑な因縁が絡まっている。
心してかかるぞ・・・。」

『私は炎山様に付いていきます。どこへでも・・・。』

炎山はそれを聞いてわずかに微笑む。

次の日……。

「みんな、おはよう。昨日はゆっくり休めたかな。」

光博士がメインルームに集まったみんなに声をかける。

「はい、おかげさまでぐっすりと良く眠れました。」

メールが代表して答える。

「それよりパパ、次のパーツはどこにあるの!？」

熱斗が光博士に問いかける。

「落ち着きなさい、熱斗! 次の目的地は……、」

音楽の街・フルーラーだ!!!」

—— 同時刻 某所 ——

「リーガル様……。」

「ガルナか……。」

「光熱斗たちに動きがありました。」

ガルナがリーガルに熱斗たちの行動を報告する。

「そうか、次は誰に行かせようか……。」

リーガルは次は誰を送り込もうか考え込む。

「リーガル様、それならアリエルを行かせてはどうでしょうか？」
「アリエル……？ああ、オマエが連れてきた電波生命体とかいうものか。」

「いいだろう……、電波生命体とやらの力見せてもらおう……。」
「は、お任せください……。」
ガルナはそついうと部屋から出て行った。

「アリエル……。」
ここはさつきとは別の部屋。ガルナはアリエルの名を呼んだ。

「は……い。ガルナ様呼んだ？」
ガルナの目の前のディスプレイから調子っぱずれの音が聞こえる。

「フルーラーという街に光熱斗たちが向かったことが分かった。
奴らよりも先にホープ・キーを手に入れるのだ。」

「OK、このアリエルに任せて……！」
「……落ち着いてな……。」
ガルナは少し額に冷や汗を浮かべると部屋を出て行った。

一人になったアリエルが呟く。

「ああ、ウォーロック様……。まっけてね……、今あなたの元へ
行きま……す……！」

アリエルはそついいながら、フルーラーへと電脳世界を爆走して
行った……。

第十四話 次の目的地と少しのインターバル（後書き）

熱斗

「あいつって、女の子じゃないか!!?」

スバル

「何であの子が怖いのだ!? ウォーロック!!?」

スバルはウォーロックが潜りこんでいる布団に叫んだ。
だがウォーロックからまったく反応がない……。

スバル

「ウォーロック……?」

スバルは恐る恐る布団を巡ってみた。だが中にはウォーロックの代わりに置手紙らしき物があった。

スバル

「探さないでください」って、ウォーロック……」

熱斗

「一体あのことがあったんだ……?」

第十五話 音楽の街 フルーラー（前書き）

今回、キャラ別視点に挑戦！！

第十五話 音楽の街 フルーラー

「おお〜。」

「すっげえ〜。」

「素敵な街・・・」

みんながそれぞれの感想を呟く。

ここは、音楽の街 フルーラーの駅前の中央広場。

フルーラーの街は音符をデザインしたビルが立ち並んでおり、街のいたる所から音楽が聞こえてくる。

「って、感心してる場合じゃないや、早くホープ・キーを見つけないと。」

熱斗が我に返ってみんなに呼びかける。

「どうやって探す？」

「マップを見るとこの街は五つのエリアに分かれている。分かれて探そう。」

メールの問いに炎山が提案する。

—— イースト（東）エリア ——

（デカオ視点）

「店員さん音符バーガーとフルーラー・シェイク、おかわり!!」
オレは店員さんに大声で注文した。

オレは今、フルーラーのファーストフード店にいる。

誤解してる人もいると思うが、オレは決して怠けてるのでも、腹が減ったのでもない。

この担当したエリアのマップを見て、これからの行動を考えるためにファーストフード店にいるのである！！

『デカオ・・・、それ思いっきり言い訳でガッツよ・・・／／／』
PETの中から、ガッツマンが顔を真っ赤にしながらオレに言った。

「それは違うぜ、ガッツマン！！このイーストエリアは飲食店が集まったエリアだ。

だから一つ一つの店の料理の中に怪しいものが入ってないか調べてるんだ。

入っていけば、その店にホープ・キーがある可能性があるだろ？」
実際にオレはこの店を除いても二十軒以上の店の料理を食べて調べている。

だがホープ・キーのありそうな店はなかった。やっぱりそう簡単に見つかるものじゃないか。

「よし、ここにはなさそうだな。次に行こう！！」
オレはかつこよく立ち上がって、店を出た。

「よし、次はあそこのカレー屋さんだ！！」
オレの探索はまだまだ続く・・・。
『それはただの食い歩きでガッツ・・・／／／』

「やいと視点」

「ぎゃあああああああ！！！」

私は足元で何か走り抜けていくのを感じて悲鳴を上げた。

なぜこんなことになっているかというと、

このウエストエリアはフルーラーの街の記念館や博物館などを中心に、

街に古くからあるものが多く残っている場所なの。

私は街の人に聞いて、この街の裏通りにあるたくさんの骨董店のうち、

最も古そうな骨董店に入ってしまったの。

「おじやましまゝす・・・。」

私は重くさび付いた扉を開けた。でも中には誰もいなかった。

「あれ？」

私は首をかしげる。

『やいと様、どうやらこの店は廃業しているみたいです。』

P E Tの中からグライドが私に話しかけてきた。

「そうみた・・・ん？」

私は途中で言葉を止めた。崩れた棚の隙間で、何かキラキラ光っていたのが見えたから。

「何かしら？」

私は隙間の中に手を突っ込んだ。でも手が短くてなかなか届かない。

そのときの、私の足元を何か走り抜けていったのは・・・。

「ぎゃあああああああ！！！」

私は思わず手を引つ込めて足元を見た。

「なに！？なんなの！！！」

私はPETを握り締めながら足元を見た。

『やいと様、落ち着いてください。』

グライドが私を落ち着かせようとPETから呼びかけてくれる。

「そ、そうね、これしきのことです……！！！」

私はそういつともう一度隙間に手を伸ばした。そのときなの、
手の先で何かが触れたのは……。

「ん？」

私は隙間に伸ばした手を見る。するとそこにはおおきなネズミが
いた……。

「……ふうおおおおおおおおおおおおおおお……！！！」

「！！！」

『やいと様、やいと様！！しっかりして下さい！！！！やいと様！！！！』

私の意識はグライドの悲鳴にも近い声を聞きながら遠のいていっ
た……。

第十五話 音楽の街 フルーラー（後書き）

次回は炎山とメールと事件発生！！！！

第十六話 老人とオカリナ姫と事件発生!!!

(前書き)

タイトルのオカリナ姫はアンパンマンのオカリナ姫ではありません。

ウォーロック

「当たり前だあ~~~~!!!」

* 無理矢理連れ戻されてむっちな不機嫌なウォーロック

第十六話 老人とオカリナ姫と事件発生！！！！

ノース（北）エリア

（炎山視点）

「ブルース、何か反応はあるか？」

『いえ、この付近には何の反応もありません。』

「そうか……。」

ここはフルーラー・ノースエリア。植物園や花屋など、自然が多いエリアだ。

「音楽の街というより、緑の街だな……。」

オレは周りの多種類の花や木々を見て呟いた。

「ほっほっほっ、そうでもないよ、少年。」

「……！」

オレは声のしたほうを振り向いた。そこにはゆったりとした木の椅子に座った老人がいた。

「少年、音楽がどうやって生まれたか知ってるか……？」

オレは老人の出した問題が分からず、首を傾げてしまう。

「いろいろな話があるが、一説には音楽は、森の神が人間に音を与えたことが始まりだといわれている。」

この街の人々は、皆そう信じている。だからこのエリアは自然が多く残されておるんじゃない。」

「はあ……。」

この老人は一体何が言いたいんだ？オレは老人の言葉を黙って聴いている。

「森の神が音を与えた人間はな、戦いに身を投じるようになり、なぜ戦うのか忘れてしまっていた人間だったんだ。」

森の神はその人間を哀れに思い、音を与えた。そしてこう言ったんじゃない、『なぜ、戦う？』つと。」

「……。」

オレはその人間が自分と似ているような気がした。オフィシャルとして戦うのは当然だと思っていたオレに……。

「するとその人間はこういったんじゃない、『ありがとう、あなたのおかげで、自分がなぜ戦うのかが分かりました。助けを求める人々を守りたいと思うからです。だから、私はこれからも戦い続けます……。』つと。」

「……！！！！」

「少年よ、戦いとは守るために在るのじゃ。キズナ、権力、金、友情、命、愛、強欲……。悪だろぅが正義だろぅが、みんな何かを守るために戦うのじゃ。」

自分が何を守るのか分からなくては戦いとは言えない……。」

オレは何も言えなかった。だが、胸の中がだんだん熱くなっているのを感じた。

「少年よ、自分が守るべきものをいつも心の中に秘め、戦うのじゃ……。」

老人はそういうと立ち上がり、ノースエリアの出入り口へと歩いていく。

「ご老人!!」

俺は老人を呼ぶが、老人は振り返らずゆっくりと出入り口に歩いて行く。

「ありがとうございました!!!」

オレは老人に向かって頭を下げた……。

—— サウス（南）エリア ——

（メール視点）

「うわ〜、すごい!!」

私は思わず感嘆の声を上げた。

ここはフルーラー・サウスエリア。歌手を目指している人たちが毎日路上ライブをやっていて、CDショップみたいな音楽系のお店が多いエリアなの。

『ホントにすごいね、メールちゃん!!』

P E Tの中のロールもすごいはしゃいでるみたい。

そのとき、私たちはとても優しい音色が聞いたの。

「なんだろう?」

私は音色が聞こえてくるほうへと歩いて行った。

そこは噴水のあるちよつとした広場で、一人の女の子が踊るようにオカリナを吹いていたの。

「素敵……」

その女の子は十七、十八歳くらい、銀色のロングヘアで、ノース

リーブのシンプルなワンピースの上にクリーム色のカーテガンを着ていたの。

そしてエメラルドグリーンの瞳で、早い話が超美人。

「ありがとう……。」

気が付くとその女の子は私の目の前に立っていて、私にお礼を言っていた。

「えっ！ あ……！」

私はいきなりのことと言葉を詰まらせてしまった。

「私の名は銀色。私のオカリナ、聞いてくれてありがとう……。」
女の子は私に名前を言っつて、またお礼を言っつた。

「ああ、コチラこそ素敵な曲をありがとう。私はメール、よろしく。」

「メールちゃん……、よろしく。」

「でも不思議、こんな素敵な曲聴いていたのが私だけなんて……」
私は不思議に思っつた。こんな素敵な音色、なんで誰も聴きに來ないんだらう？

「それは、素敵な曲はここだけじゃないからだよ。」

銀色さんはそういうと周りを見渡した。すると周りではいろんなジャンルの曲を路上ライブしていて、みんなそれを目をキラキラさせながら聴いていた。

「そっつか、演奏しているのはここだけじゃないんだね。」

「うん、私ここでオカリナを吹きながらこの景色を見るのが好きなの。」

「そっつな……。」

「どうしたの？」

銀色さんは黙り込んでしまった私の顔を心配そうに覗き込む。

「こんなことしてる場合じゃなかった！！ 早くホープ・キーを捜さなくちゃ！！！」

私は銀色さんをほつといて先に行ってしまった。

そして少しすると、一人になった銀色のPETから声が聞こえてきた。

『銀色・・・、私、そろそろ動くね！！』

「分かったわ、アリエル・・・。」

—— セントラル（中央）エリア ——

（通常視点）

（ちょ、オレ「熱斗」視点なし！！？） （主役なんだから文句言わない！！！！by作者）

「こんなところにあるのか？」

熱斗は一人、ぽつんと呟いた。

熱斗は今、フルーラー・セントラルエリアにいる。

セントラルエリアは、中央の駅を中心に音符をモチーフにしたビルやマンションが立ち並んでいる。ビルのディスプレイでは、いろいろな歌手が歌を歌っている映像が流されている。

「なんかこの街にいと、あの子を思い出すな・・・。」

PETの中からスバルが呟く。

「あの子って誰？」

熱斗はPETを取り出すと、スバルに聞いてきた。

「スバルの女だよ、こいつ未来じゃあの女に会うたびにいちやいやしてたんだぜ。」

ウォーロックがにやにや笑いながら熱斗に話した。

「え、ちょ、な、違うよ!! ミソラちゃんは僕の初めてのブラザーで、決してそんなんじゃないから!! / / / /」
スバルは手をブンブン振り、顔を真っ赤にしながら全力で否定する。

「へ、あの子とね。」

熱斗はクロックマン事件のとき知り合ったミソラのことを思い出す。

「たしかすっごくかわいかったよな、やるなスバル。」

熱斗はスバルを茶化し始めた。

「だから違うって!! だいたいウォーロックはどうなんだよ!!」

スバルは突然、ウォーロックに話をふっかけた。

「はあ!!?」

いきなり話をふっかけられ、ウォーロックはすっとんきょんな声を上げた。

「ウォーロックだって僕とミソラちゃんが話してるとき、ハーブと二人でどっかいてるじゃないか!!」

スバルの言葉にウォーロックは、

『ジョーダンじゃねえ!!! オレはいつもあいつに「空気読めない奴はどっか行くわよ」って、むりやり首根っこ掴まれて連れて行かれるんだ!!! メーワクしてるんだよ!!!!』

ウォーロックはぎゃんぎゃん騒ぎながらスバルに反論する。

「おい、ハープって誰だよ?」

ハープと面識がない熱斗はスバルとウォーロックに問いかける。スバルたちはハープのことを説明する。

「へ〜、じゃあ、うでナビに興味のある女の子っていないのかよ?」

熱斗の問いにウォーロックは、

『え、いや、えと〜・・・』

ウォーロックは熱斗の疑問に言葉をにらせてしまう。

ちなみに、ウォーロックは熱斗の『うでナビ』を訂正するのはもうあきらめている。(ご愁傷様・・・)

「えっ、なに、もしかしているの!? そんな物好きな女の子!!!?」

スバルは目を大きく見開いて驚いている。

『どーいう意味だ!!! スバ・・・』

ウォーロックは途中で言葉を止めてしまう。

セントラルエリアのビルのディスプレイの映像が一齐に消えたからだ。

「な、なんだ!?!?」

熱斗は周りを見渡す。

すると全てのディスプレイに水色の小さなベールを頭に付け、透き通った水色のオカリナをペンダントのように首に下げた白いナビが現れた。

『あ……あ……あ……!!!?』
ウォーロックは目が点になり、口を大きく開け、アゴがぴくぴくと動いている。

「ど、どうしたの!? ウォーロック!?!?」

スバルはウォーロックの見たことのない様子に驚いている。

「こ、こわれたか……?」

熱斗もウォーロックの様子を見て驚く。

だがそのとき、ディスプレイのナビが首にかけたオカリナを吹き始めた。

~~~~~

オカリナから子守り歌のような優しい音色がフルーラーの街全体に響き渡る。

すると、熱斗以外の人たちがその場に倒れ、すやすやと眠り始めた。

「ど、どうなってんだ!?!?」

「オカリナだ!! あのおカリナの音色を聞くと眠ってしまうんだ!?!?!」

スバルが熱斗に説明する。

「でも、なんでオレたちは眠くならないんだ!?!?」

熱斗がそういうとディスプレイのナビが突然しゃべり始めた。

『あははは! 私がホープ・キーに関係ある人は眠らせなかったのよ……!』

ナビが高いソプラノトーンで話す。

「なっ、それじゃあ、オマエはネビュラの……うおー!」  
突然、ウォーロックが実体化してきて、熱斗は途中で言葉が途切れる。

『ア……ア……ア……!!!』

ウォーロックは、ディスプレイのナビを指差して言った。

『会いたかったわ~~~~!! ウォーロック様~~~~!!!』

『アリエル~~~~~!!!!?!?!?!?』

アリエルの歓喜の声とウォーロックの恐怖の悲鳴がフルーラーの街に響き渡った……。

第十六話 老人とオカリナ姫と事件発生！！！！

(後書き)

今回、恋愛なんだかギャグなんだか・・・？

第十七話 賞品はウォーロック!?!?

——アリエルが現れた同時刻 それぞれのエリア——

「なんだ!?!」

「ほおした!?! (どうした!?!)」

「これって!?!」

炎山、口に食べ物詰め込んだデカオ、メールが言う。(やいと  
は気絶している……。)

みんなそれぞれのエリアを探索している途中で、自分たち以外の人  
々が眠ってしまったことに驚いていたが……

( (ウ、ウォーロック様……!?!?) ) )

そのあと街全体に響き渡った言葉にもつと驚いていた……。

——セントラルエリア——

『きゃ〜! 本物よ!?! 本物のウォーロック様だわ〜!?!!』  
ディスプレイに映っているアリエルは両手を合わせ、興奮しきつ  
ている。

「な、なんだなんだ!?!?!」

熱斗はあまりの光景に口をパクパクさせて驚いている。

「ウォーロック! あの子のこと知ってるの!?!」

スバルはPETから実体化して熱斗の隣に立つと、ウォーロック



に問いかけた。

『あ、あいつはFM星人のアリエル。　ハープ同様、音を使う電波星人だ。』

「えっ、じゃあ、なんでこの時代にいるんだよ!？」

「たぶん、ガルナと一緒に来たんだ。」

ウォーロック、熱斗、スバルの順に話す。

「っていつかあの子、うでナビのこと・・・」

「ウォーロック様って・・・」

スバルと熱斗は声をそろえてウォーロックに問う。

『あ、あの女、FM星にいたとき、ずーっとオレのことをつけていたんだ・・・。』

「っ、つけてたって・・・」

『寝るときも、戦っているときも、休みのときも、散歩しているときも、どこでも』ウォーロック様々々『って、オレにまわりついていたんだ・・・。』

「ス、ストーカー!？」

スバル、ウォーロック、熱斗の順に話す。

『それくらいお慕いしていたってことですよ〜！　ウォーロック様~~~~!!~!!~!!』

アリエルはウォーロックに向かって叫ぶ。そのとき、



『ウォーロック様を私にチヨードアイ』

『なに〜〜〜〜〜〜！！？』

ウォーロックが悲鳴に近い声を上げて叫ぶ。

みんなは口をぽかんと開けて驚く。

『さっ、どうする？ この条件でゲームする？』

アリエルがみんなに聞いてくる。

『ふざけんな！！ んな条件呑めるわけが・・・』

『。。。よし、勝負だ！！！！』

ウォーロックの声をみんなが遮る。

『じゃ、お先に探しに行くわ！！ ウォーロック様、必ず私のものにしてみせますわ〜〜！！！！』

アリエルはさういうとディスプレイから実体化して抜け出し、どこかに行ってしまった。

『よし、オレたちも探しに行くぞ！！』

炎山がさういうとみんなさっきまで自分がいたエリアに向かって走り出した。

『オレたちもいくぞ！！ スバル！！！！』

『うん、熱斗君！！！！』

スバルはウォーロックの腕を掴むと熱斗のPETの中に入った。つた。

『ちょっと待ちやがれ、オマエら！！！！』

ウォーロックはPETから大声で怒鳴る。

「なんだよ、うでナビ。」

『勝手にオレを賭けるんじゃないやなえ!!!』

「ウォーロック……。」

スバルが低い声でウォーロックを呼んだ。

「なんだ、スバル!!!」

ウォーロックが声を荒げていう。

「落ち着いてよ、君は僕の親友で僕達の大切な仲間なんだ。

君を絶対ネビュラになんか渡さないよ、……僕達を信じて、ウオ

ーロック……。」

『スバル……』

ウォーロックは今までスバル達に怒っていたことを後悔した。

そくだ、俺達は仲間なんだ、仲間を売るような真似スバル達がする  
わけない!!!

ウォーロックは改めて仲間を信頼するということを学んだ。

「それに……」

スバルは言葉を続ける。

『それに?』

「もしゲームに負けてウォーロックがアリエルのお婿さんになった  
ら、

僕が結婚式の仲人をするから安心して」

そついうとスバルは自分の胸を叩いた。

「言ってる意味がちが~~~~~う!!!  
つか悪夢だあ~~~~~!!!.....!」  
『ウォーロックは少し涙目になって叫んだ・・・。』

第十七話 賞品はウォーロック!?!? (後書き)

フレイム・ナイト

「え〜つと、仲人がスバルで、司会は星河 ダイゴさん、それから参加者は・・・」

熱斗

「何やってんだ、作者？」

フレイム・ナイト

「あっ、熱斗! いや〜、今のうちに結婚式の日程とかなんだかを決めとこうかな〜って」

スバル

「ほ、本気でやる気なの? 冗談のつもりで言ったんだけど・・・」

フレイム・ナイト

「あっ、そうだ!!-- 忘れるところだった!!-- あの子に結婚式盛り上げてもらわなくちゃ!!--!!」

熱斗・スバル

「あの子?」

第十八話 ハープ・ノート推参!!! (前書き)

タイトル見れば分かるよね？

あの子が再び時を越えて推参!!!

## 第十八話 ハープ・ノート推参!!!

### ウエストエリア

ここはさっきの骨董店。やいとは棚の隙間に手を伸ばしたまま気絶していた。

そのとき、誰かが錆びた重い扉を開けて入ってきた。その人物はやいとを近くのイスに座らせると、棚の隙間にあったキラキラ光る物体を取り出し、店を出て行ってしまった。

三十分後・・・

「う、うーん？」

やいとは少しうめき声を上げて目を覚ました。

「あれ、私どうしてたんだっけ？」

やいとはゆっくりと何があったのかを思い出す。

「そっだ、あれは!?!」

やいとは倒れている棚の隙間を見た。だが棚の隙間にあった物体はもうすでに無くなっていた。

「あれ、なにもない!?!」

慌ててイスから立ち上がると、右足で何かを踏んでしまった。

やいとが足元を見ると、やいととの右足はネズミのしっぽを踏んでしまっていた。



「あああああああああああああああああああああああ  
！！！！！！！！！！」

やいとは光速のスピードで店から飛び出し、どこかへ走っていった。  
。。。

—— サウスエリア ——

「やっぱり何にもないね。。。。。」

メイルはさつきと同じ噴水の広場で途方にくれていた。

『メイルちゃん、あの噴水を見て！！』

P E T から、ロールが話しかけてきた。

「どうしたの、ロール？」

『あの噴水、プラグインできるみたいよ。』

「えっ!？」

メイルは噴水に近づくと水を噴出している場所を見た。するとそこには確かに端子が付いていた。

「本当だ、もしかしたらあそこに。。。」

『メイルちゃん、私をプラグインして！！！！』

「うん、プラグイン！！ロール、トランスミッション！！！！」

—— 噴水の電脳 ——

『ここは。。。あつ！！！！』

ロールは電脳を見渡すとステージのような場所に人影を見つけた。

「来たわね……」

ステージの上にいる少女のような姿をしたナビが話しかけてきた。そのナビは肘まである長い水色のベールを付け、クリーム色のワンピースを着ているようだった。

そしてその少女はアリエルと同じく首に青く透き通ったオカリナを下げていた。

そしてなにより、その少女の顔は……

『ぎ、銀色さん！？』

ロールは驚きで口を手で覆ってしまった。

「な、なんで銀色さんが！？」

メイルは驚きながらも銀色に問いかけた。

「星河 スバル君と同じよ。私も電波変換できるの……、アリエルと。」

すると銀色の隣にアリエルが現れた。

『えへへ、びつくりした？』

アリエルがロールに話しかける。

「どうしてアリエルに、ネビュラに加担するの！？」

メイルは銀色に向かって叫ぶ。

「目的があるの。そして……」

銀色はそういうと開いた右手を前に差し出した。

そして右手には……、

「ゲームは私たちの勝ち……」

銀色の右手には金色の四角いパーツがあった。

「なっ・・・!!!?」  
メイルは言葉を失ってしまう。

『これでウォーロック様は私のもの〜!!』  
アリエルが上機嫌な声で話す。だが、

「ゲームはまだこれからだよ!!!!」

その場にいた全員が声のしたほうを振り向くと、銀色に向かって  
音符型の電波が打ち込まれていた。

「・・・!!!!」

銀色はそれを動いてかわした。  
そしてロールの前にピンクのナビが現れた。

『あ、あなたは・・・』

ロールは震える声でピンクのナビの名を呼んだ。

ミソラちゃん!!?」

「ハイ!!私のこと覚えてる?ロールちゃん」  
ピンクのナビ、ミソラがロールにウィンクをして答えた。

## 第十九話 女の戦い

『ミソラちゃん!!?』

「ハイー!! 私のこと覚えてる? ロールちゃん」

ロールの前に現れたのは、以前、クロックマン事件のときスバルと共に知り合った

ハープ・ノートごと響きミソラだった。

『どうしてあなたがここに!?!』

「説明は後、それよりも・・・」

ミソラはそういうと銀色のほうに向き直った。

「パーツは私たちがいたたくわ!!」

ミソラは銀色を指差しながら宣言した。

「悪いけど、あなたと戦う理由は、『待つて!銀色!!』」

銀色の言葉をオカリナが遮る。アリエルはハープ・ノートを、いや、

ハープ・ノートの持っているギターを睨み付けながら言った。

『ハープ!! まさかこんなところで会うとは思わなかったわ!!』

『!』

『ポロン、同感ね、アリエル。』

ギターになっているハープがオカリナに返事した。

「えっ! ギターがしゃべった!?!」

メイルはギターがしゃべったことに驚く。

『ポロロン、そういえばあの時は話したことないから、二人は私のことを知らないのよね。』

ハープはそういうと自分のことをメイルとロールに説明した。

『そうなんだ、よろしくねハープ。』

ロールはギターに向かってあいさつした。

『ポロロン、コチラこそ。』

『コラー！！ こつちを無視するな！！！！』

アリエルがハープ・ノートたちに向かって叫ぶ。

『ハープ、あなたのことは聞いてるわ！！ 私がないことをいいことに、ウォーロック様といちやいちゃしていたらしいわね〜。』  
そういうアリエルからは黒いオーラが噴出されていた。

『ちょっと、誰よそんなこと言ったの！？ あんな奴、欲しいなら熨斗つけてくれてやるわよ！！！！』

「ハ、ハープ落ち着いて、敵に味方をあげてどうするの！？」

怒りで興奮しているハープをミソラが落ち着かせる。だがアリエルはハープの言うことも

聞かずにどんだんグチを言っていく。

『だいたい、あんたみたいな女の魅力を感じられない完全琴ボディがウォーロック様に近づくなんて、片腹痛いわ！！！！』

ブチッ！！

ハープの中で何かが切れた。どうやら、『完全琴ボディ』は禁句だ

つたらしい。

『上—————等—————じゃない!!!!!!  
その言葉を口にしたこと後悔させてやるわ!!!! ミソラ!!! バ  
トルスタンバイ!!!!!!』  
切れたハーブがミソラに向かって叫ぶ。

「う、うん……」  
ミソラは恐怖のあまりハーブの言つとおりには戦闘態勢をとる。

『銀色、こつちもバトルスタンバイ!!!!!!』  
「……わかつたわ!!!!!!」  
銀色も戦闘態勢に入る。

「いくわよ!!! アリエル!!!!!!」  
『違うわ、今の私たちの名は……、アリエル・ウォーティー!!!』  
『!』

「『ウエーブバトル、ライド・オン!!!!!!』」

「『あの、私たちは……?』」  
隅っこで忘れ去られたメールとロールが呟いた。

第十九話 女の戦い（後書き）

次回、ウォーロックを賭けた女と女の勝負が展開され……、

ハーブ

『るか!!!』

ゴバブツ!!!?



## 第二十話 敵の敵は味方？

「シヨックノート!!」

ミソラがアリエル・ウォーティーに向かって音符型の電波を放つ。

「オカリナブレード!!」

銀色はそういうと首からオカリナを外す。するとオカリナが細長い剣に姿を変えた。

そしてシヨックノートを剣で切り裂く。

「えっ!!」

「水音弾!!」

銀色がミソラに向かって矛先を向ける。すると矛先から水のボールが現れ、ミソラに向かって放たれた。

ミソラはそれを身をかがめてかわす。

『ミソラ、アリエルは水と音を操るの！ 気をつけて!!』

「分かったわ、ハープ。」

「無駄よ・・・、アクア・ワールド!!」

銀色は地面に剣を突き刺した。するとそこから大量の水が湧き出し、電脳世界が膝ぐらいの高さまで水没してしまった。

「な、なにこれ!？」

ミソラは足元を見て叫ぶ。

「波紋!!」

ミソラが驚いている隙に銀色は水の中に自分の手を突っ込む。するとそこから出た波紋がミソラに向かって広がってきた。波紋がミソラのところまで来ると、波紋からきた電波がミソラを襲った。

「きゃあああああ!!!」

ミソラは直撃を受け、その場に片膝を付いてしまった。

「うう……、どういうこと。」

「私の音波は水の中を高速で移動し、標的に技を繰り出すことが出来るの。」

『しかも、その分威力が上がるのよ。』

アリエル・ウォーティがハープ・ノートに近づきながら自分の力を説明した。

「勝負ありよ、負けを認めて……。」

銀色がミソラに降参するように言う。

「い、いや!!!」

ミソラは銀色に顔を上げながら言った。

「私は大切な人の力になりたくてここまで来たの!!!大切な人のために……、

この程度であきらめたくない。」

「……。」

銀色はミソラの言葉を黙って聞く。

「あなたにも命を賭けるぐらい大切な人がいるのね……。」

「そうよ!!!」

銀色の言葉に力強くミソラは答えた。

『よくやった、アリエル・ウォーティー……。』  
「……………!」

突然、どこからか声が聞こえてきた。するとアリエル。ウォーティーの後ろに黒い亀裂が現れた。そしてそこから黒い雲に乗った大柄の黄色いナビが現れた。

「クラウドマン……」  
銀色が黄色いナビの名を呟く。

「えっ、ネビユラのナビ!?!」  
ミソラは立ち上がれないまま驚く。

『そっだ、アリエル・ウォーティーよ。パーツを寄せ、リーグル様に献上する。』

クラウドマンは銀色に向かって手を差し出した。銀色は黙ってパーツを持っている手を差し出す。

「だ、だめ!」  
ミソラは銀色に向かって叫ぶ。

ザンツ!!

「えっ……………!?!」  
「なっ……………!?!」

クラウドマンとハーブ・ノートが驚きの声を出す。  
銀色がクラウドマンの腹を剣で刺したのだ。

『貴様……!! 裏切ったのか……!?!?』  
クラウドマンが腹から剣を抜き取り、銀色に向かって叫ぶ。

「違うわ……最初から貴方たちの味方になんかなってない……」  
「えっ、それどういうこと!?!?」

ミソラが銀色に問う。銀色はミソラに手を差し伸べながら言った。

「私には目的があるの……、ネビュラに、闇に捕らわれてしまった愛しい人を……、  
救い出すという目的が……!?!?」

「じゃあ、アリエルは!?!?」

『私は最初から、ウォーロック様の味方よ!! ウォーロック様の  
手助けをしようと思って』

ガルナの手下になったフリをしてこの世界に来たの。

そしたら偶然銀色に出会って、お互い愛しい人のために戦うって  
ところで共感して一緒に闘おうってことになったの。』

ハーブの問いにアリエルはピースサインを送りながら言った。

「な、なんか都合が良いような……。 まあ、いつか!! ありがとう!!」

ミソラは銀色の差し伸べた手を取り、立ち上がりながら言った。

『ミソラちゃん!! 大丈夫!?!?』

さっきまで隅っこに追いやられていたロールが心配そうな顔で近づいて来た。

「うん、大丈夫だよ!!」  
ミソラはそう言うがやはりさっきまでのダメージが残っているらしく、少しふらついている。

『待ってて！ リカバリーフラッシュ!!』

ロールがそういうとロールの手から光球が現れ、ハープ・ノートの体を包み込んだ。

するとハープ・ノートの怪我が治っていった。

「ありがとう、ロールちゃん!!」

『えへへ、これぐらいは役に立たなくちゃ・・・』

ロールが頭を掻きながら言う。

『き、貴様ら・・・!!!!』

クラウドマンが怒りの表情でにらみつけてくる。

するとクラウドマンが水の中に手を突っ込んだ。

「・・・!!!!」

それを見た銀色がロールとハープ・ノートの腕を掴み、水の上にあるステージに放り込んだ。

「銀色さん!!?」

二人は驚いて銀色のほうを見る。すると、

「きゃあああああああ!!!!」

水面から電気が放出され、銀色を襲った。銀色はそのままその場に倒れこんでしまった。

すると電腦世界を埋め尽くしていた水が一瞬で消えた。

「銀色さん!!」

ロールとミソラは銀色の側によると銀色の体を持ち上げた。

「うっつ・・・」

『くっ、まさかクラウドマンが来るとわね・・・』

銀色とアリエルは大きなダメージを受けてしまい、立ち上がれそうにない。

『フハハ！！ 私は電気属性のナビ！！ 水属性のオマエには効果的面だな！！！』

貴様ら全員あの世に送ってやる！！ エレキストーム！！！！』

クラウドマンがそういうと、クラウドマンの前に巨大な雷雲が現れ、竜巻のように

ロールたちに向かってきた。

「きゃあああああああ！！！！」

ロールたちは思わず目をつぶってしまった。

「バトルチップ・スーパーキタカゼ、スロットイン！！」

『えっ！？』

ロールたちが目を開けると、強風が雷雲を吹き飛ばしていた。そして雷雲が消えたときそこに現れたのは……、

「スバル君！！！！」

「ミソラちゃん！！！！」

「待たせたな！！！！」

## 第二十話 敵の敵は味方？（後書き）

熱斗

「……………」

スバル

「どうしたの？熱斗君不機嫌な顔して？」

熱斗

「ソウルユニゾン……………」

スバル

「えっ？」

熱斗

「ロックマンがいなくなって俺達、一番の力である変身能力を失な  
つちまただろ？それでこの先大丈夫かって……………」

スバル

「確かに、ここにはメテオGはないからノイズチェンジもできない  
し……………」

フレイム・ナイト

「あっ！そういえば言っただけだったね。この小説では今までの変身  
は……………（ ）出さないよ。」

熱斗

「今までの……………!？」

スバル



「変身はって、まさか!!!?」

熱斗・スバル

「新たな変身が・・・!!!?」

第二十一話 発動!! クロス・マジシャン!!!! (前書き)

フレイム・ナイト

「遂に、遂に、この小説の目玉があ……!!!!」

熱斗

「えっ!? この小説って目玉が付いているのか!!!!?」

スバル

「熱斗君、多分熱斗君の言ってる目玉は違つと思つよ……。」

第二十一話 発動！！ クロス・マジシャン！！！！

「スバル君、どうしてここに!？」

ミソラは突如現れたスバルに驚きながら問う。

「メールがさつきPETに通信してきて、今の状況を知らせてきてさ、大急ぎで駆けつけてきたのさ。」

熱斗がミソラに説明する。

「あとは僕たちに任せて!! いくよ、ウォーロック!!!」

「.....」

だがウォーロックからの返事はない。なんだか燃え尽きてしまっている感じた。

「どうしたの、ウォーロック?」

「実は、メールちゃんからゲームに負けたって聞いてから、ずっとこんな感じで.....」

ハープの問いにスバルがちょっと困った感じにゲームのことを説明する。

「あー、それでこんな哀れな姿に.....」

ハープが哀れみの瞳でウォーロックを見る。ウォーロックは空虚な目をしていて、

おそらくほぼ放心、気絶状態なのだろう.....。

「スバル君.....」

ミソラが尻餅をついたまま、スバルの名を呼ぶ。

「ミソラちゃん……。待っててね！！ すぐ戻ってくるから！！」

「うん！！！！」

ミソラはスバルの言葉に笑顔で返事をする。

スバルはそれを見るとクラウドマンに向き直った。

「クラウドマン！！！！」

『二百年後のロックマンか……。いいだろう、オマエを倒してパーツはオレがいただく！ メニークラウド&ゴロサンダー！！！！』

クラウドマンの前に小さな雷雲が現れ、雷雲からでた電気のボールがスバルめがけて発射された。スバルはそれをジャンプしてよける。

「バトルチップ・バンブーソード、スロットイン！！」

熱斗がバトルチップをスロットインすると、スバルの右手が黄緑色のソードに変形した。

「食らえ！！！！」

スバルはクラウドマンめがけてソードを振るう。

『フハハ！！ 甘いわ！！！！』

するとクラウドマンを雷雲が包み込み、クラウドマンがスバルの目の前から消えた。

「なに、どこにいった！？」

スバルはあたりを見渡す。するとスバルの向かって右の雷雲からクラウドマンが現れ、スバルを思いつきり殴りつけた。

「うわああああ！！！！」

スバルはパンチを思いつき喰らい、吹っ飛んでしまう。

『フハハ！！ オレは自分で作った雷雲をワープして移動できるのさ！！ クロススパーク！！！！』

「うああああああ！！！！」

スバルの周りの雷雲から十字型に電撃が放出され、スバルは悲鳴を上げる。

「くっ、どうすれば・・・、そういえばあの時・・・」

策が思いつかない熱斗は昨日の夢での男の子の言葉を思い出す。

「パーツに強く願って、”自分がなぜネビュラと戦うのか”

熱斗はPETを握り締め、PETの中に保存していたホープ・キーのパーツに強く願った。

（オレがネビュラと戦うのは、みんなの未来を守るためだ！！  
そしてロックマンを助け出すために・・・！！！！）

するとパーツから光が溢れ出してきた。

（ホープ・キー、オマエに力があるなら・・・）

パーツから溢れ出す光がだんだん大きくなっていく・・・。

（その力をオレたちに貸してくれ！！！！）

「な、なんだ!?!?」

クラウドマンが驚いて攻撃をやめた。

スバルの体を突然光が包みだしたからだ。

「なんだろう、とても暖かい……。」

スバルは自分のキズが癒えていくのを感じた。

「熱斗君……。」

「ああ、スバル、オレも感じるぜ……、新しい力を!!!」

スバルを包み込んだ光が一瞬、眩い光を出して消えた。

そしてそこに立っていたスバルは、いつもの青いロックマンの姿ではなかった。

そこにいたのは……、

スバルの身長と同じくらいのプラチナ色の細長い杖を持ち、濃い緑の体に雪のように白いマントを羽織り、銀色のバイザーと雪の装

飾を施したヘルメットを身に付けたスバルが立っていた。

『なんだ！？ その姿は！！！？』

クラウドマンが怒鳴るようにスバルに問う。

「願うことが起こす奇跡……、それが、

希望の力！！！！ クロス・マジシャンだ！！！！」

スバルは杖の先端をクラウドマンに向ける。

「今度は、このロックマン、Ver・スノーマジシャンが相手だ！！！！」

第二十一話 発動!! クロス・マジシャン!!! (後書き)

熱斗

「クロス・マジシャン!!!これが俺達の新しい力!?!」

フレイム・ナイト

「いや〜!やめて!!お願いだから変身しないで!!」

スバル

「ど、どうしたの!?!?」

フレイム・ナイト

「だって……、だって……、設定考えるのすごく大変なのよ〜  
〜!?!?!」

熱斗・スバル

「じゃあ何でこんな考えたんだよ!?!?!?!」



第二十二話 Ver・スノーマジシャン!!!

「あ……、」

銀色が自分の手を見て言った。

『どうしたの?』

「パーツが無くなって……。」

『ええっ!!!』

ロールとハーブ・ノートが銀色の手を見ると、

さっきまで銀色が握っていた四角い金色のパーツが確かに無くなっている。

「あ、それはこっちにあるよ。」

スバルはロールたちに声をかける。

スバルの胸元には何の飾りもない、金色の鍵が光っている。

「スバル君、その鍵……」

ハーブ・ノートがスバルを指差す。

「僕たちが見つけたパーツと、銀色さんが見つけたパーツが一つになっただ。」

そして……、

「この力が生まれた!!!」

Ver・スノーマジシャンになったスバルがクラウドマンに向き  
なおす。

「来い！！クラウドマン！！！」

スバルは杖をクラウドマンに向け、挑発する。

「調子に乗るなー！！ゴロサンダー！！！」

クラウドマンは周りにあった雲から電気のボールを出し、  
スバル目掛けて放出する。

「に、逃げて！！！」

ミソラがスバルに向かって叫ぶ。

だがスバルはその場から動こうとせず、杖を上に掲げた。

「アイス・・・シエル！！！」

すると、スバルを巨大な氷の貝のようなものが包み込み、クラウドマンが放った電撃をすべて防いってしまった。

「な、馬鹿な！！？」

クラウドマンは後ろに下がりながら叫んだ。

「こなゆき！！！」

スバルが杖を一回振る。すると電脳世界に突然、吹雪が吹き始めた。

『ぬおおお~~~~！！！？』

吹雪がクラウドマンを襲う。だが、

「きゃああ!!...、あれ?」

突然の吹雪にミソラは体をまるめるが、すぐに立ち上がる。

なぜか吹雪はクラウドマンにダメージを与えているが、ミソラたちはなんともないのだ。

「なにこれ!? あいつはこの吹雪でダメージを受けているのに...」

「私たちはなんともない。」

ロールたちは心底不思議そうな顔をする。

「あれが、ホープ・キーの力...」

銀色が小さな声で呟く。

「これで終わりだ!! クラウドマン!!!」

スバルはそういうと杖の先端をクラウドマンに向ける。杖の先端に白い光が集まっていく。

「ふざけるな...!! エレキストーム!!!」

クラウドマンは巨大な雷雲と共にスバルに突進してきた。スバルは顔色一つ変えず、杖に光を集める。

「ホープ・フォース・ピックバン  
HFB、ダイヤモンドダスト!!!」

スバルがそう叫ぶと杖の先端から何百個の雪の結晶がクラウドマンを攻撃した。

『ぐああああ〜！！！！これが、オ・・・ラシ・・・の・・・ちか・・・ら・・・』

クラウドマンは雪の結晶の彼方へと消滅した。

「やった〜！！スバル君すご〜い！！！」

ミソラが喜びの声を上げる。

「う、うん・・・（クラウドマンは最後になんていったんだろう？）

スバルはクラウドマンが最後に言った言葉が気になってから空返事をしてしまった。

―― 数十分後 セントラルエリア中央広場のベンチ ――

フルーラーの街の人たちはみんな目を覚まし、一体何があったのかと周りをキョロキョロしている。

「大丈夫？銀色さん？」

「大丈夫よ。メールちゃん。」

ベンチに腰掛ける銀色にメールが心配そうな声で話しかけた。

スバルがクラウドマンを倒した後、連絡を聞いたデカオたちがやって来て、

怪我をしたアリエル・ウォーティーをロールが治し、セントラルエリアまで熱斗たちが運んだのだ。

「あの、銀色さんって言ったよね？」

熱斗が銀色に問いかけてきた。

「ええ、何か聞きたいことでも？」

「なんで、ネビュラの仲間のフリなんてしていたのさ？」

熱斗の問いに銀色は少し間をおいて説明した。

「私、助けたい人がいるの。ネビュラに捕らわれてしまった大切な人……。」

でも、どうすればいいのかまったく分からなかったの。そしてその時、アリエルに会ったの。

アリエルは『あなたから私と同じものを感じる。愛しい人のために何かしたいという思いが』って言って、自分が何者なのか、そしてネビュラの仲間のフリをしているってことを話してきて、『私に協力して欲しい』と頼んできたの。私は最初半信半疑だったんだけど、アリエルの目は真剣で嘘を言っているように思えなかった。そして私はアリエルを受け入れ、ネビュラの仲間のフリをして、チャンスをつかっていたの。」

「そうだったんだ……。でも銀色さんの大切な人って？」

メイルが銀色に問う。

「あ、その……。」

銀色は顔を赤くして口ごもる。

メイルは銀色の様子を見て、納得するとそれ以上何も聞かなかった。

「とにかく!!これでまた仲間が増えたんだ!!」

これからよろしくお願いします、銀色さん!!!!」

熱斗はそういいながら銀色に手を差し出す。

「……よろしく!!」

銀色は微笑みながら熱斗の手を握った。

「そういえば、ミソラちゃんって子はどうしたの？」  
やいとが不意に、ミソラはどうしたのかを聞いてきた。

「あ、ミソラちゃんはここだよ。」

メールがそういうと自分のPETを取り出し、画面をみんなに見せた。

画面にはロールと一緒にハーブ・ノートが映し出されていた。

「初めまして！！これからスバル君と同じく、メールちゃんのPETにお世話になります。」

よろしく願います！！！！」

PET画面のミソラはそういうとペコッと頭を下げた。

「よ、よろしく願います！！！！」

「これからよろしく頼む……。」

「女の子同士仲良くしましょ！！」

上から、デカオ、炎山、やいとが言う。

みんな自分の挨拶を済ませ、和やかなムードになる。だが……、

「ウォーロック！！しつかりしてよ！！！」

突然、熱斗のPETからスバルの大声が聞こえてきた。

「どうした？スバル？」

熱斗はPETを取り出し、スバルに呼びかける。

「ウォーロックがさっきのまんまで放心したままなんだ！！」

「えっ！！あんなことが起こってもまだ気絶してるのかよ！！？」

そう、ウォーロックはメールからゲームに負けたという知らせを聞いてから、

今の今までずっと物言わぬ人形のような状態のままだったのだ。

「よっほどシヨックだったのね・・・」

「すまん、悪ノリしすぎた。」

やいとと炎山が言う。

『うう、ちょっと残念だけでしょうがないか。』

アリエルが不意にさういうと銀色のPETから熱斗のPETの中に移動した。

そして、ウォーロックの耳元で言った。

『ウォーロック様、賭けはなしで良いですよ。』

『・・・えっ・・・。。』

ウォーロックが小さく驚いた声を出した。そして数秒後・・・、

『よっしやああああああ！！！！』

両手を上に大きく上げて叫んだ。

「・・・うでナビ・・・。」

「良かった・・・かな？」

熱斗とスバルは少し呆れ顔で言った。



第二十二話 Ver・スノーマジシャン!!! (後書き)

フレイム・ナイト

「決まった、スノーマジシャン!!!」

スノーマジシャンは水属性で、あの細長い杖で氷の武器を作り出したりして戦うんだ!!!」

熱斗

「へ、それでクロス・マジシャンって、新しいパーツを見つける度に新しい変身が出来るのか？」

フレイム・ナイト

「ううん、熱斗のつよ〜い感情に反応して発動するから、新しいパーツを見つけないでも新しい変身が出来るんだ。」

スバル

「なんで熱斗君の感情に反応して発動するの？」

フレイム・ナイト

「それはこの小説の重要機構なので、ナ・イ・シヨ」

第二十三話 ミソラ、参戦の決意！！！！

「みんな、お帰り！！」

光博士が笑顔で熱斗たちを迎え入れてきてくれた。熱斗たちはたった今、銀色と共にフルーラーの街から科学省に帰ってきたのだ。

「・・・銀色ちゃん！？」

「お久しぶりです、おじさん。」

光博士は熱斗たちの中に銀色がいることに驚く。

「えっ！パパ、銀色さんを知ってるの！？」

「あ、ああ、昔ちよつとな・・・」

熱斗の問いに光博士は少しあいまいな返事をする。するとそこに名人がやってきた。

「みんなお帰り！！怪我はなかったかい？」

「名人さん！うん、みんな大丈夫だよ！！」

それにオレたちすごい力を手に入れたんだ。」

「さんは要らないよ。ってすごい力って？」

科学省 メインルーム

「なるほど、クロス・マジシャンか・・・」

光博士が呟く。熱斗はパーツが一つになったこと、クロス・マジシャンの力について話した。

「すごい力だね。でも熱斗君、なぜホープ・キーの力の引き出し方なんて知っていたんだい？」

「えっ、あ、なんとなく、土壇場で願ったら出来たんだよ。（あの男の子のことは言わないほうがいいよな・・・）」

熱斗は夢の中の男の子のことは言わないほうがいいと感じ、熱斗は名人の問いをたぶらかす。

「次は、ミソラちゃんの番だね、なんでこの時代に来たの？」

熱斗のPETの中のスバルがメールのPETの中のミソラに話しかけてきた。

「あ、そうだね、ちゃんと説明しなくちゃ」

ミソラは現実世界に実体化すると、静かに口を開いた。

——熱斗たちがフルーラーの街に着く前 二百年後の世界——

ミソラは自分の家の部屋で新しい曲の作詞をしていた。そうやって未来に行ってしまったスバルへの心配を紛らわしているのだ。

「スバル君、大丈夫だよね・・・」

『大丈夫よミソラ、一応あの戦闘バカも付いているんだし、スバル君はしっかり者だもん。』

ハープがミソラを励ます。

「うん、そうだ・・・」

PPP!! PPP!! ミソラを言葉で遮るように突然、ミソ

ラのハンターが鳴り出した。

「なんだろう?」

ミソラはハンターを取り出した。

「ミ、ミソラちゃん!!!」

ハンターの画面いっばいにヨイリー博士のあせった顔が映し出された。

「わっ!!!ヨイリー博士、どうしたんですか!!!?」

画面いっばいのヨイリー博士の顔に驚きながらミソラは聞いた。

「あ、驚かせてごめんなさい。スーハー、実は大変なのよ。」

ヨイリー博士は一拍すると一気に言った。

「Dr・ガルナの研究所が見つかったの!!!」

「ええっ!!!?」

ここはZ山の頂上、そこには黒くそびえ立つように建てられた建物があった。

「ここがDr・ガルナの研究所・・・」

『こんなところにあつたなんてね。』

ミソラとハーブは研究所の入り口に立って呟いた。  
今研究所にはヨイリー博士を始め、サテラポリスの人たちが研究所を調べている。

「私たちも行こう、ハーブ！」

『ええ!!』

ミソラはそういうと研究所に入って行った。

「あらミソラちゃん、来たわね。」

ヨイリー博士はいつもの調子に戻っており、ミソラに声をかけた。  
ここは研究所の一番奥、Dr. ガルナの研究室のようだ。

「ヨイリー博士、研究所内はどんな感じなんですか？」

「すべてくまなく調べてみたんだけど、もぬけの殻だったわ。

どうやらガルナにはこの研究所は必要ないみたい。」

「そうですか……。」

ミソラはがっかりと頭を下げた。

ドツカーーン!!! 突然、研究所内から爆発音が聞こえてきた。

「なっなに!?!」

『ミソラ、大変よ!!! 研究所内からウイルス反応!!!』

「なぜ!?! この研究所はもぬけの殻のはずなのに!?!」

「ヨイリー博士、私行つてきます!!!」

「ええ、気をつけて……!!!」

「いくよ、ハーブ！！トランスコード004！！ハーブ・ノート！！！！」  
ミソラはハーブ・ノートに変身すると研究所内のウイルスのいるところへと向かった。

「ッ、何だこのウイルスは！？」

「こんなウイルスはいないはず・・・！？」

ここはミソラたちがいた場所とは違う研究室。

サテラポリスの人たちが電波銃やバトルウィザードでウイルスに対抗しているが、  
じりじりと追い詰められていた。

「シヨックノート！！」

研究室に到着したミソラがウイルスに数発の電波を打ち込む。

「大丈夫ですか！？」

「ああ、ありがとうハーブ・ノート」

ミソラがサテラポリスの人たちに声をかける。

『ミソラ、このウイルスたち変よ！！こんな見たことない！！』  
ハーブが言うとおり、ミソラの前にいるウイルスたちは二百年後の世界にいるはずのない、  
二百年前のウイルスたちだったのだ。

「でも、倒さなくちゃみんなが危ない！パルスソング！！」  
ミソラはハート型の電波をウイルスたちに放つ。

十分後・・・

ミソラはすべてのウイルスたちをデリートした。ウイルスたちは人間のままなら強敵だが、電波変換すればどうってことのない雑魚だったようだ。

『ふう、ご苦労様ミソラ。』

「うん、でもあのウイルスたち一体どこから来たんだろう。」

ミソラはそういうと辺りを見回した。

すると部屋の隅に一人が通り抜けられそうなワープホールが開いていた。

「これは・・・」

『ミソラ、このワープホール二百年前に繋がっているわ!!』

「ええっ!!」

ミソラは驚いてワープホールをまじまじと見た。

(ここを通れば、スバル君のところにいける・・・)

ミソラは心の中でそう考えるとギターを強く持ち直した。

「ハープ・・・」

『・・・ミソラ、長い付き合いなんだから、あなたが何考えてるか聞かなくても分かるわよ。』

もちろん、どこまでも付き合っわ・・・』

ギターになっているハープは、ミソラに笑顔で話しかける。

「ミソラちゃん・・・」

ミソラは後ろを振り向く。そこには何かを察したようなヨイリー博士が立っていた。

ヨイリー博士とミソラはしばらく無言のままお互いを見つめあっていた。

するとヨイリー博士が口を開いた。

「いってらっしゃい!!--」

「はい!!--」

ミソラは元気よく返事をする。ワープホールに飛び込んだ。

ワープホールはミソラが飛び込むと役目を果たしたように消滅した。

「ヨイリー博士、良かったのですか・・・?」

サテラポリスの人が話しかけてきた。

「いいのよ・・・。自分の行く道は誰がどうこう言うものじゃないんだから・・・。」

ヨイリー博士は淡々と答え、しばらくその場に立っていた・・・。



## 第二十四話 急接近!!?

「……で到着したのがフルーラーのサウスエリアだったんです。」  
ミソラはそう話を締めくくると、メールのPETに戻っていった。

「そうか……。おそらく、Dr. ガルナが作った過去に行くための  
ワープホールの一つが残っていたんだ……。みんな今日は遅い  
から、  
ゆっくり休んで、また明日よろしく頼む。」  
光博士はそういうと部屋を出て行った。

### 屋上

熱斗は一人、ベンチに座りながら夜空を眺めていた。

「となり、いいかな？」

熱斗は後ろから聞こえた声に振り返った。

そこには銀色が微笑みながら立っていた。

「あ、はい……。」

銀色と熱斗はそれからしばらく何も喋らず、ただベンチに座って  
星を眺めていた。

その沈黙を破ったのは銀色だった。

「みんなから聞いたよ。ロックマン君のこと……。」

「えっ……」

「あなたも大切な人を奴ら（ネビュラ）に……」

「あなたも……って銀色さんもネビュラに友達が捕まってしまったんですか!？」

熱斗は銀色の言葉に驚きながら問う。

「うん、ずっと前から捕らわれてしまっている、私の大切な人……」

だから、私もあなたの気持ちができるの。」

熱斗は銀色の話を黙って聞いている。

「最初は悲しくて泣いたり、塞ぎ込んだりした……けど、それじゃ大切な人は帰ってこない、自分から取り戻しに行かなくちゃって思うようになったの。」

だから熱斗君も、前を見て、一緒に取り戻そう、大切な人を……」

銀色はそういうと熱斗に向かって微笑んだ。

「……あ、ありがとう、そうだ、そうだよね!! 俺たちで何とかしなくちゃ、

俺たちでロックマンと銀色さんの大切な人を取り戻すんだ!!」

熱斗はそういうとベンチから飛び降りるように立ち上がり、大きくガッツポーズをした。

「ありがとう、銀色さん!! なんか元気できてきたよ!!」

熱斗は銀色のほうを振り返るとニッと笑顔でお礼を言った。

だが銀色はその熱斗の顔を見て口をポカンとして驚いているような顔をしている。

「……………彩斗……………」

銀色はポツンと呟いた。

「えっ、なんか言った。」

「う、うん、なんでもないひとりごと……………」

「ふーん……………」

熱斗はそういうと銀色に背を向け、星空を眺め始めた。

(……………似てる……………彩斗に……………)

銀色はそう考えると頭の中であの時のことを思いだす。

「彩斗!!」

「えっ!?!」

「あのね、お母さんから教えてもらったんだけど、特別仲良しのお友達とは名前で呼び合ってたって!!」

だから私これからは彩斗のこと呼び捨てで呼ぶね!!彩斗もそうして、ねっ!!」

「う、うん、分かったよ、銀色……………」

(銀色……………)

銀色の頭の中で、記憶の中の少年の音が響く。





「スバル君とミソラちゃんってなかないね」  
メールが二人を茶化す。

「えへへ、メールちゃんは熱斗君と仲いいの？」  
ミソラがメールに問いかける。

「え、そんなんじゃないから／＼」

『熱斗君鈍感だから・・・』

『お気の毒にね・・・』

突然の質問に思わず否定するメールをロール、ハープが茶化す。

「あはは・・・、それより、アレほつといていいの？」

女の子たちの恋話に苦笑いをしたスバルはまだ追いかけているウオーロックとアリエルを指差す。

『ああ、アレ、FM星にいた頃からあんな感じだから大丈夫よ。』  
ハープが手をヒラヒラさせて答える。

「へ、へええ、そうなんだ。」

スバルはウオーロックが哀れに思えてきた。

だがその時、休憩室の扉を勢いよく開けてやいとが入ってきた。

「大変よ！！メールちゃん！！！」

「ど、どうしたのやいとちゃん!？」

「それは屋上に行けば分かる!!!」

そういうとやいとはメールの腕を掴み、部屋を飛び出した。

「ちょ、どこ行くの!？」

「わ、ミソラちゃん!!!引つ張らないで!!!」

『ミソラ!?』

『逃げるチャンス!!』

『あ、置いてかないで!』

ミソラ、スバル、ハープ、ウォーロック、アリエルの順にやいと  
とメールの後を追った。

科学省 通路

「オマエら、何走ってるんだ!？」

「おおおお!？」

通路を歩いていた炎山、デカオが突然爆走してきたやいとたちに  
驚く。

だがやいとたちはそんなことには目もくれず、屋上へと走っていつ  
た。

「おい!？」

「メールちゃん!！」

炎山たちもやいとたちの後を追う。

そしてさっきの銀色が熱斗に抱きつくシーンを目撃したのである。

場面戻り 屋上

「何やってるの?熱斗・・・!!！」

メールが熱斗に近づいて聞いてきた。

「あ、いや、その、えと、命をばかりは勘弁を~~~~!!!!！」

熱斗はメールのあまりの怒りように恐怖し、思わずどけ座してしまっただ。

メールはさすがにびっくりしてしまいさっきまでの怒りは半分以上消えてしまった。

「え、ちょ、そんな怯えなくても・・・」

『メールちゃん、はっきり言って怖かったよ。』

「あ・・・」

そこに銀色が話しかけてきた。

「ごめんなさい、私の様子がおかしくて熱斗君が心配して近づいたときに

私、立ち上がるうとしてこけちゃったの。

それで思わず熱斗君に抱きついちゃって、だから今は事故なの、メールちゃん。」

銀色がメールに代弁する。

「え、そうなんですか、ならいいんです。」

銀色はメールがそういつてくれると科学省内に戻っていった。

「じゃあ、メールちゃん、オレも休むよ、お休み」

「オレも帰らせてもらう・・・（アレがああ桜井・・・!?!?）」

「じゃ、じゃあ・・・（こえ）、母ちゃんよりこえ）」

「じゃあ、僕も!!（委員長みたいだった!!?!?）」

『あばよ!!（女つてのはどいつもこいつも侮れねえ・・・!!?!?）」

上から熱斗、炎山、デカオ、スバル、ウォーロックの順に話すと、科学省内に戻っていった。



「メールちゃん・・・」

屋上に残ったメール、やいと、ミソラ、ハーブのうち、やいとがメールに話しかけてきた。

「なに？やいとちゃん」

「大丈夫よ、会って間もないのに熱斗君が銀色さんを好きになるわけないわよ。」

「ありがとう・・・」

メールたちはその後何も言わず、科学省内に入っていった。

第二十五話 少年の願い（前書き）

サブタイトルの少年は、あの夢の中の少年を指しています。

## 第二十五話 少年の願い

今は真夜中、熱斗たちは与えられたベットの中でみんな眠っていた。

「ここは・・・？」

熱斗は気が付くと真っ白な空間に立っていた。

「前にもこんなことがあったような・・・？あっ、そうだ！」

「夢の中だよ・・・」

突然後ろから誰かが話しかけてきた。熱斗は後ろを向くと目を少し見開いた。

そこには前回熱斗が出会った夢の中の男の子が立っていたのだ。

いや、男の子ではなかった。服装は同じだが、熱斗ぐらいの年頃の少年だった。

「君は・・・？」

熱斗はおそろおそろ少年に聞いてみた。

「驚かせてごめんね。僕はあのときの、夢の中の男の子だよ。」

「えええっ！！？」

熱斗は少年が前に夢の中で出会った幼い男の子だと知り、驚いて声を上げた。

「どうゆうことだよ！？　なんでいきなりそんなでかくなっちゃったんだよ！！？」

「おちついて、熱斗君・・・」

少年が熱斗に近づき、優しく声をかける。  
熱斗が落ち着くと、少年は一旦間をおいて話した。

「君がホープ・キーの力を発動させたからなんだ。」  
「えっ……」

熱斗は少年が言っている意味が分からず、首を傾げる。

「僕は、肉体を封じ込められてしまっているんだ。そして魂は前に君に話したとおり、  
闇に、ネビュラに捕らわれてしまっている。」

「封じ込められているって……？ 何に？ どこに？」

「ホープ・キーに対になる物、オラシオン・ロック……」

「オラシオン・ロック……!!?」

熱斗は静かにその名を呟いた。

「熱斗君、僕は魂のない抜け殻……、自分の名も自分が何者なのかも分からない。  
でも、これだけは分かる。

この世界に起きようとしていることが、オラシオンが僕を通して君に伝えようとしていることが!!」

少年がそう言うと突然、空間が歪み始めた。

「げっ、また……」

熱斗は周りを見渡しながら言った。

「熱斗君!!」

熱斗が少年のほうを見ると少年の体は前回同様に薄らいでいつている。

「ネビュラは究極の闇を生み出そうとしている、それを消し去るためには、

ホープ・キーを手に入れなくてはいけないんだ!」

「えっ、究極の闇ってなんだよ!？」

熱斗は叫ぶが空間の歪みはどんどん大きくなっていく。

熱斗の意識はどんどん薄らいでいっていた。

ガバツ!!!

「はあ、はあ、はあ・・・」

熱斗は布団から跳ね起きた。

「・・・・・・夢?」

熱斗は窓のほうを向いた。窓からは日の出の太陽の光がやさしく熱斗に降り注いでいた。

第二十五話 少年の願い（後書き）

この少年が言うオラシオン・ロックのオラシオンって言うのは『祈り』って意味で、『願う』と同じような意味だからいいかなって思っただけです。

## 第二十六話 第三の目的地と新たなる戦士参戦の予感

朝を迎えた熱斗たちは今、メインルームで光博士が来るのを待っていた。

「熱斗、どうかしたの？」

メイルが椅子に座ってうつむいている熱斗に声をかけた。

「あ、ううん、なんでもない、大丈夫だよ。」

熱斗はメイルに少し笑って返事をした。

だが、

（あの少年は一体オレに何を伝えようとしてたんだろう？それに究極の闇って・・・？）

熱斗は昨晚の夢のことで少し気が滅入っているのだ。

「やあ、みんな、おはよう！」

そこにちょうど光博士がやって来て、空いている席に座る。

「毎日続けてキー探しに行かせてすまないな、だが、今日は助っ人も行くからみんなの負担を少しは減らせると思う。」

「助っ人って？」

炎山が聞いてくる。

「私だよ。」

みんなが声のしたほうを振り向くとそこには名人が立っていた。

「名人さん!!」

「さんは要らないよ、熱斗君。今回はちょっと特殊な場所だから、私が案内役を勤めさせてもらうよ。」

「特殊な場所って・・・」

「ああ、第三のパーツが眠る場所。そこは・・・、

古代都市・スカイバートだ!!!」

——二百年後の世界 某所——

「おのれ・・・ムーの力を使うとは・・・」  
「ギ・・・ガ・・・」

光の届かない暗い場所で少年と不気味な生物の声が聞こえる。



「オレたちも行くぞ・・・過去へ・・・!!」  
そうゆうと少年の体を紫の光が包み込む。紫の光が消えるとさっきの少年とは違う人物が現れた。  
その人物は不気味な生物を従え、どこかへと姿を消した・・・。

——二百年前　二ホン某所——

「リーガル様・・・」

ネットナビがモニターの中のリーガルに呼びかけた。

「・・・コスモマン、第三のパーツの場所が分かった。

・・・古代都市・スカイバートだ・・・。」

『はっ、必ずパーツを我らの物に・・・』

そうゆうとコスモマンは通信を切った。

「・・・。。。」

リーガルはパソコンのキーを押す。

すると、コスモマンと通信をしていたモニターにイスに縛られたロックマンが映し出された。

「ロックマンよ・・・、そろそろ物語は中盤に差し掛かってきたな・・・。」

『どんなことをしても無駄だ!!　オラシオンはお前たちに力は貸さない!!』

ロックマンはリーガルを真っ向から睨みつけ叫んだ。

「いや、オラシオンは我々の力になる。制御装置を手に入れたから  
な……」

「……!!!?」

ロックマンはリーガルの言葉に顔がこわばる。

『どうして……どうしてお前はそんなことまで知っているんだ!!  
リーガル、オマエは一体……!!!?』

ロックマンは声を震わせながらリーガルに問い詰める。

「なあに、簡単なことさ、情報提供者がいるのさ。」  
リーガルが素晴らしい終わるとリーガルの後ろから誰かがモニター  
に近づいてきた。

「始めましてロックマン……。私が情報提供者さ……。」  
その人物を見てロックマンはその名を呟いた。

『オマエが、Dr・ガルナ……!!!!』

第二十六話 第三の目的地と新たなる戦士参戦の予感（後書き）

フレイム・ナイト

「短かつ！！ てか駄文だ、どう見ても・・・」

熱斗

「それより！！ ロックマン！！ おい、ロックマンは大丈夫なんだろうな！！？」

フレイム・ナイト

「大丈夫！ ちゃんと助けられなかったらこの小説の意味ないじゃん！！」

スバル

「それより、次の目的地のスカイバートって？」

熱斗

「それよりってなんだよ、スバル！！」

フレイム・ナイト

「フッフッフ、実は第三の目的地では私が初かも知れない、

デカオメインのお話！！！！！！

デカオ

「本当か！！！！！！？」

熱斗・スバル

「い、いつからそこに……!?」

第二十七話 古代都市 スカイバート

「……………」  
「……………」

名人以外のみんながぼうせんとそれを見ていた。

熱斗たちはあの後すぐにスカイバートのある古代遺跡に向かったのだが、

スカイバートの姿を見て今の状態になってしまったのだ。

スカイバートは普通とは違う場所にあった。スカイバートは標高五千メートルの二つの山の間の石橋で

支えられた、丸い円の形をした土地が空中に浮かぶように建てられていたのだ。

「すっげえー……」

誰かがそう呟いた。

しばらくの沈黙の後、名人が口を開いた。

「ここはニホンの古代遺産で一番高い場所で、光 正博士は昔、ここを調査団の一人として

訪れたことがあるらしい。」

「そのときパーツをここどこかに隠したんですね……。」

銀色が静かに言った。

「ああ、しかもここはちょっとした迷路みたいな感じになっていて、バラバラに探すのは良くない、だから私が道案内するという訳だ。

さあ、行くよ!」

名人はそういつと石橋を渡り始めた。みんなもそれに付いて行った。

『ふふふ・・・さあ、パーティを始めよう。』

どこかの電脳でコスモマンが呟いた。そのとき現実世界のどこかで複数の機会音が聞こえてきた。

第二十八話 スカイバート、落下危機!!?

熱斗たちがスカイバートを調査して二時間後・・・  
スカイバートの中のちよつとした広場にみんな座り込んだり壁に寄りかかっていた。

「見つからないね・・・」  
メイルがそう呟く。

「この遺跡のほとんどを探してみたんだが・・・」  
炎山はそういうと口に指を当てて考え込む。そのときだった・・・

ズーーーーーン!!!!!!

突然近くで何かがぶつかり合うような大きな音が響いた。

「な、な、な、なんだあゝ!!!?!」  
座っていたデカオが慌てて叫ぶ。

「石橋の方からだ!!」  
炎山がそう叫ぶと走り出した。その後を熱斗を先頭に後を追う。

「な、これは・・・!!?」

熱斗たちは石橋に着くとその場に立ち尽くした。なんとシヨベルカーやタンプカーが石橋を叩いたり、体当たりをして石橋を破壊しようとしているのだ。

「まずい!! このままじゃ石橋が崩壊する!!」

名人があわてた声で言う。

「スバル!!」

「了解、熱斗君!!」

スバルはそういうと現実世界に実体化してきた。

熱斗は息をすうつと吸い込んで、目を閉じた。

するとスバルを光が包み込んだ。そして光が消えるとそこには・・・

「クロス・マジシャン、Ver・スノーマジシャン!!」

雪のような白いマントを羽織ったスバルが立っていた。

『一気に行くぞ、スバル!!』

「氷結水晶!!」

スバルはそういうと杖を地面に叩きつけた。

そして次の瞬間、シヨベルカー等の車が氷の中に閉じ込められてしまった。

「すごい・・・」

「これがクロス・マジシャン・・・」

みんなは呆然とそれを見ていた。



「でも、一体誰がこんなことを・・・？」  
すると全員のPETに一齐に通信が入ってきた。

『ふふふ・・・私からのオープニングセレモニーはどうだったかな？』

通信してきたのはコスモマンからだった。

「オマエは・・・！？」

『私の名はコスモマン、ネビュラの第四の刺客！！』

『てめえ、今どこにいやがる！？』

ウォーロックが叫ぶように聞いてくる。

『そうあせるな、実はここともうひとつの石橋に爆弾を仕掛けたのだ。』

誰かが石橋を通ると反応して爆発する時限装置をね・・・。』

「なに！！？」

『私はこの都市のどこかにいる。三十分以内に私を見つけ出し、倒せば時限装置は止まる。』

だが間に合わなければこの都市を支えている石橋は爆発し、君たちは終わりだ・・・。』

「くっ・・・！！！！」

熱斗が悔しそうに歯切りする。

『諸君、健闘を祈る！！！！』

コスモマンはそういつと通信を切ってしまった。

「た、大変よ!!」

「手分けして探すぞ!!!!」

みんなは四方八方にコスモマンを探しに行った。

第二十八話 スカイバート、落下危機!!!? (後書き)

フレイム・ナイト

「次回、デカオ大活躍!!!」

熱斗

「ほ、本当にデカオが活躍するのか!?!」

フレイム・ナイト

「うん、デカオとガッツマンのかっこいいところ書くよ」

スバル

「ちよつと待って、最初は僕、次はミソラちゃんが未来から来たよね?ま、まさか今度はゴン……!!!」

フレイム・ナイト

「いや、それはまずいから、ゴンは出さない……!!!」

スバル

「だよね……」(ほっ、と胸を撫で落とすスバル)

フレイム・ナイト

「出すのはゴンじゃなくて、あいつだよ」

熱斗・スバル

「やっぱり出すんじゃない……!!!」

## 第二十九話　デカオと地下遺跡!?

「くっそ〜、コスモマンの奴、一体どこにいるんだ!？」  
みんなと別れた熱斗は遺跡内を走りまわっていた。

「熱斗君、ちょっとおかしくない？」  
スバルがPETから話しかけてきた。  
「おかしいつて何がだよ!？」

「よく考えてみてよ!ここはネットワーク社会が生まれるはるか以前に作られた遺跡なんだよ。」

そんなところに、電腦世界があるはずない。つまり、電腦世界にかいられないはずの

コスモマンがここにいるはずないよ!?!」  
「あっ・・・!?!」

(なのになぜコスモマンはここにいると言ったのだ!?)

炎山は遺跡を見渡せる場所で口に指を押し当てて考えていた。

(ただのデマカセか、それともこの遺跡のどこかに電腦世界が・・・!?)

『炎山様、あと二十五分です!』

ブルースが炎山に爆破時間を知らせる。

「分かった、クソ・・・!」

炎山はその場を走り去って行った。

「うおー!?!どこだ、どこだー!?!?!?!」

デカオが大声を上げながらドタバタと走っている。

『デカオ、落ち着くデガスよ!!』

ガッツマンがデカオを落ち着かせようとする。

「そんなこと言ってもあと二十分くらいで橋が爆発して、俺たちは遺跡ごと落っこちちゃうんだぞ!!」

『だからこそ、落ち着くデガス!!!!』

デカオはかなり混乱しててガッツマンの声もあまり効果がない。

「だー!!!!コスモマンはどこだー!!!!!!!!!!」

デカオが今日一番の大声を上げる。そのときだ……。

コスモマンはどこだー!!!!!!!!!!

コスモマンはどこだー!!!!!!!!

コスモマンはどこだー!!!!

「『えっ……!!!!?』」

一箇所だけデカオが発した大声が反響してきたのだ。

「おい、あそこから俺の声が聞こえてこなかったか……?」

『行ってみるデガス!!!!』

デカオは音のした方向に走り出した。

「これって……!!!!?」

デカオは声が返ってきた方向に向かって、瓦礫の下に隠れていた地下通路を見つけた。

「よし、入ってみるぞ!!」

『デカオ、みんなに知らせたほうが言いでガスよ。』

「いや、ここはオレがコスモマンを見つけて倒して、オレの実力を熱斗たちに見せ付けてやるんだ!!」

そう言うとデカオはズンズンと通路をあるいって行った。

### 地下遺跡

「おおおおお~~~~!!!!」

デカオは驚きの声を上げた。

通路を抜けた先には、ちよつとした大広間になっていて、その中央にネットバトルマシンのような物が置いてあった。

そしてそのマシンから投影されていた電脳世界にコスモマンが映し出されていた。

『おや?意外だな、まさか君が私を見つけるとは……。』

コスモマンが驚いた顔でデカオに話しかけた。

「やい、このすまし野郎!!オレが成敗してくれるぜ!!!」

プラグイン!! ガッツマン、トランスミクション!!!!」

デカオがプラグインするとガッツマンがコスモマンと対峙するよ  
うに電脳世界に現れた。

『いくでガツ!!!!』

『宇宙の果てに沈むがいい……。!!!!!!』



第三十話 VS コスモマン!!! (前書き)

今回、なんとデカオがダーククロイドとサジ(一対一)でバトル!!!?



第三十話 VS コスモマン!!!

「先手必勝だ!!! いけ、ガッツマン!!!」

「ガッツパーンチ!!!」

ガッツマンの右手が巨大化し、その拳でガッツマンはコスモマンに殴りかかった。

「コスモバスター!!!」

するとコスモマンは、巨大な輪がついた惑星形のバスターを飛ばしてきた。

「こんなもの!!!」

ガッツマンは惑星をパンチで楽々と破壊してしまった。しかし爆風が起きて、土ぼこりがたってしまい、周りが見えなくなってしまった。

「ガス? 奴はどこにいるでガス?」

ガッツマンは辺りをキョロキョロと見渡した。

「愚か者め・・・、コスモリング!!!」

コスモマンがガッツマンの後ろから黄色い輪を投げ飛ばしてきた。ガッツマンはそれをモロにくらい、前に吹っ飛ばされた。

「ガッスー!!!」

「あーガッツマン!!!」

デカオがガッツマンに叫ぶように呼びかけた。

『う、くっ………』

ガッツマンはなんとか立ち上がるうとするが、ダメージが大きくなかなか立ち上がれない。

『止めだ……』

コスモマンが両手を大きく上に上げる。

『宇宙に闇に沈むがいい……、コスモゲート……!!』

コスモマンの上に小さな歪みのようなゲートが現れ、そこから出てきた隕石がガッツマンを襲った。

『ガッツマ……ン……!!』

デカオが叫ぶと同時に隕石がガッツマンを飲み込んだ。そしてそこから大量の土ぼこりが起こり、ガッツマンの姿が見えなくなる。

『終わったな……』

『そんな、ガッツマン……』  
デカオが地面に膝をついた。

「……見つけだぞ……」  
「……!!!!」

突然土ぼこりの中から低い声が聞こえてきた。

土ぼこりが収まるとそこには両腕両足に赤いアーマー、紫のバイザーに胸に赤いマークがついている銀色の髪、黒いナビが立っていた。

「貴様は……、ブライ!!!」

「ふん、こんなナビごときにそんな大技を使わなくてはいけないとは、思っていたよりも」

「たいしたことはないんだな、ネビュラのナビは……」

「ブライはそういうと右手を少し上げた。ブライの右手はガッツマンの右肩を掴んでいたのだ。」

「う〜ん、ガツ〜?」

ガッツマンが少しうめき声を上げた。　どうやら大丈夫のようだ。

「ガッツマン……!!!!」

デカオが少し涙目になってガッツマンの名を呼んだ。

「う〜、デカオ、あれ？　助かったんでガスか？」

「ああ、そのナビが助けてくれたんだ。」

ガッツマンは目の前にいるブライを見る。

『ありがとうでガス、でもオマエは一体・・・？』

「ブライ！！？」

突然、後ろから驚いた声が聞こえてきた。

ガッツマンとブライが後ろを振り向くと、そこにはスバルが呆然と立ち尽くしていた。

第三十話 VS コスモマン!!! (後書き)

デカオ

「どーゆうことだよ!!!? オレとガッツマン全然活躍して無いじやんか!!!」

デカオは涙目になりながらフレイム・ナイトにラリアットを食らわす。

フレイム・ナイト

「ゲバグッ!!!」

熱斗

「あのく、デカオ?」

デカオ

「なんだよ!!!?」

ガッツマン

「やったでガス、デカオ! 次の話でガッツマン大活躍でみんなに見直されてるでガス!!!」

デカオ

「・・・えっ?」

フレイム・ナイト

「私、やられ損・・・?」

デカオ

「ゴ、ゴメン!...!」

### 第三十一話 渾身のガッツ・アース!!!

「ブライ!!!?」

スバルは思わず、大声を上げてしまった。ブライの出現に驚きを隠せなかったのだ。

「熱斗!!!?」

「デカオ、大丈夫か!?」

デカオは地下遺跡入り口付近にいる熱斗に驚いた。熱斗は地下遺跡に入った瞬間にスバルをプラグインしたのだ。

「熱斗、なんでここに!?」

「なんでって、オマエが大声上げたからなんかあったのかと思って・・・」

「あ・・・」

デカオが思わず声を漏らす。たしかにデカオは遺跡中に響き渡るような大声を上げていた。

何かあったと思われるいても不思議ではなかった。

「ブライ・・・、なぜ君がここに・・・?」

スバルがブライに近づきながら問いかけた。

ブライをスバルを見た後、前方のコスモマンに向き直り言った。

「ムーの力を悪用せし者に裁きを・・・」

「えっ!!!」

スバルもコスモマンを見る。コスモマンは二対一のこの状況に少

しも焦らず、  
ゆづゆづとした態度をとっていた。

『ふっ、Dr・ガルナの言っていた、ムーの末裔か……』  
「……………」

ブライはコスモマンの話聞き流す。

「スバル、あのブライって奴、それにムーって……？」  
熱斗がスバルに話しかける。

「熱斗君、話は後にして……」  
スバルはそういうと戦闘体勢をとる。

「来るよ……!!!」  
スバルがそういうとコスモマンが頭上のゲートからまたも隕石を降らせてきた。

スバルはガッツマンを担ぎ上げ、ジャンプしてかわし、ブライは電波障壁の結界でかわした。

「ガッツマン、ここにいて!!!」

スバルはガッツマンを少し離れたところにおくと言った。

『ス、スマンでガッツ……、スバル』  
「うっん、気にしないで、君たちがここを見つけたから、コスモマンを見つけることが出来たんだから。」

スバルはそういうとコスモマンと戦闘しているブライの方へと向



かった。

『コスモバスター!!』

「ブライアーツ!!」

コスモマンとブライの技がぶつかり合い、両者は少し距離を置いた。

そこにスバルがやってきた。

「熱斗君、後十分位で爆発するよ!」

「時間がない・・・、一気に決めるぞ!!」

クロス・チェンジ、Ver.スノーマジシャン!!!!」

スバルはスノーマジシャンに変身すると、ブライの隣に立った。

「・・・新しい力を手に入れたのか、ロックマン・・・」

「うん、まあね・・・」

スバルは頭をポリポリと掻いた。

ブライはスバルをすこしジーンと見る。

「あ、はははは・・・」

ジーンと見られてスバルは苦笑いをした。

だが突然、コスモマンが笑い出したので、ブライはコスモマンに視線を戻した。

『ふふふ、二百年後のロックマンか・・・。』

いいだろう、二人まとめてかかってきなさい。」

コスモマンがスバルとブライを挑発する。

「舐めるな！！ブライナツクル！！！」

「雪結晶！！！」

ブライは複数の拳の闘気をコスモマンに向かって放出する。  
スバルは雪の結晶の形の弾丸を撃ち込んだ。

だがコスモマンはその場から一步も動かず、二人の技が直撃した。

「やった！！？」

「……………」

スバルとブライはコスモマンがいた場所を見つめていた。だが土埃がはれると、

そこには不敵な笑みを浮かべたコスモマンが立っていた。

「な……………！！？」

「……………！！？」

スバルとブライは目を見開いて驚いた。

『ふふふ、君たちは私には勝てない…………。』

この闇宇宙がある限り、君たちの攻撃は無意味だ！！！！』

コスモマンの周りに複数の紫の空間が現れた。

「くつ…………こなゆき！！！」

スバルは杖を振るい、電脳世界に吹雪を降らせた。

だがコスモマンは吹雪をすべて周りの空間に吸い込ませてしまった。

「な……………！！？」

『ふふふ、クラウドマンとの戦闘時に、対策は立ててあったのさ、  
コスモゲート！！！！』

コスモマンは隕石をブライとスバルにぶつけ続けた。

二人もコスモマンに攻撃し続けるが、コスモマンの周りの紫の空間が

攻撃を吸い込み、  
コスモマンにダメージが与えられない。  
二人はジリジリと追い詰められていた。

「くっ……」

「ちっ……」

デカオとガッツマンはそんな様子を見ていて、もどかしい気持ち  
になっていた。

（ガッツマンは、また役に立たないんでガスか……）

（俺たちは、こんなところで終わりたくない……!!!!）  
そう思ったガッツマンとデカオはゆっくりと立ち上がった。

「デカオ!？」

みんなはデカオとガッツマンが突然立ち上がったのに驚いた。

『ふん、あんなパワー馬鹿になにが出来るものか……』

「ガッツマン……!!」

『なにやるうってんだ!？』

コスモマン、スバル、ウォーロックの順に言った。

「俺たちは、熱斗と……」

『ロックマンの永遠のライバル……』

デカオはPETを強く握り締めながら、ガッツマンは両手をハン  
マーに変えながら、

静かに言った。そして次の瞬間……、



「すごいぜ、デカオ!!!」

熱斗は興奮気味にデカオに言った。

「へへ、オレはオマエのライバルだからな!!!」

デカオは自慢げにガッツポーズをした。だが・・・

『まだまだ!!!』

「くくくく!!!?」

スバルたちが声をした方を向くと、ズタボロになったコスモマンが立っていた。

「な、あいつまだ・・・!?」

『まずいぜ、スバル!!!あと三分位で爆発するぞ!!!』

『ガス!!!?』

『ふふふ、あと三分だ。あと三分ですべてが終わる・・・!!!』

「くっ・・・」

スバルは歯軋りをするとガッツマンをかばう様に前に立った。

『だいたい、そんなパワーだけの役立たずが私に勝つなど、ありえぬことなのだよ!!!』

「く・・・!!!」

熱斗とスバルはその言葉を聞いて大きく目を見開いた。

「・・・違う!!!」

『・・・ん？』

スバルが小さく呟き、コスモマンは不思議そうに首を傾けた。

「ガッツマンとデカオ君は、役立たずなんかじゃない・・・！！！」  
「ああ、スバルの言うとおりだ！！二人は俺たちの大切な仲間なんだ！！俺たちの仲間を侮辱するような奴は・・・！！！」

そのとき、スバルが首にかけてたホープ・キーが熱斗とスバルの気持ちに呼応するように輝きだした。

「絶対ぶっ倒す！！！！」

そのとき、スバルを光が包み込み、眩い光をだした。そして光が消えたときそこに立っていたのは、  
スノーマジシャンのスバルではなかった。

黄色い体にベージュの小さなマントを羽織り、両腕両足にオレンジのアーマーを身に付け、  
頭にはヘルメットではなく、金具の付いた黄色いヘアバンドを付けたスバルが立っていた。

『なっ・・・！？』

「あの姿は！？」

「クロス・マジシャン、Ver・アースマジシャン!!!」

第三十一話 渾身のガッツ・アース!!! (後書き)

ソウルユニゾン・ガッツソウルのポツ画像って見たことありますか？  
それをモデルにして考えた変身です。

デカオとガッツマン、かつこよかったかな？



第三十二話 Ver・アースマジシャン!!!

「なっ・・・!?!?」

『・・・ガス!?!?』

「おおっ!?!?!?」

『しまった・・・!!?!?』

ブライ、ガッツマン、デカオ、コスモマンは、姿が変わったスバルに驚いていた。

『スバル、後三分だ!!?!?』

「熱斗君、一気に行くよ!!?!?」

「ああ、オペレートは任せる!!?!?!?!?」

熱斗が言い終わると同時に、スバルは地面を蹴ってコスモマンに突進して行った。

『くっ、闇宇宙!!?!?』

コスモマンは両腕を前に出すと、その前方に紫の空間が現れた。

「アース・シュート!!?!?」

スバルはそんなことも構わず、紫の空間に殴りかかった。

するとスバルのパンチは、紫の空間を貫いてコスモマンにクリーンヒットした。

『ぐがあああ!!?!?!?』

コスモマンは吹っ飛ばされながらも、なんとか持ちこたえた。

「おのれ、コスモプラネット……!!!」  
コスモマンの前に幅広い闇宇宙が現れ、そこから大量のコスモバスターが飛んできた。

「これで終わりだ!! HFB、アース・ブレイク!!!」  
スバルは拳を地面に叩きつけた、そこから大量の土の槍がコスモマンに向かっていった。  
土の槍はコスモバスターごとコスモマンを貫いた。

「ぎゃあああああ……!!!」  
コスモマンは土の槍の中に埋もれていった……。

「終わった……」  
スバルはそういいながら静かに立ち上がった。

—— 数分後 遺跡の広場 ——

コスモマンを倒したことにより、爆弾は停止した。  
みんなは熱斗の連絡を聞いて、広場に集まっていた。

「アースマジシャンか……」  
みんな新たななるクロス・マジシャンの力に驚いていた。

「それで熱斗君、パーツは見つかったのかい？」  
名人が熱斗に聞いてくる。

「あ、ごめん、見つからなかったんだ。」

熱斗とデカオはコスモマンとの戦闘の後、  
電腦世界も地下遺跡も探したんだが、  
パーツを見つけれなかったのだ。

「・・・おい」

「えっ・・・オブツ!!?」

突然、広場の隅で腕を組んでじっとしていたブライが、  
熱斗に声をかけてきた。

そして次の瞬間、ブライは熱斗の顔面に何かを投げてきたのだ。  
その何かは熱斗の顔面に直撃した。

「@#&%¥\*!?!?」

熱斗は痛みのみならず、声にならない声を出しながら、  
そこらじゅうを走り回った。

「ね、熱斗!!?!?」

「熱斗君!!」

メイルや名人が熱斗を取り押さえたり、ハンカチを顔に当てたり  
した。

しばらくすると、痛みも引いたらしく熱斗は落ち着きを取り戻した。

「てめー!!?!?!? なにしやがる!!」

熱斗はブライに飛び掛る勢いで怒鳴った。

「お前たちが探しているパーツとは、そのことだろ?」

「えっ・・・!!?!?」

熱斗がブライが投げてきた物を見た。それは金色に輝く、丸い小  
さな装飾のようなものだった。

「ブライ、これを一体どこで!?」  
スバルが実体化して、問いだしてきた。

「この遺跡の瓦礫の中にあつたのを見つけた……。それで……」

ブライはそういうとデカオをチラツと見て後ろを向いた。

「そいつとそのナビへの借りは返した。」

ブライはそっぴい捨てるど、周波数を変えてどこかへといつてしまつた。

「……ブライ!!!」

スバルは少しうれしそうにしてブライの名を呼んだ。

第三十二話 Ver・アースマジシャン!!!（後書き）

フレイム・ナイト

「アースマジシャンはその拳で殴った物の効果を無視して攻撃を通すことが出来る能力があるんだ!! だからコスモマンの闇宇宙を打ち消して攻撃することが出来たんだ!!」

熱斗

「へえ、それに地面の地形を変えて攻撃したり出来るんだ。ガ  
ツツソウルとグランドスタイルを掛け合わせた感じの力だな。」

スバル

「次の話はどうなるの?」

フレイム・ナイト

「次は!!!!」

熱斗が女の戦いで命を落とす!!!!!!

感じのお話………かな?」

熱斗・スバル

「ええええええええええええ!!?」

### 第三十三話 銀色の誘い

秋原町 公園前

「またな〜」

「分かったら連絡するぜ。」

今は明け方。 熱斗、メール、デカオ、やいとは帰路に着こうと  
していた。

・ スカイバートから帰った熱斗たちは最初、科学省に行ったのだが・

—— 三十分程前 科学省 ——

「えっ、プロテクトがかけられてる!？」

熱斗たちは光博士にこれまでのことを話し、次の目的地を聞こう  
としたのだが、

パーツの在りかを示すテキストデータには、四つ目以降の目的地の  
場所を示すテキスト部分にプロテクトが  
かけられてあったのだ。

「ああ、といつても、プロテクトは旧式のもので二、三日すれば解  
除できる。」

それまではみんな家に帰って休んでいてくれ。」

光博士はそういうと研究室に戻っていつてしまった。

それでみんなは仕方がなく、それぞれの場所へ帰ることにしたのだ。

—— 場面戻り 秋原町 熱斗自宅前 ——

「ふう〜、これでパーツは残り二つか・・・」  
熱斗は家の前で、PETに保存されているパーツを見ながら言った。

「新しい力も手に入れたし、これからもこの調子でいこうね！」  
スバルがPETから話してきた。

「熱斗君・・・」

突然、道の向こう側から熱斗を呼ぶ声が聞こえてきた。  
熱斗が見るとそこには、銀色が立っていた。

「銀色さん！？なんでここに？」

「電波変換して来たの。」

銀色はそういうと熱斗に近づいてきた。

「熱斗君・・・明日、暇かな？」

「えっ、うん、暇だけど・・・」

「熱斗君に話したいことがあるの。明日十時に、秋原駅に来てくれないかな？」

銀色はオズオズとした感じで熱斗に聞いてきた。

「うん、分かったよ。十時に秋原駅だね？」

「ええ、ありがとう。それじゃあ、また明日。」

銀色はそういうと小走りに走って行った。

PETではスバルとウォーロックがコソコソと話していた。

「ウォーロック、これって・・・」

『ああ、デートだな・・・』



第三十三話 銀色の誘い（後書き）

波乱の幕開けかも・・・？

第三十四話　デート！・・・なのか？

AM:10:00　秋原駅前

「銀色さん！！」

「熱斗君！おはよう！」

熱斗は駅前の時計塔前に待っていた銀色に呼びかけて近づいた。

「ごめんなさい銀色さん、待ったかな？」

熱斗はすこし息を切らしながら言った。

「ううん、私もちょうど来たところ」

銀色は手をすこし振りながら答えた。

「さあ、行きましょう！」

銀色はそういうと熱斗の手を掴んで駅の中に入っていった。

だが、二人は気づいてなかった。近くの茂みで鋭いまなざしが向けられていることに・・・

「銀色さん、どこに行くの？」

熱斗は駅のホームで銀色に目的地を聞いてきた。

「ピュアルっていう丘のあるところだよ。そこで熱斗君に話しておきたいことがあるの。」

とても大切な・・・。

銀色はすこし真剣な顔で話した。

そこに電車がやってきたので二人はそれに乗り込み、ピュアルを指した。

熱斗と銀色はピュアルに到着した。

「うっ、わ……。」

熱斗は思わず声を漏らした。

熱斗の前には海に面した小さな丘があつて、その丘には様々な種類の花が咲き誇っていた。

「すごいでしょ？」

銀色が熱斗の隣に立って言った。

「うん、すっげーキレイ!!!」

「ここ、私の大切な人が連れてきてくれた思い出の場所なの。」

銀色は少し遠くを見るような眼で言った。

「大切な人つて、もしかしてネビュラに捕まっている……。」

「そう、私の愛しい人……。」

「銀色さん、なんでオレをここに？大切な話つて一体？」

熱斗は銀色を真っ直ぐな眼で見つけた。

「……前にも言いかけたことがあつたよね？私の大切な人、その人の名は……。」

「やっぱりダメ……!!!!!!!!!」

突然、丘のしたから悲鳴に近いそんな声が聞こえてきた。

熱斗と銀色が声のした方を見ると、マイルが熱斗たちに向かって走って来たのだ。

更にその後をやいと、デカオ、炎山、スバル、ミソラが追いかけるように現れた。

「な、えっ、みんな!？」

熱斗と銀色はマイル達の出現に目を大きく見開いて驚いた。そして次の瞬間、

マイルがすっ転んだ。

第三十四話　デート！・・・なのか？（後書き）

突然スイマセン、コチラの都合でしばらく投稿をお休みします。  
本当にゴメンナサイ

第三十五話

デート！・・・なのか？

（メール視点）（前書き）

久しぶりの投稿！！

あいかわらずの駄文ですがよろしく願いします！！！！

第三十五話

デート！・・・なのか？

（メイル視点）

—— 銀色が熱斗をデート？に誘う少し前 ——

『ねえ、メイルちゃん』

帰路についていたメイルにロールが呼びかけた。

「どうしたの、ロール？」

『今から熱斗君のところに行かない？』

「あっ、それいいかも！！」

ロールの提案にミソラも賛成する。

「えっ、なんで、というか今から!？」

『そ、いまから だってメイルちゃん、夏休みになってから熱斗君とあんまり話してないでしょ？』

確かにロールの言うとおり、ネビュラのせいでメイルは熱斗とあまり話をしていない。

「それにいまからだったら二人でゆっくりとお話出来るでしょ（それにはスバル君に会えるしね）」

ミソラはロールの言葉に相槌をする。

「うん、そうだね！今から行ってみようか！！」

メイルはそういうとウターンして熱斗の家に向かった。

「えっ、ウソ!!?」

メイルはそういうと電柱の裏に隠れた。

『どうしたの?メイルちゃん!?』

ロールはメイルのいきなりの行動に驚く。

「熱斗の家の前に、銀色さんと熱斗が・・・」

「『えっ!!!』」

メイルの視線の先には、銀色と熱斗が話しをしていた。

「熱斗君・・・明日、暇かな?」

「えっ、うん、暇だけど・・・」

「熱斗君に話したいことがあるの。明日十時に、秋原駅に来てくれないかな?」

銀色はオズオズとした感じで熱斗に聞いてきた。

「うん、分かったよ。十時に秋原駅だね?」

「ええ、ありがとう。それじゃあ、また明日。」

銀色はそういうと小走りに走って行った。

『メイルちゃん、あれって・・・』

「銀色さんが熱斗君をデートに誘った・・・」

ロールの言葉をミソラが繋ぐ。

メイルは手をワナワナと震わせ、電柱にしがみついていた。

熱斗はその間に家の中に入ってしまっていた。

「ど、どうして銀色さんが熱斗を・・・まさか銀色さん、熱斗の



こと・・・」

『落ち着いてメイルちゃん、万が一ってことも・・・』

「こーなったら、もうアレしかないわ!!」

ミソラが手でガッツポーズを作った。

「アレっ？」

メイルがPETを取り出して聞いた。

「尾行よ！二人は明日の十時に待ち合わせしてるんでしょ？だから、そこから二人の後を追いかけて、

銀色さんが本当に熱斗君のことが好きなのかこの目で確かめるのよ

!!」

「えっ！そんな、ストーカーみたいなこと、私には・・・」

メイルは手をもじもじさせながら言った。

「大丈夫！！助っ人も連れてくるから！！」

「助っ人？」

ロールが首を傾げる。

「ちよつと待ってて!!」

ミソラはそう言つとどこかへ行ってしまった。

---

数分後

---

『んー！んー！！んー！！』

「いたた、ミソラちゃん痛いよ!!？いただただ!!」

少しして帰ってきたミソラはスバルをギターから伸ばした弦で体を縛りつけ、スバルを引っ張てきながら帰ってきた。

ウォーロックはスバルのウデごと顔に弦が巻きついているので、口にさるぐつわされてるような状態になっている。



言った。

「だからお願い!! 手を貸して!!」

ミソラは顔の前で手を合わせながら言った。

「いいよ。」

あっさり。スバルは一瞬の間を空けずに了承した。

「へえっ!?!」

ミソラは驚きで変な声を出してしまった。

「ミソラちゃん、どうしたの? そんな変な声出して?」

「だって、スバル君がこんなあっさり『いいよ。』なんて、普通ならもっと渋ると思うってたんだもん。」

「普通ならね、でも……」

スバルは頭をポリポリ掻きながら、少し言葉を詰まらせた。

「『でも?』」

メールとロールが声をあわせて聞く。

「なんか、気になるんだよ。銀色さんの行動が、熱斗君に積極的な感じが……」

「なーんかあるわね。」

突然、メールの後ろから声が出た。後ろを振り向くと、やいとが悪戯っ子のような笑みを浮かべて立っていた。

「や、やいとちゃん!?!」

メールは少し飛び上がると、二、三步距離をとった。

「ど、どうしてここに!？」

「ふ、ふん 綾小路家の情報網を舐めちゃいけないわ。銀色さんが熱斗の家の前に来たことは、

銀色さんが秋原町に来た瞬間から分かっていたのよ」

「す、すごい……。」

「恐るべし、綾小路家の情報網……。」

「まあ、それはおいといて、まさかあの銀色さんが熱斗をデートに誘うなんて……。」

やいとはあごに手をあてて考え込むポーズをする。

「そうなのよ、一体どうしたら……。」

メイルは下を向いてしまう。

「メイルちゃん、ここはミソラちゃんの言うとおり、二人の後をつけていって銀色さんの真意を確かめるのよ!!」

やいとは両手でガッツポーズを作って言う。

「でも……。」

「つべこべいわない!!! 明日の九時にメイルちゃん家に行くからね!……!!」

「や、やいとちゃ~~~~ん……。」

—— 次の日 AM:10:00 秋原駅 ——

「銀色さん!!」

「熱斗君!おはよう!」

熱斗は駅前の時計塔前に待っていた銀色に呼びかけて近づいた。

その様子を近くのみから、双眼鏡を使って見ているやいと、寝不足で目にクマが出来てしまったメイル、あくびをしているデカオ、

何かちょっとイライラしている炎山が見ていた。(スバルとミソラはメールのP E Tの中に居る。)

「やっと着たわね熱斗、レディーを待たせるなんて男性失格よ。」

「うーん、気になって昨日全然眠れなかった……。」

「ふああああ〜」

「なんで俺がこんなことを……。」

「ところで、なんでデカオ君と炎山君が……?」

メールがデカオと炎山の方をむいて言った。

「それが昨日、急にやいとちゃんからメールが来て、『明日秋原駅に来い。』って。」

「ネビュラに関することが起きるから、明日秋原駅に来いというメールが来た……(怒)」

「あ、ははは……。」

炎山の不機嫌な言葉にメールは苦笑いを浮かべた。

「ああ!?!?」

突然、熱斗達を見張っていたやいととデカオが声を上げた。それを聞いたメールと炎山が熱斗達を見ると、銀色が熱斗と手を繋いで駅の中へ入っていったのだ。

「……。」

メールはそれを目を丸くしてみることに出来なかった。

「って、ボーっとしてる場合じゃないわよ!! 早く追いかけないと……!」

やいとハメイルの手を引つ張りながら熱斗達を追いかけて行つた。

「あ、メイルちゃん！」

デカオは少しよろけるように二人の後を追う。

『どうしますか？ 炎山様？』

PETからブルースが聞いてきた。

「・・・仕方がない。俺達も後を追う。」

炎山はそう言うとしぶしぶ立ち上がってメイル達の後を追つた。

——ピュアル——

「すごいでしょ？」

銀色が熱斗の隣に立って言った。

「うん、すっげーキレイ！！」

「ここ、私の大切な人が連れてきてくれた思い出の場所なの。」

「なに話してんだらう？」

メイル達は丘の下に隠れ、やいとハ身を乗り出すように熱斗と銀色の二人を観察している。

すると熱斗が銀色を真つ直ぐに見つめ、何か話しかけてきた。

「ん、熱斗が何か話してるみたい。」

「えっ！？」

やいとハ言葉にメイルも身を乗り出す。

美しい花畑でお互いを見つめる銀色と熱斗は、少女漫画にでも使えそうな雰囲気が出ていた。

メイルはだんだん気が気ではなくなってきた。



(いや、いや!! こんな形で、熱斗が誰かと結ばれちゃうだなんて……!!! そんなの絶対ヤダ!!!!!!)

メールの頭の中はそのことだけで一杯一杯になっていたのだ。

そして、それは偶然かたまたま必然なのか、熱斗とメールの間に小さな小石があったのだ。

メールはその小石に思いつきり足で踏んづけてしまった。そしてバランスを崩してしまったメールは、

熱斗と銀色の足元ですっころんだ……。



第三十六話 嫌いじゃないよ・・・(前書き)

これは世界を賭けた友情の物語であって、

決して少年少女のラブロマンス物語ではありません。

(マジ、ホントだから、信じて!!!)

第三十六話 嫌いじゃないよ・・・

「・・・・・・・・・・」

「・・・・・・・・・・」

時が止まったようだった・・・。

みんな、メイルがギャグ漫画のように盛大にすっころんだことに呆れたり、んなアホな・・・と思ったり、まあ皆それぞれいろいろなことを思った。

「メ、メイルちゃん・・・？」

あまりの状況に驚きながらも、熱斗はしゃがみ込みメイルに呼びかける。

するとメイルは恐る恐るといった感じに顔を上げた。その顔は恥ずかしさで真っ赤になっってしまった。

「ね、熱斗・・・。」

「あ、えと・・・。」

二人はあまりの気まずさにお互い目を逸らし、言葉に詰まってしまっ。

そんな二人の気まずい雰囲気を破ったのは銀色だった。

「メイルちゃん、大丈夫？」

銀色はそうというとメイルに手を伸ばした。

「あ、はい！」

メイルは銀色の手を握り、立ち上がる。

「ところで、なんでみんなここに居るの？」

銀色はメイルから視線をずらし、立ち尽くしているやいと達に質問した。

「……ええ!!?」「……」

みんな銀色の質問に『ギグッ!!?』とした顔になる。

「あ、それはその……。」

「なんていえばいいのか……。」

やいととミソラは『後を付いてきました』とは言えず、しどろもどろになってしまっている。

「決して、二人の後を付いてきたなんてことは……。」

「……バカ(か)……」

デカオがあせって本当のことを言っしまい、炎山、やいと、スバル、ミソラは

大きな声で突っ込む。

銀色、熱斗、メイルはそれを呆れた目で見ていた。

「付けてきたって、じゃあメイルちゃんも?」

熱斗はそういうとメイルに視線を戻した。

「え、や、その……」

メイルはまたも顔を真っ赤にして下を向いてしまう。

「どうしてそんなことしたんだよ!？」

熱斗は少し強い口調でメイルに聞いたです。

すると、メイルは突然熱斗の手を両手で握ってきた。

「だって、気になったんだもん!!!!」

「え、ええ!!!？」

メイルは熱斗に怒鳴るように返事をした。

「だって、熱斗と銀色さん、会ってすぐにいい雰囲気になっちゃって、会ったその日に抱き合っているところ見ちゃって、気が付くと銀色さん、熱斗のこと見てることがあって、それに・・・それに・・・」

「メイルちゃん、落ち着いて!!」

熱斗は錯乱しているメイルを落ち着かせようとするが、メイルの気持ちの高ぶりはまるで静まらない。

「私は、熱斗と銀色さんがお互いを好きになっただろうしよっつてずっと不安で仕方がなかったのよ!!!!!!」

「.....!!」

メイルは顔を真っ赤にして、だが熱斗の顔を真っ直ぐに見て自分の気持ちをさらけ出した。

銀色と炎山以外のみんなはメイルの告白に顔を真っ赤にしてしまい、銀色と炎山は落ち着いた目で熱斗とメイルを見ていた。

「あ.....!!」

メイルはパニックになって今自分が言ってしまったことに気づき、さらに顔を真っ赤にして熱斗から視線を逸らす。

熱斗は熱斗で顔を真っ赤にして何といえれば良いのか分からず、黙ったままだ。

「お前達、ここを離れるぞ」

突然、炎山がその沈黙を破るようにみんなに言った。



もその後を追うように階段を降りていき、  
結果、丘には熱斗とメールの二人つきりになった。

「……………」

二人はしばらく時間が止まってしまったように黙り続けていたが、  
熱斗がおもむろに口を開いた。

「銀色さん、もう好きな人いるって言った。」

「えっ!？」

「ここ、その人に連れてきたもらった場所なんだって……」

「そっ、それじゃあ……………」

「オレと銀色さんが付き合うなんて、ありえないってこと!」

メールはそれを聞いて体から力が抜けていくのを感じた。すべて  
は自分のただの思い込みだったのだ。

「メールちゃん、オレ、銀色さんは俺を見てたんじゃないと思う。」

「えっ、それってどういうこと?」

「銀色さん、オレを見てるっていうより、オレ越しに誰かを見てた  
ような気がするんだ。」

「誰かって誰?」

「そんなのオレだって分かんないよ。てかつ、メールちゃん。」

「ん?」

「手、いつまで握ってるの?」

「……………はっ!」

そう、メールはあの衝撃の告白から今まで、ずっと、熱斗の手  
を握っていたのだ。

メールは慌てて熱斗の手を離すと、一歩距離をとった。

「メールちゃん……………」

熱斗は少し目を細め、メールにまた話しかけてくる。メールはそれ少し下を向いて聞いていた。

(どうしよう、熱斗、きつと呆れてる、こんなストーカーみたいなことして)

「オレ……」

(私のこと、嫌いになったかも……)

「メールちゃんのこと……」

(もう、ダメ……!!!!)

「嫌いじゃないよ……」

「……えっ!?!」

メールはバツと顔を上げた、メールが見た熱斗は少し微笑んでいるような感じだった。

「つーか、ゴメン、なんかオレ、気が付かないうちにメールちゃんをすごい不安にさせてたみたいで……。」

熱斗は頬を指でポリポリ掻きながら、メールに申し訳なさそうに謝る。

「そんな、私もこんなストーリーカーまがいなこととして、ゴメンネ。」  
メールも手をもじもじさせながら、熱斗に謝る。

「……あー、それより、オレ達二人だけでここにいるのもなんだし、みんなのところ戻ろっか。」

「……!!」

熱斗は二人っきりのこの状況にこらえ切れず、みんなのところに戻ろっと言い、

階段のところへ歩き始める。

「あっ、……待って!!」

だがそれを、メールは熱斗の手を握り、止める。

「メールちゃん?」

「あの、その、せっかく二人っきりなんだから、もう少しここにしよう／＼／」

「……／＼／」

メールの提案に熱斗は今までにないくらい顔を真っ赤にするが、すぐにその手を握り返した。

「……／＼／」

メールは熱斗が握り返してきたことに熱斗と同じくらい顔を真っ赤にする。

「そうだね、せっかく、二人っきりなんだし……。」  
熱斗とメールはその後、しばらく二人っきりで花畑の丘の上でそ



の丘から見える風景を眺めていた。

そしてその後、炎山達からPETにメールが来た。

「自分達がこれ以上いるのは邪魔みたいなので帰ります。」という内容だった。

だが、熱斗のPETに届いた銀色からのメールは違う内容だった。

TO：光 熱斗

熱斗君、自分から呼び出しておいて先に帰ってしまい、本当にゴメンナサイ。

熱斗君に話したいと言っていたことについてなんですが、このことは私から話すべきではないと、丘から離れた後考え直したのです。

自分勝手なことかと思いますが、どうか分かってください。

このことは、私がじゃばってはいけないことだったのです。

私があなたに話せるのはここまで。いつか、熱斗君がすべてを知るときまで、

このことは私と熱斗君の秘密にしてください。（本当に、身勝手なお願いばかりしてゴメンナサイ。）

それではまた、パーツ探しの時に会いましょう。

よ、熱斗君  
P S ・ 一これからは、メールちゃんを不安にさせないようにします

F r o m : 銀色

第三十六話 嫌いじゃないよ・・・(後書き)

次からはいつもどおりな展開になってきます。

第三十七話 動き出す闇（前書き）

何か最近怠けてたから文章力が落ちてきた・・・!!??

## 第三十七話 動き出す闇

ギヤー、ギヤー・・・ ビカ!!ゴロゴロゴロ・・・

今にも嵐になりそうな雲行き・・・、そしてそこにそびえ立つ古い洋館・・・。

ホラー映画の撮影には打って付けなその洋館の前に、六人の少年少女が立っていた。

「此処か・・・。」

「ガタガタ・・・ブルブル・・・。」

「だ、だらしないわね。男子のくせに。」

「でも、やっぱり何か出そうじゃない?」

「・・・いる。」

「えっ!!!?」

炎山、デカオ、やいと、メイル、銀色、熱斗の順に言う。

何故熱斗達がこんなおどおどろしい洋館の前に立っているかという  
と、

今から数時間前に遡る・・・。

数時間前 科学省

「ゆ、幽霊屋敷!?!」

スバルが声を震わせて言った。

「あ、ああ、テキストデータの解析がやっと出来てね、それによる  
と第四のパーツは

秋原町の外れに在る廃屋になった館にあるみたいなんだ。」

光博士はスバルの驚きようにすこしよろめきながら答えた。

『面白えじゃねえか!!』

『面白いわけないだろ!? ウォーロック!!!』

何だつて光 正博士はそんなところにパーツを隠したんだよ!!?』

スバルは面白がるウォーロックに怒鳴るように抗議する。

そんなスバルの様子をみんな驚きながら見ていた。

「スバルつて幽霊とかダメなんだ……。」

「うん、かなり重症らしいよ? 戦っている時とかそんなところ見せないんだけどな。」

熱斗の疑問にミソラが答える。

「そうゆう所つて、ロックマンに似てるね。」

「でもこのままじゃ、『行きたくない!!』つて言い出しそうよ。」

「えっ!? それは困る!!」

上からメール、やいと、熱斗の順に言う。

「あつ! じゃあこつゆつのどうかな? スバル君絶対『行く!!』つて言うよ!!」

ミソラはそういうとメール、やいと、熱斗に耳打ちした。

『じゃあどうすんだよ!? まさか行かないなんて言うんじゃないだろうな!!』

「そういうことじゃないだろ!? だいたいウォーロックはいつも……。」

スバルとウォーロックの口げんかはだんだん大きくなっていった。

「似てるな……。」

そこへ突然、熱斗が呟くように、だがスバルたちに聞こえるよう

に言った。

「『えっ?』」

スバルとウォーロックは口げんかを止めて熱斗の方を向いた。

「ロックマンもお化けとか幽霊とか大の苦手でさ………、口ツクマン、ぶじだよな?」

熱斗はそういうと顔を伏せ、スバルに背を向けた。よく見ると体が少し震えている。

「ね、熱斗君?」

『アア、泣かせちゃった。』

熱斗に呼びかけるスバルにウォーロックが追い討ちをかける。

だがこれは全てミソラの作戦なのだ。

つまり、熱斗が怖がっているスバルを見て、ロックマンのことを思い出して悲しむフリをし、

スバルに否が応でも『行く!』と言わせる作戦なのだ。

「熱斗君、そんな泣かなくても……」

スバルはオドオドしながら熱斗に声をかける。

「オレがもつとしっかりしていれば、スバルに頼るしか、

みんなと一緒に戦うことが出来ないなんてこと無かったのに……

……、グズツ……。」

「ウワアア!? ね、熱斗君!？」

『どーすんだよ、スバル?』

「どーすると言われても……!? 行く! 行くよ!!! 熱斗君

!!!

だから泣かないで!!!」





幽霊が出てこないことを  
一心不乱に祈っている。

『スバル、オマエのその怖がりなんかならないのか？』  
ウォーロックはそんなスバルを呆れ顔で見ている。

「だ、だって、もし本当に幽霊が出てきたらどうするんだよ!?!?  
幽霊にロックバスターが  
効くと思う!?!?」

「効かないかな?」  
スバルの疑問に熱斗が答える。

「うわ~~~~ん~~~~!!」  
スバルは熱斗の言葉に泣き出しそうな悲鳴(?)を上げる。  
みんなはそれをやさしい、そして呆れた目で見える。

だがこの時、みんなは気付いていなかった。  
洋館の中の窓から、二人の人物が熱斗達を見下ろしていたことに  
.....

「アレが、二百年前の英雄とその仲間達ですか」  
.....  
二人の人物は熱斗達を観察するように見下ろす。

「しかし、こつも早く星河 スバルに復讐するチャンスが出来ると  
は.....」  
「.....今回のボク達の目的は、復讐じゃない。それに.....」  
「分かっている、今回の作戦はすべて君が指揮を取るんだ。自分

勝手なことはいらないよ……。」

「……ロックマン！」

第三十八話 幽霊屋敷はトラップがいっぱい!? (前書き)

炎山

「この小説は納得いかん!! どうして、オレがぜんぜん活躍しないんだ!!?」

フレイム・ナイト

「へっへっへっ、落ち着いて下さい、炎山の旦那。ちやーんとブルースの出番考えてますから!!」

炎山

「何!? それは本当か!!?」

フレイム・ナイト

「ホントも何も、炎山とブルースのクールな戦略と鋭いソードの切れのバトルを考えてますから!!!!」

炎山

「それなら、もう少し出ていてやるか……………」

「(少し笑い)

熱斗

「おい、炎山。そいつのこと……………」

スバル

「あんまり信用しないほうがいいよー!」

第三十八話 幽霊屋敷はトラップがいっぱい!?

ギギー……、炎山が錆びれた洋館の扉を開ける。

「入るぞ。」

炎山を先頭に熱斗達は館の中へ慎重に足を運び入れる。

中に入るとそこは玄関ホールになっていて、奥には二階へと続く階段が左右につけられていた。

「スツゲー……、やいとちゃん家みたいだ。」

「失礼ねえ、熱斗、私ん家はもつと豪華で華やかな雰囲気醸し出してんだからね!！」

「なにを無駄話している!? 行くぞ……。」

炎山はそういうと、二階への階段に足をかけた。すると階段から『ピピッ』という音が鳴った。

「……!?!?!」

炎山は急いで階段から離れると、階段の上から二本の槍が降って来た。

「な、なんだ!?!」

「ひえ〜!?!」

「トラップ……!?!」

「幽霊が落としたんだ〜!?!」

熱斗、やいと、銀色、デカオの順に言った。

「炎山様！ 大変です！！ 突然、この洋館の至る所からウィルス反応が！！」

「今のもウィルスの仕業だぜ！！」  
ウィルスの反応にいち早く察知したブルースとウォーロックがみんなにウィルスの存在を伝える。

「えっ！？ なんでこんな所にウィルスが？」

「知るか！ それよりも早くウィルスを倒さないと・・・！！」

「手分けしてウィルスを倒すしかないわね。」

「えっ！？ バラバラに分かれるのか！？」

「今はそれしかないだろ！？」

銀色、デカオ、熱斗の順に言う。

「よし、行くぞ！！」

炎山の言葉をキツカケに、みんな洋館の奥へとバラバラに入って行った。

だがその中で、スバル、メイル、やいと、デカオの四人はこう祈っていた。

(どうか幽霊が出てきませんように・・・！！！！)

「ソフフ・・・、計画通りあいつや分かれたな・・・。」  
「手筈通り、ボクはパーツを手に入れる・・・。ファントム・ブ  
ラック、スワローマン、お前達も・・・。」  
『「了解!」!」』

### 第三十九話 銀色の涙

『ロールアロー!!!!』

『ガッツパンチ!!!!』

『グライドキャノン!!!!』

『ブルースソード!!!!』

『オカリナソード!!!!』

『パルスソング!!!!』

『ロックバスター!!!!』

ロール、ガッツマン、グライド、ブルース、銀色、ミソラ、スバル、それぞれの必殺技が大量のウィルスに炸裂した。

みな洋館内でバラバラに別れた後、ウィルスの反応の在る所へプラグインしてウィルスを倒していたのだ。

—— 洋館内 銀色場面 ——

「ハア!!!」

銀色のオカリナブレードが残ったウィルスを一掃する。

「フウ・・・」

銀色は全てのウィルスを倒すと、剣をオカリナに戻し、首にかけた。

「アリエル、ウィルスは今ので最後？」

『エエ、この電腦世界にはもうウィルスの反応は無いわ。』

「そう、それじゃあみんなの所へ援軍に・・・、えっ？」

銀色はそう声を漏らすと、ある一点を見つめた。  
そこには、ワープホールの上に乗る一人の人影があった。

『えっ、ウソ？ あれって……』

「後を追おう!!」

銀色はそういうと、ワープホールに乗り、その人影を追った。

「ここは……?」

銀色はワープホールから辺りを見回した。

そこは洋館の電腦のどこかのようなのだが、夜のように暗く、冷気が漂っているような感じだった。

だが一箇所だけ、淡く金色に光り、浮かぶそれがあった。

『ねえ、銀色……。 あれ……!!』

アリエルはその光る物体を指差しながら言った。

『………ホープ・キー……。』



『「……………!!!?」』

後ろから声が聞こえた。銀色は慌てて振り返ると、そこには青い少年ナビ)……………(が立っていた。

「君は……………」

銀色は恐る恐るといった感じでそのナビに話しかけた。

『銀色……………、なぜ君がここに居るんだ?』

ナビは銀色の問いには答えず、逆に問いかけてきた。その口調は、とても悲しく、大人びていた。

銀色は、その喋り方に、いや、その声に聴き覚えがあった。

「……………なっ、まさか、あなたは!!!?」

銀色はそういうと二、三步後ずさった。

『そ、そんなのあなたに関係ないでしょ!? 銀色! こいつネビユラのナビに違いないわ!! 早くやつつけちゃおう!!』

アリエルは銀色に戦うように促す。

「ダ、ダメ! 出来ないわ!!」

『どうして!!!?』

銀色は体が硬直してしまったように動かず、戦うことを拒否する。

『……………。そんなことで、ネビユラに、闇と戦おうとしたのか……………。無謀だよ、銀色。』

ナビはそういうと右腕をバスターに換え、銀色に向けた。そして……………、

『この戦いから、身を退け……。』  
ナビの放った弾丸が銀色を襲った。

数分後

「……。う、うん？」

銀色はゆっくりと体を起こし、あたりを見回した。  
そこは変わらず、夜のような闇が包み込んでいるだけだった。

「私、どうしたんだっけ……。？」

銀色は頭を抑え、自分の身に何が起きたのか思い出す。

（あの時、彼が撃ったバスターの直撃を受けて……。それで気を失って……。）

銀色はそこまで思い出すと、バスターが当たった右肩を触った。  
だが右肩には何の怪我也なかった。　どうやら気絶する程度に威力

を抑えて撃つたみたいだ。

「あっ、ホープ・キー!!!」

銀色はホープ・キーの在ったところを見る。だがそこには無く、周りを見てもその影も見当たらない。

どうやら、あのナビが持つていつてしまったようだ。

「…………… どうして、あなたがこんなことを…………？」

銀色はあのナビのことを思い出し、その瞳に涙を浮かべた。

「…………… 彩斗」

## 第四十話 闇紳士 復活

「ちくしょー！ 一体どうなってるんだ!？」

「倒しても、倒しても、キリが無いよ!！」

ウォーロックとスバルが荒い息で呼吸して、目の前の大量のウイルス達を睨み付ける。

ウイルスバスティングをして三十分、ウイルスは倒してもすぐどこからともなく現れ、少しも減ってはいなかったのだ。

「・・・っ、バトルチップ・センシャホウ、スロットイン!！」

熱斗はバトルチップをスバルに転送する。するとスバルの右腕が小さな大砲へと変化した。

「センシャホウ!！」

スバルは大砲をウイルス達に目掛けて発射する。

ドカン!!! 大きな爆音と共にウイルスの五分の一がデリートされた。

しかし・・・、

「ちっ、まただ・・・!!！」

ウォーロックが舌打ちをする。ウイルスはまたどこからとも無く現れて、まったくその数は減っていないかった。

「このウイルス達、一体どこから来るんだ!! これじゃあキリが無いよ!!!！」

「キリが無くて、倒さねえとまずいだろ!！」

弱音を吐くスバルにウォーロックがカツを飛ばす。

「ぐあー！ー！！！！ もうまどろっこしい！！！！ 一気にいくぞ、  
プログラムアドバンス！！！！！！」

熱斗はそういうとホルダーから三枚のチップを取り出した。

「えっ、ちよっ、熱斗君！？」

スバルは慌てて止めようとするが、熱斗はそんなスバルにお構い無しにチップをスロットインした。

「バトルチップ・スプレットガン、トリプルスロットイン！！！！」

「あー、もうヤケクソだ！！！！ プログラムアドバンス！！！！」

「『ハイパーバースト！！！！！！』」

スバルの両腕が強大なスプレット砲に変わり、そこから青白い光線がウィルス全てを一気に襲った。

しかし、このハイパーバーストが普通よりも威力がすごく思えるのは、これが二人の英雄の怒りのパワーということなのか？

「ハア・・・」

スバルはフラフラと地面にしゃがみ込んだ。 三十分以上もウィルスの相手をしてきたのだ、疲れるのは当然だ。

「大丈夫か！？スバル！！」

「うん、大丈夫、ちよっとな疲れただけ・・・」

スバルは少し荒い息で返事をした。

『やっとウィルスが出てこなくなっただぜ・・・』  
ウォーロックは肩で息をしながら言った。

「ソフフフ・・・ 久しぶりの再会のセレモニー、どうだったかな？」

「『・・・！！！！』」

突然、上から大人びた声が聞こえてきた。スバルが上を見上げるとそこには、

黒いシルクハットに黒いマントを見に付けた黒いボディ、そしてその右手に黒い杖を持つ紳士のような風貌の者がいた。

「ファントム・ブラック！！？」

『生きていやがったのか！？』

スバルとウォーロックは目を大きく見開いて驚いた。

だがしかし、ファントム・ブラックはWAXA襲撃事件の時、スバル達に敗れ、

電脳の奈落に落ちて行方不明になっていたはずだ。

「あの時、電腦の奈落到ち、死を覚悟した私の前に、あの方が、Dr・ガルナが現れたのだ。」

「なんだって!?!」

「Dr・ガルナは私にこう言った。『私と共に新たな世界を創ろう。真の闇の世界を』と……。」

ファントム・ブラックは両手を大きく広げ、その時の感動を思い出すように言った。

『ケツ、それじゃあこのウイルス騒動も、オマエの完璧なシナリオってやつか!?!』

「フフフ……、それはちょっと違うな、今回は私の相方の要望が入っているのだよ。」

「相方?」

「アア、光 熱斗、オマエに用があるらしい。」

その時だった、熱斗が後ろから気配を感じたのは。熱斗はすぐに振り向こうとしたが遅かった。

振り向く瞬間に首筋に鈍い衝撃を感じ、熱斗はそのまま意識を失った。

その人物は、意識を失い、崩れ落ちる熱斗の体を抱え上げると、そのままどこかへと行ってしまった。

「熱斗君! 熱斗君!?!」

スバルは突然熱斗からの反応が無くなり、熱斗のPETに呼びかけるが、熱斗からの応答がまったくない。

「ンフフフ、どうしたのかね？」

ファントム・ブラックはスバルを嘲笑うように言った。

「ファントム・ブラック、キサマ・・・!!!!!!」

『テメエ、熱斗に何しやがった!!!!?』

「ンフフフ、さあね？ おそらく私の相方の仕業だろうが、彼はなにを考えているかまったく分からないのだよ。

それより今は、自分達の心配をしたらどうだ？」

「『・・・・・・・・!!!!!!』」

スバルとウオーロックはその言葉に顔を強張らせる。確かに、今のスバルは体力をかなり消耗している上に、熱斗との通信が途絶えた今、スバルをオペレートしてくれる者はいない。

こんな状態で敵に攻撃されたひとたまりも無い、まさに絶体絶命の状況だ。

「今ならオマエの首を取る絶好の機会なんだが・・・」

ファントム・ブラックはそういうとスバルに背を向けた。

「・・・・・・・・・・?」

スバルはそれを不思議そうに見る。

「こんな簡単に復讐を果たしはしない。じっくり、身も心も痛ぶつてから・・・・・・・・・・、」  
ファントム・ブラックは顔だけをスバルに向けて、こつ吐き捨てた。



「殺してやる・・・!!!!」

スバルはその目を見てゾツとした。その目は、復讐心という名の狂気で満ち溢れていたからだ。

そしてファントム・ブラックは、影のように消えてしまった・・・。

第四十一話 VS スワローマン（前書き）

フレーム・ナイト

「久しぶりの更新！！」

ウォーロック

『にしては短いよな・・・』

フレーム・ナイト

「・・・言わないで・・・。」

## 第四十一話 VS スワロマン

『ブルースソード!!』

ブルースの一閃がウィルスを一掃する。しかし、その瞬間から新しいウィルスが次々とやって来る。

『クッ……!!』

「これじゃあキリが無い……!!」

さすがの炎山とブルースも、こう次々とウィルスがやってくるとうんざりしてしまう。

だがここにさらに追い討ちをかける様に……、

『オマエが、ブルースか?』

「……!!!!」

突然、頭上から声が聞こえてきた。ブルースが上を見上げるとそこには青い、巨大なツバメを思わせる容姿のネットナビが立っていた。

そのナビは空中で一回転すると、ゆっくりと地上に降りてきた。

『キサマ、ダーククロイドだな!?!』

『そう、オレの名はスワロマン、偶然会ったネットナビがネットセイバーのナビとはな……。』

スワロマンはウデ組をしたまま言った。

「このウィルス達も、オマエの仕業か!？」  
炎山がスワローマンに聞いたです。

『ああ、そうだ。 ついでに、このウィルス達は俺が倒されると同時に消える。』

『なるほど、つまりオマエを倒しさえすれば良いという訳か。』  
ブルースはソードの矛先をスワローマンに向ける。

『フフ、やる気だな、だが・・・、オレのスピードについてこれるかな!!!?』

スワローマンはそういうと空中に舞い上がった。

『スワロードライブ!!!』

ツバメのような姿になったスワローマンがブルース目掛けて突進してきた。

だがブルースは横にジャンプすることでそれを交わす。

しかし・・・、

『メット〜〜!!』

ブルースが後ろを見ると、数体のメットールがブルースに体当たりを仕掛けてきた。

『クツ・・・!?!』

ブルースは体を捻ってそれを避ける。

『ハハハハツ!!! 相手はオレ一人じゃないぞ!!!  
ここにいる数十体のウイルス全てだ!!!』

『クツ・・・!』

『卑怯な・・・!!』

『行け!! ウィルス達よ!!!』

スワローマンの掛け声と同時に、ウィルス達が一斉にブルースを襲う。

『ハア、ハア・・・』

『銀色大丈夫!?!』

電波変換を解除し、館の壁に寄りかかる銀色をアリエルが心配する。

『大丈夫よ、アリエル。色々あってちょっと頭が混乱しているだけ・・・。』

『頭が混乱って、ねえ銀色、あなたあのナビと知り合いみたいな感じだったけど、

あのナビは一体・・・。』

『・・・。。。。』

銀色はアリエルの質問に黙ってしまふ。

『・・・銀色!』

「いつか、話さなくちゃいけないと思ってた。アリエル、このことはみんなには言わないで・・・、まだ・・・。」

銀色はそついうと重たい口を開いた。

第四十二話 一瞬の剣(前書き)

炎山とブルースのバトル、カッコよく書けたかな？

## 第四十二話 一瞬の剣

(なぜだ？ なぜ攻撃が当たらない！？)

ブルースに休むことなく攻撃とウィルスを仕掛けるスワローマンのその顔には

余裕は無く、むしろ焦りさえ感じ取られる。

『どうした？ 自慢のスピードとはこの程度なのか？』

ブルースは澄ました表情でスワローマンを挑発する。

『クッ、調子に乗るな！！ スワローカッター！！！！』

スワローマンはさらに威力を上げた鳥型の衝撃波をブルースに打ち出す。

しかし、それをブルースは体を横に反らし簡単に避ける。それだけではない……。

『ガル~~~~！！？』

ブルースの後ろから攻撃を仕掛けようとしたガルーバーに、スワローカッターが直撃した。

(まただ！ さっきから何度攻撃しても、ああやってオレの攻撃を避け、ウィルスをデリートする……！！！)

スワローマンは有利と思っていたバトルがなかなか思い通りにい



かず、齒軋りをする。

「・・・スピードに頼った戦い方は、攻撃の正確さを失わせる。奴はそれに気が付いていない。」

炎山はブルースをオペレートしながら呟いた。

そう、スワローマンは確かに攻撃も、自分自身もブルース以上のスピードを誇っている。

だがそのあまりのスピードの速さに、攻撃の正確さを失われているのにスワローマンは気が付いていない。

「そろそろ決着をつけるぞ！」

ブルースはそういうとスワローマンに向かって突進してきた。

「クツ、なめるな〜！！ スワロードライブ！！！」

スワローマンも燕の形態に姿を変えると、ブルースに向かって突進してきた。

「『・・・斬！！！！！』」

次の瞬間、ブルースのソードの斬激によって、スワローマンの胴体が一刀両断された。

『ガッ……!!? (まさか!?) たかがソードにこんな威力があるわけ……!!?)』

スワローマンはそのまま地面に墜落する形で地面に倒れ落ちた。

『スピードがあればある程、剣の威力は上がる。オレの挑発に乗り、フルスピードで突っ込んできたオマエには、普通の何倍もの威力の斬激が与えられたという訳だ……。』  
ブルースはそっぴいなながらソードを腕に戻した。

「剣を知り、その鋭さを上げ、それと共に自らの肉体と精神を鍛え上げる。」

『そしてネットバトルにおいて、冷静さを欠かないことを忘れず、戦略を練り上げ……斬る!!』

「『それが俺達のネットバトルだ!』」

PPP!! PPP!!



「ど、どうしたの!？」

「うるさいわねー!!！」

大声の後、デカオ、メイル、やいとの声が聞こえてきた。どうやらこの通信は全員に繋がっているみたいだ。

「で、どうしたんだ? いきなり?」

炎山は片耳を押さえ、しかめっ面で聞いてきた。

「た、大変なんだ!!！」

『そーだ! 大変なんだ!!!!』

『こっちも大変なのよ!!! ねえ、銀色!?!』

「ええ、・・・ゴメンナサイ・・・。」

「だから、何が大変なんだ。」

炎山は苛立ちながらスバル達に問う。

「『熱斗君(熱斗の野郎)が・・・!!!!』」

「『ホープキーが・・・!!!!』」



## 第四十二話 一瞬の剣（後書き）

熱斗

「次回、いよいよ謎の少年ナビの正体が明らかに……！」

フレイム・ナイト

「ここで、クイズー……！」

スバル

「な、何なの作者、いきなり!？」

フレイム・ナイト

「次回、第四十三話に於いての問題！」

次回明かされるのは、謎の少年ナビの正体だけではなく、もう一つ明らかにされるのがあります。さて、それは何でしょう？」

ウォーロック

『えっ!？ 他にもあるのか』

熱斗

「一体なんだろう?。」

スバル

「さっぱり分かんない?。」

ブライ

「……きさまら（怒）……！」

熱斗・スバル・ウォーロック  
「『げっ、ブライー!!』」

第四十三話 悲しい再開（前書き）

今回はちょっとは長く書けたかな？



## 第四十三話 悲しい再開

ここは、どこだ・・・？

風が気持ちいい・・・。

熱斗は、そんなことを感じながら、ゆっくりと目を開けた。

「・・・ここは、どこだ？」

目を開け、横を見ると、そこには自分の視線と同じ高さにある色とりどりの花達が見えた。そこで熱斗はようやく、自分が花畑の中で寝転がっていることに気が付いた。

(オレ、どうしてここにいるんだっけ？ 確かあの屋敷の中で、フアントムなんとかって奴に会って、それで・・・)

そこまで思い出すと熱斗はいきおいよく起き上がった。

「そーだ！！ あの時後ろから誰かに襲われて気が付いたらココに  
．．．！！」

熱斗はそう大声を上げながら立つと周りを見渡した。

今は真夜中で暗くはあったが、月光がその場所を照らしていた。

そこは海に面した小さな丘で、その丘には様々な種類の花が月光を  
浴び、美しく咲き誇っていた。

「ココはどこだー！！ ってココは．．．！！」

『．．．．．ピュアル．．．、もっとも強く記憶に残っている場  
所』

後ろから声が聞こえてきた。

熱斗が振り向くと、そこには青いネットナビ ロックマンが立って  
いた。

「．．．．．ロックマン」

熱斗は、ネビュラに捕らわれているはずの親友が目の前に立って

いることに、驚き、立ち尽くしてしまった。

「……ロックマン、オマエ、無事で……良かった、やっと……  
会えた……。」

熱斗は片言の言葉を話すと、ロックマンに近づいた。  
その目には喜びで涙が浮かんでいた。

だが……、

『……オマエが、光 熱斗……』  
「……えっ!?!」

熱斗はロックマンのその口調に歩を進めるのを止めた。  
ロックマンが熱斗をそんな風に呼ぶはずが無いからだ。

「ロックマン、どうしちゃったんだよ、その喋り方!? まるで、  
オレのこと……!」

『忘れてしまったかのよう、だろ?』  
ロックマンは冷ややかにそう言った。

その目には、何も見えず、暗い海のそのような黒い光があった。

「ロックマン、どうしてだよ、なんでそんな風に!!!?!?」  
熱斗は、親友のあまりの豹変振りに声を荒げた。

「……あの後、ネビュラに捕らえられたロックマンは、ダークチップを体に埋め込まれ、  
君が知っているロックマンは心の奥底に閉じ込められてしまった……」

「ロックマンは淡々とした口調で言った。」

「……えっ!!!?!?」

「今君の目の前にいるのは、ロックマンの心の奥底に眠っていた感情。」

「ロックマンの心の……闇の塊さ……。」

「ロックマンは自分の胸のナビマークに触りながら言った。」

「そんな……、それじゃあオマエは……!!!?!?」

「……ボクの名は、ダークロックマン。ネビュラのナビだ……」

「・・・見つけたぞ!!」

「『・・・!!?』」

熱斗とダークロックマンが声のした方を向くと、そこには、両腕両足に赤いアーマー、紫のバイザーに胸に赤いマークがついている銀色の髪の少年 ブライが立っていた。

「オマエは、確かのスバルの知り合いの・・・!!? どうしてココに!?!」

熱斗はブライに問いかけるが、ブライはまったく聞く耳を持たず、ダークロックマンを睨み付けた。

『ムーの末裔か・・・』

ダークロックマンもそうゆうとブライに向き直った。ブライとダークロックマンの間で緊迫した空気が漂う。

その空気を最初に破ったのはブライだった。

「・・・ラプラス!!」

『・・・ギッ・・・ガ・・・!!』

ブライの呼ぶ声に反応して、ブライの後ろからラプラスが姿を現す。

そしてラプラスは次の瞬間、紫のオーラを纏った大剣に姿を変えた。ブライは剣を掴むと、ダークロックマンに斬りかかった。

「やめろ!!!」

だがそれを、熱斗がブライとダークロックマンの間に割り込むことで止める。

「邪魔をするな……!!!」

ブライは熱斗を睨み付けながら言った。

「ふ、ふざけんな!! いきなり何すんだよ!?!」

熱斗も負けじとブライを睨み付ける。

「ムーの力を悪用せし者に裁きを……」

「えっ? ムーの力?」

「疑問には思わなかったか? 何故そのナビがこの現実世界に実体化しているのか?」

「……!!!」

ブライの言葉に熱斗はダークロックマンの方へ振り返る。

「ロックマン! まさか!?!」

『君の予想している通りだよ。ボクはムーの技術を使って実体化しているんだ。』

「……!!!?」

ダークロックマンはゆっくりと自分の右腕を上げて熱斗に見せた。その腕には、ブライの胸の紋章と同じマークが付いたブレスレットがしてあった。

「それは？」

『ムーの技術を使って作った、ネットナビを実体化させる装置だ。ボクはコレを使って実体化しているんだ。』

「でも、なんで、どうしてそんな物を持つてんだよ!？」

熱斗はダークロックマンに詰め寄る。

「Dr・ガルナの仕業だ……。」

「えっ!？」

突然、ブライが口を開いた。熱斗はそれに反射でブライの方を振り向く。

「Dr・ガルナが二百年後の世界で手に入れたムーの技術をこの時代に持ってきたのだ。」

そして、古代都市・スカイバート……ムーの遺跡をもこんなくだらないことのために……!！」

ブライは冷静さを装ってはいるが、その口調からは怒りが滲み出していた。

「さあ、話は終わりだ。そこを退け!! そのナビは今ここでオレが斬る……!！」

ブライは剣の矛先をダークロックマンに向ける。

「嫌だ!! 絶対にどかなえ!!！」

熱斗はそういうとダークロックマンを後ろにしたまま、ダークロックマンの右手を掴んだ。

『……!?!? 何をする!?!?』

ダークロックマンは心底驚いた風に熱斗に話しかけた。

「オマエがロックマンの闇で、今はネビュラのナビとか、そんなの  
どうでもいい!!」

ロックマンはオレの親友だから、だから、死んでもオマエを護る！  
「!!」

そうゆう熱斗の目には、力強い光があった。

「ならば、二人まとめて斬るだけだ!!!!」

ブライはそうゆうと熱斗に向かって大剣を振り落とした。

「・・・やめるおお!!!!」

「「『』・・・!!!?!?」」

突然の大声にブライは熱斗の顔面スレスレで剣を止める。

三人が声のした方を見ると、そこには・・・

「スバル!!!!」



「熱斗君！！！」

「大丈夫か！！　おい！？」

息を切らせたスバルとウォーロックがいた。

## 第四十三話 悲しい再開（後書き）

フレイム・ナイト

「本編では詳しく触れていないんだけど、  
実はスカイバートはムーの遺跡という設定なんだ。」

ブライ

「二百年後の世界にはもうないが、スカイバートがムー大陸のように空中に浮かんでいるような建造だったり、地下遺跡の中にネットバトルマシンがあったのはそうゆう理由だ。」

スバル

「そ、そうなんだ・・・。」

ウォーロック

『まさかコイツがここに現れて解説するとは・・・。』

熱斗

「それより作者!!! この後の展開どうなんだよ!!! おい!?!?」

フレイム・ナイト

「だいじょーぶ! ちゃんと考えてるから!!!」

熱斗・スバル・ウォーロック・ブライ

（（（大丈夫か?）））

フレイム・ナイト

「次回、新たなクロス・マジシャンが!!!!!!」

第四十四話 Ver・ナイトマジシャン!!

—— 今より少し前 第四十二話の通信時 ——

「ちょっと、熱斗がさらわれたってどうゆう事!?!」  
洋館内にメイルの声が響く。

「ゴ、ゴメン……。」「  
『すまねえ、俺達が付いていながら……。』」  
通信越しにスバルとウォーロックの申し訳なさそうな声が聞こえる。

「クソッ!! ロックマンだけじゃなく熱斗まで……。!!!」  
デカオが握りこぶしを作って言う。

「とにかく!! 早く光君を助けないと!!!」  
やいとはかなりあせった声で言う。

「だがどうやって!?!」  
やいとに炎山が問う。

「そ、それは……。」「  
やいとは炎山の言葉に声を詰まらせる。

『手ならあるわ!!!』  
突然、ハーブが通信に入ってきた。

「えっ!!」

『本当か、ハープ!!?』

『エエ!! 私達電波体だけに使える手が!!』

「熱斗君のPETに残ってるスバル君の残留電波を追えば……!!」

ハープの言葉を次いで、ミソラがその方法をみんなに教える。

「そっか、その手があつたか!!」

『行くぞ!! スバル!!』

「スバル君、君は先に行つて!! 私達もすぐに後を追うから!!」

「ハイ!! 銀色さん!!」

スバルはそうゆうと蒼き光に変わって、夜の空へ駆けて行った。

—— 現在 ピュアル ——

「スバル!!?」

「ね、熱斗君!!」

『だ、だいじょーぶか!?』

スバルとウォーロックは息切れ切れに言う。 どうやらあの洋館からココ、ピュアルまで

全力疾走してきたらしい。

「星河 スバル……!!」

ブライは熱斗達から今度はスバルの方に向き直る。

「ブライ……。一体何をして……。って!? ロックマン!?!」

『ど、どうゆうこと!?!』

スバルとウォーロックはここでやっと、熱斗の後ろにいるロックマンに気が付く。

「あ、いや、これはその……。、!! スバル危ない!!」  
「えっ!?!」

熱斗が事の状態は話すのに詰まっていると、熱斗は突然叫んだ。  
スバルが自分の前方を見ると、ブライがまたもや大剣を振り下ろそうとしていた。

「うわああああ!!!?!」

スバルは慌てて横に体を反らし、避ける。

『あ、あぶねえじゃねえか!! テメエ……。!!!』  
ウォーロックは心臓が飛び出す程に驚いて、ブライに怒鳴りつける。

「邪魔をするなら……。消す!!!」

ブライはそういうとスバルに再び切りかかった。

「くっ……。!!!」

スバルはブライの剣を見切ってかわす。

「スバル!!!」

熱斗はスバルのもとに駆け寄ろうとしたが、ダークロックマンが

その腕を掴んだ。

「離してくれ!!」

『行つてどうなる!? 邪魔になるだけだ!!』

ダークロックマンはそういうと、握った左手を熱斗に見せた。

「・・・?」

不思議そうに見る熱斗にダークロックマンは握った左手を開いて見せた。

「・・・!!!?」

熱斗は目を見開いた。ダークロックマンのその手には、金色に光るパーツがあった。

「これ、まさか!?!」

『ホープ・キー・・・、第四のパーツ・・・』

ダークロックマンはゆっくりとパーツを熱斗に握らせた。

『剣を、イメージして・・・。』

「えっ?」

『ホープ・キーは君にしか使えない・・・。』

ダークロックマンはそういうと熱斗の首を戦っているスバルとブライの方へ向けた。

『もう一度言う。 剣をイメージするんだ。 ブライに対抗できる、  
剣を！！！』

「……………！！！」

ダークロックマンにそう言われた熱斗は、何も言わず目を閉じる。

（あの時と同じように……。 初めて変身出来た時と同じように  
！！！！）

熱斗は、剣をイメージする。

（剣……。 あの黒い剣に太刀打ちできるような、すごい剣を……  
！！！！）

ブライの剣に対になるような、白く輝く剣を……………！！！！

「！？ これは！！！！？」  
ブライは驚くと、後ろに下がった。 スバルの体が突然光りだし  
たからだ。

『スバル！！！！』

「うん！ クロスマジシャン、発動！！！！」

スバルがそういうと、周りが見えなくなる程の光が起こった。  
そして光が収まった時、そこにいたのは……………

白い体にプラチナのマントを羽織り、両腕両足に銀色のアーマーを身に付け、  
白く光る聖剣を持った、聖騎士のような姿をした少年・スバルが立っていた。

「……!？」

ブライは変身したスバルを見ると何かを感じ取ったかのように後ろに下がった。

「スバル……。」

熱斗はそれを少しうつろな目で見ていた。

「……クロス・マジシャン、Ver・ナイトマジシャン……!」  
スバルは聖剣の矛先をブライに向ける。

「ブライ、これ以上戦うというのなら、僕達も全力で戦う……!」  
「……フツ……。」  
ブライは少し間を置いて、静かに目を閉じて、ラプラスをウィザードの姿に戻した。



「えっ……!?!」

スバルは突然戦闘体勢を解いたブライに驚く。

「今回は引いてやる……。だが……。」「  
ブライはそういうと、ダークロックマンを睨み付ける。

「ネビュラには必ずそれ相応の報いを食らわせてやる……。!?!」  
ブライはそういうと周波数を変えて、姿を消した。

「ブライ……。」「

『ケツ、相変わらず生けすかねえ野郎だぜ!』

ドサッ!!

突然、何かが地面に落ちる様な音がした。

スバルが音のした方を向くと、熱斗がダークロックマンを背にして倒れていた。

「熱斗君!?!」

『どうなってやがる!?!』

スバルは慌てて倒れた熱斗に駆け寄ると、熱斗を抱き起こした。  
熱斗はひどく疲労しているようで、顔に血の気がなく、息遣いも荒かった。

『今までの行き当たりばったりの変身ではなく、状況に応じた変身

をさせようとしたから、反動がきたんだ。』

「……!!!?」

ダークロックマンは突然口を開いた。その目は相変わらず、暗海のそのような黒い光があった。

「ロックマン……、どうして君がココに、ネビュラに捕らえられているはずの君が……?」

事情を知らないスバルは、ダークロックマンに問いかける。

『いずれ全てが分かる……。キーとロックが揃った時、『イキシア』が目覚める時に……。』

「えっ……?」

『イキ……シア……。?』

ダークロックマンはスバルの問いには答えず、謎めいた言葉をスバルに告げた。

そしてダークロックマンはそのまま、夜の暗闇に溶け込むようにスバル達の目の前から姿を消してしまった……。



第四十五話　それぞれが抱えるもの（前書き）

スバル

「やっと始まったね、新章。」

フレイム・ナイト

「ゴメン、進級とかなんだかでゴタゴタしてたもんで……。」

熱斗

「……いつもだろ。」

フレイム・ナイト

「それぐらい高三って大変なんだよ……!!」

第四十五話　それぞれが抱えるもの

—— 科学省 病室 ——

「熱斗君……。」

スバルが、ベットの中で眠っている熱斗を心配そうに見る。

あの後、ピュアルでの騒動の後、ハーブ・ノートとアリエル・ウオーテターのナビゲートで

やって来た炎山達が、気絶したままの熱斗を連れて科学省に帰ってきたのだ。

「熱斗、大丈夫だよね……?」

スバルの隣で、メールも熱斗を心配そうに見る。

「うん、ひどく体力を消耗していたみたいだけど、今はもう回復して、目覚めるのを待っただけらしいんだけど……。」

スバルはそういうと顔を伏せる。

そう、熱斗はもうすでに三日近く目を覚まさないのだ。　起きるか  
どうか、心配しているのだ。

—— 科学省 廊下 ——

「……。」

『銀色、大丈夫?』

病室の前の廊下で顔を伏せ、壁にもたれ掛かっている銀色に、アリエルが声をかける。

「うん、大丈夫よ……。」

銀色はPETを取り出して、アリエルにそう答える。  
銀色も熱斗の様子を見に来たのだが、ロックマンとの事もあり、なかなか病室に入れないでいるのだ。

『銀色、私、ちょっと出かけていいかな？』

「？ エエ、構わないけど……。」

『じゃあ、出かけてくるね！』

アリエルはそういうと、PETから姿を消した。

(みんな、今回の事で、なんか暗くなっちゃってるな)

アリエルはそう思いながら、外へと飛び出す。

(私、ウォーロック様の役に立ってるのかな……。結果的には  
パーツを手に入れられたけど、私結局、ダークロックマンに捕られ  
ちゃったし……。)

(あの人の役に立ちたい……。私を救ってくれた……。)

(私を……。LM星人の私を救ってくれた、AM星人のウォーロッ  
ク様のために……。)

——二ホン某所——

「ダークロックマン……。」

Dr・リーガルが、目の前に実体化しているダークロックマンに問いかける。

「何故ホープ・キーを光 熱斗に渡した・・・？」

「・・・知っているはずだ。あのカギは光 熱斗の手になれば意味を持たない。」

オラシオン・ロックがボクにしか使えないように・・・。」

ダークロックマンはDr・リーガルを睨み付けるようにそう言い返した。

「あまり、反抗的なことはしないほうがいい。」

部屋の扉が開くのと同時に、Dr・ガルナがそう言って入ってきた。

「ダークロックマン、お前を目覚めさせたのはこの私達だ。その気になればお前を再び

ロックマンの心の中に閉じ込めることも可能だ。」

Dr・ガルナはそっぴいなながらダークロックマンの頬をなでる。

「・・・分かっている。ボクは、目的を果たすためなら、なんでもする・・・。」

世界が闇に覆われようが関係ない・・・!!」

ダークロックマンはそういうと、姿を消した。実体化を解いて、  
電脳世界に戻ったのだ。

「・・・リーガル様、あいつを好きに行動させてよろしいのですか？」

「大丈夫だ、奴は必ず私の望み通りに行動してくれる。ダークロックマンの、」

リーガルはそういつと一旦間を空けた。

「光 熱斗と光 彩斗の過去を知っている私の望み通りにな・・・。

」

熱斗、アリエル、ダークロックマン・・・。

それぞれが抱えるものは、今、物語と共に巡っていきこうとしている・・・。



第四十五話　それぞれが抱えるもの（後書き）

スバル

「エ、LM星人!!?」

熱斗

「アリエルってFM星人じゃなかったのかよ!!?」

銀色

「.....」

熱斗

「ぎ、銀色さん.....?」

スバル

「銀色さんも、知らなかったんだね。」

熱斗

「でも、うでナビがアリエルを救ったってどうゆうことなんだ？  
一体この二人の過去に何があったんだらう?」

フレイム・ナイト

「それは、次の話で明らかに!!!!」

第四十六話

P a s t

o f

A l i e l { p a r t . 1 }

(前書き)

スバル

「ところでさ、アリエルの故郷の星の名前ってどうやって決めたの？」

フレイム・ナイト

「大変だったよ。考えてる時に『CM星』だの、『DM星』だの口挟んでくる奴らがいてさ」

ウォーロック

『奴や?』

熱斗

「だからさ、CMの方が面白くていいじゃん!」

切札 勝負

「いや! 絶対デエエマのDMだ!」

フレイム・ナイト

「あいつら。」

スバル

「って、なんでデエエルマスターズの勝負が……?」

ウォーロック

『映画で競演したことがあるからだだよ……』

## 第四十六話

P a s t

o f

A l i e n { p a r t . 1 }

LM星、AM星やFM星と同じ電波生命体が住む小さな田舎のよ  
うな電波惑星……。

それが、私、アリエルの生まれ故郷……。

そして、そのLM星はもうこの宇宙にはない。

AM星が滅んだ二、三年後に、FM星が送り込んできた最終電波兵  
器『アンドロメダ』によって、滅んでしまったから……。

あれは、ほとんど一瞬のことだった。

私はまだ物心ついたばかりだったけど、はっきり覚えてる。

突然、上空から禍々しい色のロボットが現れて、そのロボットが放  
った光で……、

全てが一瞬で吹き飛んだ。

その爆発に巻き込まれてながら私が生き残ったのは、奇跡と呼ぶ以  
外、言葉では表すことは出来ないと思う。

(ダメ……、体がまったく動けない……。)

動けない程にひどい傷を負ったアリエルが、宇宙空間を漂っていた。

ここはLM星があつた場所、でも今は小さな星屑が大量に漂う宇宙空間だ。

幼いアリエルはそこで、星屑と共に漂っていた。

(私、このまま死ぬの？ 一人ぼっちで……?)

そんなことを考えていたアリエルに何者かが近づいてきた。

(……誰!? もしかして、FM星人!?)

アリエルは何とか体を起こそうとするが、体に全く力が入らない。そうしている間にも、人影はだんだんアリエルに近づいて来る。

『……オマエ、生きているのか?』

その人影はアリエルの顔を覗き込みながら聞いた。

『F……M星……人?』

アリエルは唯一動くその口で、その人物に言葉を返した。

『……そう、だ。』

その人物は、少し間を置き、ためらいがちに言った。

『……何の用なの……、いっそ、殺してよ……。』

アリエルはそういいながら目に涙を溢れさせていた。  
これ以上恐ろしい目にあう位なら死んでしまいたい……。そう  
思っているのだ。

『……………』

謎の人物はしばらくアリエルと見詰め合つと、アリエルは抱き上  
げて、移動しようとする。

『!? えっ!?』

『……オマエ、本当に死にたいのか?』

静かにアリエルにその人物は問いかける。

『……そうよ、殺しなさいよ!!』

アリエルは、語尾を荒い口調で言い放つ。

『……違うな。』

『えっ……………!?』

『その目は、死にたがりの目じゃねえ……。 F M星に復讐した  
がってる目だ……………』

『……………!!!?』

アリエルには訳が分からなかった。そう思うなら、何故自分を  
殺さず、生かそうとするのか?

『あんだ、一体……………?』

アリエルは震える口で、その人物に名前を聞く。

『俺の名は、ウォーロック……。お前と同じ、FM星をぶち壊  
したいのさ……。』

第四十六話

P a s t

o f

A l i e l } p a r t . 1 }

(後書き)

一人の男は復讐のために敵の星に乗り込み、同じ境遇の少女と出会った。

男はその時、何を思っていたのか……。

ウォーロック

『……おい、何かツッコけてんだ？』

フレイム・ナイト

「いいじゃん！！ たまには……！！」

第四十七話

P a s t

o f

A l i e l } p a r t . 2 }

(前書き)

ガマガリ

『おい、作者！！ オレの扱い酷くないか！？』

ウオーロック

『そうだなあゝ。いつもなら技名の一つは考えるのに……。』

フレイム・ナイト

「えっ、あつ、そ、そうかな」

フレイム・ナイトはそういうと後ろを向く。

ガマガリ・ウオーロック

『『……？』』

フレイム・ナイト

(やっべゝ、勢いで書いたキャラクターだから名前と姿以外ぜんぜん考えてなかった……。)



アリエルがFM星に来て、一年近くが経った。

ウォーロックが上手くアリエルの素性を隠したらしく、アリエルは難なくFM星での治療を受けることが出来た。ウォーロックが『FM星の誇り高き戦士』と呼ばれていて、FM星ではそれなりの地位があつたからこそだ。

『どうして助けてくれたの・・・？』

アリエルはFM星に来てから、毎日のようにウォーロックにする質問をしてきた。

『さあ、どうしてかねえ』

いつもこうだ・・・。っとアリエルは思った。ウォーロックはアリエルがこの質問をする度に、こんな風にのらりくらりと誤魔化そうとする。

だが、今日のアリエルは違った。

『誤魔化さないで！！ 最初に会った時に言ったじゃない！！ 俺はFM星をぶち・・・。』

『・・・！！？』

ウォーロックはアリエルが最後まで言い切る前にアリエルの口を急いで塞いだ。

『!?　　ンー!　　ンー!』

アリエルは突然のことにびっくりしてしまふ。

『バカ野郎!!　　ここではそうゆう事を言つな!!　　いつ誰が聞いているか分からないだぞ!!!』

ウオーロックはアリエルが見たことのないくらい焦った顔で言う。

『プハツ!!　　ゴ、ゴメン……。』

アリエルは小声で誤った。

確かに、FM星でFM星を滅ぼす等の発言があつたと知られたら、タダでは済まない。

最悪、抹殺されてしまうなんてことも考えられる。

『じゃあな!』

ウオーロックはそうゆうとアリエルに背を向けて立ち去って行く。

アリエルはそんな背中を悲しげに見つめた。

(ここ最近、アイツ忙しそう……。　　確か、ニンゲンって奴らの見張りやらされてるんだっけ……。)

アリエルはそう考えながら、FM星の城の付近を散歩していた。

怪我が治り、普通に出回れるくらいに回復したアリエルはすぐにウオーロックのことを調べ始めた。

だが、FM星の優秀な戦士ということ以外、何も分からない、謎のFM星人としかアリエルには分からなかった。

(なんでアイツ、FM星人なのに、他の星の奴らにかまうんだらう?)

自分を助けたように……。

アリエルはそう考えながら曲がり道を曲がろうとしたその時、

『よう、譲ちゃん。一人く?』

『ちよっと、お兄さん達に付き合ってくんない?』

ジャミンガーに似た電波体が、後ろからアリエルの両肩を掴んできた。

『はっ? ナニ!! あんた達!?!』

アリエルは振り返り様にそういつて二人の電波体の手を振り払った。

『いやなに、ちよとっただけ、付き合っほしいんだよ。』

『譲ちゃん、あのウォーロックがどっからか連れてきた娘なんだよね?』

『・・・!!?!?』

アリエルは電波体達の言葉に目を見開いて驚いた。

そして、とにかく逃げなくてはいけないと感じ、慌ててその場を逃げ出す。

『あっ! テメエ!!!』

『待ちやがれ!!! コラア!!!』

『まったく！ 手間かけさせやがって!!』

『ゼエ、ゼエ、すっ、すばしっこい……、ゼエ、ゼエ……』

電波体二人がアリエルを羽交い絞めにして地面に押し付けている。

『放して!! 放しなさいよ!!』

アリエルは必死で電波体の腕を振り払おうとする。だがこの頃のアリエルはまだ幼い子供、アリエルの抵抗は無抵抗に等しかった。

『この小娘か……』

アリエルの目の前でぐもったドスのきいた声が出た。

アリエルが首だけを目の前に向けたら、そこには、巨大なガマガエルのような姿の電波体が踏ん反りがえるように座っていた。

『……誰？ アンタ？』

アリエルは少し怯えた口調で尋ねた。

『……オレの名はガマガリ、こいつらのボスだ……。 小娘、

お前に聞きたいことがある……。』

ガマガリはそういうと一旦間を置き、そして、

『オマエ、ウォーロックの秘密について、何か知っているか？』  
そう、アリエルに尋ねた。

『・・・えっ？』

アリエルは質問の意味が分からず、思わずそう声に出してしまっ  
た。

『アイツは、目立ちすぎなんだ。どこからかフラツと現れ、FM  
星王族親衛隊突撃隊長の座をオレから奪いやがった！！！！』

ガマガリの口調はだんだん怒りによって荒々しくなっていた。

『オレだけじゃねえ！！！ここにいる奴らもオレが隊長をやつて  
いた時の部下達だ！！！ウォーロックのせいでオレ達は城を追い出  
され、こんな路地裏を根城にして暮らす羽目になっちまったんだ！  
！！！！』

当時のことを思い出し、怒りで身を震わせるガマガリはそこまで  
言つとアリエルの頭を掴み自分の顔と同じ高さを持ち上げた。

『小娘！！お前何か知ってるんだろ！！お前がウォーロックの  
事を嗅ぎまわっていたのは知ってたんだよ！！！！』

『・・・つく・・・。ア、アイツの事を知つてどうする気なのよ。  
・・・？』

頭を掴まれている痛みには耐えながらアリエルは聞いた。

『アイツは間違いなくFM星にとってなんかヤバイ事をしようとし  
てるんだ！！』

それを王に言つて、奴から隊長の座を奪い返し、オレ達を追い出し  
たように、奴をこの星から追い出してやるんだ！！！！』

ガマガリはそこまで言つと顔をズイツとアリエルに近づけた。

『だから教えてくれよ。奴の秘密をなあ~~~~！！！！』

怒りで血走った目がアリエルを見据える。幼いアリエルは完全にその目に怯えきっていた。

(アイツの秘密……)

アリエルはウォーロックと最初に出会った時の事を思い出す。

F M星をぶち壊したいのさ……

(あの時の事を言えば、助かる、でも……)

「し、知らない……」

恐怖で怯えきったアリエルには精一杯の抗いの言葉だった。

「ああ!?!?」

アリエルを掴むガマガリの手の握力が強くなった。

「わ、私……何も知らない……。アイツの事、何も知らない……」

アリエルは怯えた声で、でもはつきりと言った。

「……そうか……。しかたねえ……」

ガマガリはそういうともう一方の手を握る。

「じゃあ、分かるまでぶん殴ってやる……!?!?!?!?!」

ガマガリのパンチがアリエルに向かう。

「……!?!?!?!」

アリエルはもう駄目だと思い、目を閉じる。

『アリエル……!!!!』

突然、上空からそんな大声がしてきた。

その場にいた全員が反射的に上を見ると、ガマガリに向かってウォーロックが爪を振り上げていた。

『な!? ウォーロック!?!?』

『ビーストスイング!?!!』

いきなりの出来事に驚いたガマガリの間をついて、ウォーロックはアリエルを掴んでいる腕を爪で切り裂いた。

『ぐああああ!!!!』

ガマガリは切りつかれた痛みで、アリエルを掴んでいた手を放す。

『えっ、わっ! きゃああ!!!!』

掴まれていたアリエルはそのまま地面に落ちてしまいそうになる。だがウォーロックがすぐさまアリエルのもとに駆けつけ、地面に落ちるアリエルを抱きとめる。

『大丈夫か!?!?』

『！！ う、うん、大丈夫……。』  
アリエルは目先約十五センチのウォーロックの顔に少しドキッとしながら答えた。

『ど、どうしてここに？』

『ん？ なんとなくやばい気がして帰ってきたら、お前がどこにもいないんだ。』

まさかと思って探していたら、案の定……。』

ウォーロックはアリエルをやさしく地面に立たせると、ガマガリ達を睨み付けた。

『よう、ガマガリ！！ ガキ相手にひでー事するじゃねえか！！！！』

『つるせえ！！ そもそもはお前がいけねえんだろが！！！！』

ガマガリはウォーロックを指差しながら言った。

『ケツ！ “オレに勝てたら隊長の座を渡してやるよ！！” って言い出したのはお前だろーがよ！！！！』

ウォーロックは余裕そうにガマガリにそう言い捨てた。

『~~~~っ！！！！ やっちまえ~~~~！！！！！！！！』

ガマガリは顔を真っ赤にして部下達をウォーロックにけしかけた。約七、八人の手下達が一斉にウォーロックに襲い掛かる。

『！ 危ない！！！！』

アリエルはウォーロックに向かって叫ぶ。

その時だった。ウォーロックがその場から消えたのは……。』

『……えっ？』

その場にいる全員が思わずそう声を漏らした。



だがウォーロックがその場から消えたのは、その一瞬だけだった。

気が付くとウォーロックは手下達の後ろで自然体で立っていた。

『なっ、いつの間に!?!』

ガマガリは一瞬で手下達の後ろに移動していたウォーロックに驚いた。

『なつかしいなあ。あの時もお前は自分で戦わないで、手下達をけしかけて来て・・・』

ウォーロックはそこまで言うとは後ろを振り向いて手下達を見た。アリエルとガマガリもそれに釣られて、手下達を見る。すると今まで黙っていた手下達がゆっくりと倒れたのだ。

『こいつら、あっという間に負けたんだよな!』

『バ、バカな!?!?!』

『ス、スゴイ! スゴイ!! ウォーロック、スゴーイ!?!?!』  
アリエルはウォーロックの強さに興奮する。

『最後はお前だ! ガマガリ!?!?!』  
ウォーロックはそういうと上空に飛び上がった。

『ちくしょお・・・ちくしょお~~~~~!!?!?!』  
ガマガリは上空のウォーロック目掛けてパンチを繰り出そうとする。

『ビーストスイング!?!?!』

『消える~~~~!!?!?!』

『・・・スゴいんだね、ウォーロックって・・・』  
『ん?』

ウォーロックにおんぶされているアリエルが不意にそう言った。その後ろにはウォーロックに負け、地面に突っ伏しているガマガリとその手下達がいる。アリエルをおんぶしたウォーロックはその場からゆっくりと離れて行った。

『なあ、お前、どうして話さなかったんだ?』  
『えっ?』

『オレがFM星を破壊しようと考えていた事をガマガリに話せば、助かってたかも知れないのよ・・・。』

『・・・だって、言ったらウォーロックは居なくなっちゃっ・・・。そしたら私、一人ぼっちになっちゃっよ・・・。』  
『・・・そうか。』

『・・・あんだこそ、どうして、私を助けてくれたの?』  
『・・・。。。』

ウォーロックはいつものように誤魔化そうとしない。 黙ったま

ま歩いていく。

アリエルは聞いても無駄かと思い、目を閉じる。

「オレは、AM星人……。お前と同じ、故郷をFM星に滅ぼされた……。」

ウォーロックは淡々と、静かに話し始めた。

「えっ……。!!!」

アリエルはウォーロックからの意外な告白に驚いて目を開ける。

「どうして、敵の星に居るのかって思ってるだろ？ でも、この星を打つ壊す為の機会を得るには、これが一番いいんだ……。俺やお前みたいな奴を出さない為に!!!」

ウォーロックは静かに、でも熱く話す。

「だから、助けてくれたの？」

「アリエル、お前はまだ小さい子供だ……。まだ、チャンスがある！ 幸せになるチャンスが!!!」

「幸せになる、チャンス……。」

アリエルは自分の胸の中に熱い何かが生えてきた感じがした。

「アリエル、俺は自分の命に代えてでも必ずこの星を打つ壊す!!! あきらめんなよ……。」

「……。ありがとっ、ウォーロック様。」

アリエルは、心の底から笑顔でウォーロックにそう言った。

そして、それから約一年後、ウォーロックは『アンドロメダの鍵』を奪い、FM星を去って行った……。アリエルに別れを言わず……。それでも、アリエルは信じ続けた、ウォーロックを……。

必ずFM星を打つ壊す！！ あなたはそう言った。でも、あんな方法でFM星を……。ううん、FM星の闇を壊してしまうなんて……。

これでもう、私やあなたのような者は現れないでしょう……。だから、私はあなたの所へ行きます！ 今度は、私があるの助けになりたいから！！

それに、あなたの心に伝えたいから！！ 憎しみや恨みのような負の感情とは反対の正の感情……。

“ウォーロック様が大好き！！” っていう、初恋と言う名の感情を……。

第四十七話

P a s t

o f

A l i e l } p a r t : 2 }

(後書き)

スバル

「ウォーロック大活躍だね!!」

熱斗

「でも、分かんねえ、どうしてうでナビはアリエルが苦手になったんだ?」

アリエル

『そうなの! あの日以来、ウォーロック様の傍にいたくて、どこにいても何をしていてもずーっと追っかけていたのに・・・』

熱斗・スバル

「・・・それだ!!」

第四十八話 ヴァンパイア現る!?(前書き)

とつとつ、登場! ! 太陽の戦士! ! !

第四十八話　ヴァンパイア現る！？

『つて、勇んで来たのはいいけどさ』

アリエルは昔のことを思い出しながら、そう呟いた。

(なんか、あんまり役に立ってない感じなのよね。)

アリエルはそう考えながら、浮かない顔で、沈んでゆく太陽をボツと眺めていた。

今はもう夕暮れ時で、太陽は静かに、ゆっくりと沈んでいく。

そんな光景を眺めていたアリエルは突然、自分の両頬をペシッと叩いた。

『あゝもう！　クヨクヨお終い！！　ウォーロック様も前に言ってたじゃん！！』

チャンスがある！つて！！　絶対ロックマンを取り戻して、ネビュラを打つ壊すチャンスがあるはずよ！！』

アリエルは大声で、自分にそう言い聞かせる。　そしてそこで気が付く。

『つてあれ？　もうこんな時間？』

周りが真っ暗なことに。　つまり、日はすっかり暮れていて、銀色達が心配している可能性があることに。

『やっば〜！　早く帰らないと・・・。。』

アリエルはそこまで言うと、急に険しい顔になり、辺りを見回した。

『・・・ダレ!!?』

アリエルは声を張り上げる。すると、暗闇から不気味な声が返ってきた。

「ほお、私の気配に気付くとは、多少はやるようだな・・・。」  
アリエルは声がかかる方を向きながら、攻撃態勢に入って警戒する。すると、“ポツ、ポツ、”と、雨が降ってきた。

(しめた!!)

アリエルは突然の雨に、口元に少し笑みを浮かべた。  
アリエルは水と音を操る力を持つ。この雨は自分に力をくれるもの思っていたのだ。

だが・・・、

『あ、あれ?』

アリエルは思わずそう言った。体から力が入らなくなり、目が霞んできたのだ。

(どうして、体から力がドンドン抜けて・・・)

アリエルはそこまで考えると、体を地面に預けるように、ゆっくりと倒れこむ。

そして気が付く。自分に力を与えてくれると思っていた雨が血のように赤いことに・・・。

(赤い雨・・・?)

アリエルは地面に倒れ伏し、今にも気を失ってしまうようなボン



やりとした頭で、そんなことを考える。

「クツ、クツ、クツ……。我が血の雨、体の芯まで味わってく  
れたまえ……。」

（しまった！ これは、アイツの、こう、げ……。）  
気が付いた時にはもう遅かった。アリエルはそこまで考えると  
気を失ってしまった。

「クツ、クツ、クツ……。この世界に来て最初のエモノだ、じ  
つくりと味わうとしよう……。」  
声の主はそういうとアリエルを抱き上げた。その時、

「そこまでだ！！ 伯爵！！！！」

突然、少年の声が聞こえてきた。男が、伯爵が声のした方を見  
ると、そこには、

紅のマフラーを身につけ、顔に白いフェイスペイントをし、鎧のよ  
うな服を着たクリーム色の髪をした少年が立っていた。

「!! 太陽少年・・・ジャンゴ!!」

「伯爵! その子を放せ!!」

第四十八話 ヴァンパイア現る!?(後書き)

シエードマン

『キキー!!! 納得いかん!!!』

フレイム・ナイト

「な、何よ!!! なんであんたが出てくんのよ!!!」

シエードマン

『何を言う! ロックマンシリーズでの吸血鬼と言えば、このシエードマンであろう!!! 何故、伯爵なのだ!!!?』

フレイム・ナイト

「そのことなら……!!!」

ブリザードマン

『ヒュルル!!! 僕たちを差し置いて……』

クラウドマン

『シエードマンだけ再度出演など……』

コスモマン

『絶対に……』

スワローマン

『させるか……!!!』

フレイム・ナイト

「あなたの仲間のダーククロイド達に言ってよ!!!」



第四十九話 オテンコサマ(前書き)

オテンコサマ

『私は、こんな風だったか?』

フレイム・ナイト

「口調はこうだと思っよ? でも、そうだな、やっぱり少し天然な設定にしてあるかも?」

ジャンゴ

「・・・ボクは、普通に原作どおりにしてね・・・。」

フレイム・ナイト

「・・・努力します。」

## 第四十九話 オテンコサマ

(アリエル・・・、どこに行っちゃたの?)

銀色はそう思いながら、PET画面を見た。アリエルが外に出て、数時間が経つ。

外はもう日が沈みかけ、夜になろうとしている。

「銀色さん、どうしたんですか？」

不意に、誰かが銀色に声をかけてきた。

「炎山君・・・。」

声をかけてきたのは炎山だった。どうやら、熱斗のお見舞いに来たらしい。

「どうしたんですか？ こんなところに立って？」

炎山が銀色に話しかける。

「あ、私も熱斗君のお見舞いに来たんだけど、入りづらくて・・・。それだけじゃないと、アリエルがどこか行ったきり、帰ってこなくて・・・。」

「えっ!?!」

銀色は炎山にアリエルの事を話す。

「帰ってこないって・・・、連絡も取れないんですか？」

「うん・・・、何度呼びかけても、応答がないの・・・。」

炎山は銀色の話を聞くと、緊張した顔つきで熱斗がいる病室に入った。

「炎山君!？」

銀色も炎山の後を追うように病室に入る。

「あれ? 炎山君、どうしたの？」

メールが、緊張した顔つきで入ってきた炎山に驚く。

「桜井、星河、アリエルがここに来なかったか？」

炎山がメールとスバルに問いかける。

「い、いや・・・」

「来てないけど、アリエルちゃんに何かあったの？」

「・・・ちょっと出かけるって言ったきり、帰ってこないの。連絡も付かなくて・・・。」

炎山の代わりに銀色が答える。

『ホントかよ、それ!？』

突然、ウォーロックが出てきて、銀色に詰め寄る。

「え、ええ・・・。」

『スバル! 行くぞ!!』

「行くぞって、うわ!？ ウォーロック!！?」

スバルはウォーロックに引きずられる形で、周波数変換で壁を越えて、外に出て行ってしまふ。病室のみんなは、ウォーロックの心配振りに驚いて立ちすくんでしまっていた。

「・・・ウォーロックっていつつも、アリエルちゃんに追っかけて悲鳴上げてたよね・・・?」

「メールがボソツと呟くように言う。」

「まあ、一応、仲間だからな・・・。心配はするだろう・・・。」

「わ、私達も探しに行きましょう・・・。」

熱斗の看病をするメールを残して、銀色と炎山は部屋を出た。

「ちよつと、ウォーロック！ 落ち着きなよ!!」

科学省を飛び出し、夜空を爆走するかのようウォーロックに引き連られながら、スバルが言った。

「・・・落ち着いてるよ!! だからアリエルを探してんだろ!?!」

「だからなんでそんな急ぐのさ!!」

「・・・なんで炎山の野郎があんな緊張した顔でアリエルの事聞いたと思う?」

「えっ?」

「アリエルはネビュラに付く振りをしてこの時代に来たんだ。ネビュラから見れば、アリエルは裏切り者だ。それを見逃しっぱなしにしておくとは限らないだろ?」

「じゃあ、アリエルはまさか・・・!!!?!」

「ネビュラに襲われてるかも知れねえ、急いで探し・・・!!」

ウォーロックはそう言い切る前に、突然急停止した。





「ぬっ！ スマン、少年！！ 大丈夫か！！？」  
仰向けに倒れたスバルに平然と話しかけた・・・。





第五十話 忍び寄る影（前書き）

熱斗

「そついえば、オレはいつ目を覚ますんだ？」

フレイム・ナイト

「この話の後半で目を覚ますよ」

ジャンゴ

「ボクはいつ出てくるのさ？」

フレイム・ナイト

「次の話に出てくるけど・・・。」

スバル

「ボクとジャンゴ君はどうゆう出会いをするの？」

ウォーロック

『オレがこの章で大活躍するって本当か！？』

アリエル

『私は大丈夫なの！？ っていうか私とウォーロック様のラブシーンがあるってホント！！！？』

やいと

「私とグライドのネットバトルは！？」

メイル

「私も！！」

デカオ

「オレにも出番を・・・！！」

炎山

「俺達もちゃんと出るんだろうな！！？」



第五十話 忍び寄る影

「イタタ……」

「な、なんだ？ 今の……？」

スバルは頭を手で押さえながら、ゆっくりと起き上がった。

「スマン、少年！！ 大丈夫か！！？」

つと、そこに黄色いヒマワリのような物体が、スバルに話しかけてきた。

「ウワツ！！ ヒマワリがしゃつべてる！！？」

スバルは目先約十五センチのその物体に、驚き後ずさりした。

「ヌツ！ 失礼な！ 私はヒマワリではない！！ 太陽の使者、オ

テンコだ！！！」

「太陽の使者……？」

「オテンコ？」

スバルとウォーロックは二人一緒に首をかしげた。

「……つまり、オテンコさんは、この世界の者ではなくて……」  
『イモータルって言う吸血鬼を追って、時空の歪みを通って、この世界にやって来たか……?』

スバルとウォーロックは、オテンコサマの話聞いて、さらに首をかしげる。

あまりに突拍子の無い事を言われて、半信半疑なのだ。

『フム、そうなのだ。しかし、時空の歪みを通るとき、相棒の少年 ジャンゴと離れてしまい……』

「っで、猛スピードで走っている所をボクとぶつかってしまったと……。」

スバルは頭を抑えながら、オテンコサマの言葉を繋ぐ。

『そうなのだ……、困ったことだ……。』

オテンコサマはそういうと目を閉じて考え事を始めた。

ウォーロックはその間にスバルにソツと耳打ちする。

(どうする? このおしゃべりヒマワリ?)

(どうするって言われても、ほっとく訳にはいかないし……)

(ほっとく訳にはいかないって、アリエルはどうすんだよ! それに、時空の歪みだの吸血鬼だの、信じられるか!!)

(分かってるよ!! でも、僕達だって、ワープホールを通過して去って来たんだよ! 嘘なんて言い切れないよ!)

(だからってここでチンタラしていらねえ……)



『かーーーーー!!!!!!』

スバルとウォーロックが小声で言い合っていると、突然、オテンコサマが雄たけびを上げた。

「うわっ!? どうしたの」

『感じる、感じるぞ!!! 太陽の気配を!!! 間違いない、ジャンゴだ!!!』

『ジャンゴ? ああ、お前の相方の・・・』

『行くぞ少年!!! ジャンゴの元へ!!!』

オテンコサマはそういうと、またもや猛スピードで走り出した。

『行くつて・・・、俺達も行くのかよ!?!』

ウォーロックは大声でオテンコサマに突っ込むが、オテンコサマは気にせず、どんどん進んでいく。

「ハア、ほっとく訳には行かないし、僕達も行くつ・・・。」  
そういうとスバルはオテンコサマの後を追った。

——— その頃 科学省 ———

「・・・・・・・・ん・・・・。」

「! 熱斗!?!」

ベットで眠っていた熱斗がゆっくりと目を開けた。

熱斗を看病していたメイルはそれに気が付くと、熱斗に呼びかけた。

「熱斗! 大丈夫!?!」

「・・・メール・・・ちゃん？」

熱斗はメールの名を呼ぶと、ゆっくりと起き上がった。

「・・・ここ、科学省？」

「うん、そつだよ！ 熱斗、三日間も眠り続けてたんだよ・・・よかつた・・・。」

メールは目に少し涙を浮かばせながら話した。

「三日も・・・そつだ！ ロックマンは！！？」

熱斗は気を失う前、ピュアルでの出来事を思い出すと、メールに詰め寄った。

「・・・。。。。 スバル君から聞いたよ・・・。 あの後、熱斗が倒れた後、みんなで探したけど、どこにも見つからなかったの・・・。」

メールは淡々と思い口調で熱斗に話す。

熱斗はそこまで聞くと、ベットに仰向けに倒れこむ。

「熱斗・・・。」

「・・・ロックマン、すごく冷たい目をしてた・・・。 ネビュラにダークチップを埋め込まれて、闇のナビになって・・・。。。。オレのせいだ・・・、オレのせいでロックマンが・・・。闇のナビに・・・。。。。。」

熱斗は目に手を当てて話した。 その体は小刻みに震えている。

「熱斗・・・あなたのせいじゃ・・・。」

ドカーーーーン!!!!!!!!!!

「きゃあ!!!?」

「な、なんだ!!!?」

突然、大きな揺れと共に爆音が響いた。

熱斗はベットから飛び降りると、寝間着姿のまま、部屋から飛び出  
した。

「熱斗!!!?」

「メールちゃんは、ここに居て!!」

熱斗はメールを部屋に残し、爆音がした方へ向かう。

—— 科学省一階 玄関ホール ——

「どうなってんだよ、コレ……!!!?」

熱斗はホールの有様を見て、愕然とした。

ホールには不幸中の幸いか、人は誰も居らず、入り口の扉は吹っ飛  
び、そこら中に煙が立ち込めていた。

「一体……誰が……」

「クツクツクツ……、これは元気そうな少年だ……。」

熱斗がホールの様子を見てみると、不気味な声が聞こえてきた。

「誰だ!!!?」

煙の中から聞こえてくる声に向かって叫ぶ。

そして、煙の中から、マントを羽織った、青い顔の紳士のような出で立ちの男が姿を表した。

「クッククックッ……この世界に来て、二番目の贄だな……。」

青い顔の紳士、伯爵は驚く熱斗にゆっくりと近づいて来る……。

第五十話 忍び寄る影（後書き）

次は太陽と流星の少年が出会いを果たします！！！！！！

第五十一話 太陽と流星（前書き）

太陽は、月だけでなく、星をも照らし、輝かせる……。では、流星は……？

ジャンゴは流星を照らす、希望の光となれるのか……！！！！

ウォーロック

『カッコよい事を言ってるが、実は知らないんじゃないのか？』

フレイム・ナイト

「頼むからカッコつけたままで終わらせてよ……！！！！」

第五十一話 太陽と流星

『この辺りからジャンゴの気配を感じたのだが……。』  
オテンコサマはそういうと辺りを見回す。

その後ろでスバルはまた、ウォーロックとヒソヒソと話していた。

(どうすんだよ？ このままあのヒマワリにずっと付いていくのか？)

(うーん、ほっとく訳にも行かないから付いてきちゃったけど……)

(でも、ジャンゴって一体誰なんだろうね？)

(強い奴ならぜってえ手合わせしたいぜ!!)

スバルとウォーロックはすっかり、アリエル搜索に飛び出してきた事を忘れている。

「オテンコサマ~~~~!!!!」

突然、スバル達の後ろから少年の声が聞こえてきた。

スバルとオテンコ様が振り向くと、紅のマフラーを身につけ、顔に白いフェイスペイントをし、鎧のような服を着たクリーム色の髪をした少年が、手を振りながら駆け足でこちらに向かって来た。

「あの男の子は……。?」

『ムッ！ ジャンゴ!! やつと会えたか!!』

オテンコサマはそういうとジャンゴに近寄った。

「オテンコサマー!!」

『ジャンゴ! よかった!! 時空の歪みで離れ離れになった時はどうなるかと思ったぞ!!』

オテンコサマはジャンゴとの再会を喜んだ。だがジャンゴはそんな余裕はないようで、焦った顔をしていた。

「大変なんだ、オテンコサマー!! 伯爵が女の子をさらって行ってしまったんだ!!」

『なんだと!!?』

(・・・!? 女の子!!?)

ジャンゴとオテンコサマとの話を聞いていたウォーロックが、女の子という言葉に引っ掛かった。

『おい! その女の子って、どんな姿をしていた?』

ウォーロックはジャンゴにそう吹っかける。

「えっ!? 君は!!?」

ジャンゴは突然現れたウォーロックに驚いてしまう。

「ちょっと、ウォーロック! ゴメン、驚かせちゃって、ボクは星河 スバル、こっちがウォーロック、君がジャンゴ君?」

スバルは驚くジャンゴとウォーロックの間に割って入ると、ジャンゴに自己紹介する。

「あ、うん、そだよ。君達はどうしてオテンコサマと一緒に?」

『ウム! ジャンゴを探している時に偶然会ってな、一緒にお前を探してもらっていたのだ。』



『それよりその女の子ってどんな姿してたんだよ！！！』  
ウォーロックはオテンコサマを退けるとジャンゴに再び詰め寄った。

「え〜と、白い肌に水色のオカリナを首から下げていたような……」

「『……！！』 アリエル！！！！』」  
スバルとウォーロックはジャンゴの証言に口を揃えて言った。

『又ツ！ 知り合いか！！？』

「うん、僕達の仲間なんだ！！ ねえ、その伯爵って何者なの！？」  
『危険な奴なのか！！？』

「……うん。 奴はイモータル・ヴァンパイア伯爵、太陽の力によって浄化され、消滅したはずだったんだけど、何故か再び復活し、時空の歪みを通じてここにやって来たんだ。」

ジャンゴは淡々とスバルとウォーロックに伯爵の事を話す。

『それで、その伯爵野郎は今どこにいった！？』  
「ゴメン、後を追っていたんだけど、逃げられてしまって、今どこにいるか……。」

「そ、そんな……」

PPP！！ PPP！！

スバルがガツクリと肩を落とすと同時に、スバルのハンターV Gが鳴った。

「なんだろう？ メール？」

スバルはメールをみんなに見えるように開いた。

その内容は、

【スバル君！？ 大変なの！！ 今科学省を変な男が襲っていて、タキシードに青い顔の男の人だけど、ナビのように強いのだ！！ ミソラちゃんが応戦してくれてるんだけど、アリエルちゃんと熱斗が捕まっちゃって……。お願い！！ 助けに来て！！】

メールからのSOSメールだった。

『科学省が襲撃されてるだど！？』

「熱斗君とアリエルが！！？」

「『伯爵だ！！！！』」

「えっ！？」

「その科学省って所を襲撃しているのは、今ボクが話した伯爵なんだ！！ スバル君、僕達も連れて行ってくれ！！！」

「・・・わかったよ。 いこう！！！」

『急ごう！！ ジャンゴ！！』

『スバル、こっちも急ぐぜ！！』

スバル、ジャンゴ、ウォーロック、オテンコサマは、そうゆつと夜の闇を駆けて行った。



第五十一話 太陽と流星（後書き）

次回、伯爵 VS ジャンゴ&スバル！！

第五十二話 伯爵の野望（前書き）

フレイム・ナイト

「そう言えば、ロックマンを知っている人って、太陽少年 ジャン  
ゴも知っているのかな？」

熱斗

「そうだな、ロックマンエグゼの4、5、6をやっている人なら知  
ってるんじゃないのか？」

スバル

「ちなみに、この小説では、エグゼの4、6とゾクタイ（続・ボク  
らの太陽）を参考にして書かれたんだよ。」

第五十二話 伯爵の野望

「ひ、ひどい……。。」

『ほとんどぶっ壊れてやがる……。』

スバルとウォーロックが口を押さえながらそう呟いた。

科学省は酷い有様だった。入り口付近だけとはいえ、ホールは殆ど崩壊状態で、あちらこちらで土煙が舞っていた。

そんな状態のホールの中、宙に浮いているタキシード姿の男と、ギターを構えたピンクの服の女の子が睨み合っていた。

「ミソラちゃん!!」

「『伯爵!!』」

スバルがミソラを、ジャンゴとオテンコサマが伯爵の名を叫んだ。

「!! スバル君!!」

「太陽少年……。!!」

スバル達は瞬時にハーブ・ノートの傍に近づくと、全員で伯爵と睨み合った。

「フツ、もう嗅きつけてきたか、ジャンゴ……。。」

伯爵は多人数を相手にしているにも関わらず、平然とした口調で言った。

「伯爵、どうやって復活したんだ!! あの時、確かにお前はパイロドライバーで、

太陽の力で完全に浄化したはずだぞ!!」  
ジャンゴは伯爵復活の疑問をぶつける。

「クツクツクツ、確かにあの時、イストラカンでのお前との戦いに敗れ、太陽の力で浄化された……。  
だが!! 偶然か必然か、時空の歪みを通って漏れ出したこの世界の闇の力が、私に復活するだけの力を与えてくれたのだ!!」

『なんだと!!』

「この世界から溢れてきた、闇の力……。!?」  
オテンコサマとスバルが呟く。

「クイーン亡き後、我々の世界に太陽の光が降り注ぐようになったがそうはさせん!!」  
この世界からヴァンパイア復活のための生贄を集め、再び我が世界を暗黒の世界に染め上げるのだ!!」

「そんなことはさせない!!」

ジャンゴはそう言うのと腰のホルダーから太陽銃・ガンデルソルを伯爵に向かって構える。

「フッフ、やれるかな?」

伯爵は身に着けていたマントを翻し、ジャンゴを睨む。  
ジャンゴと伯爵の間に緊迫した空気が流れる。  
だが……、

『ちょっと待て、おい、そこの伯爵っての!! アリエルと熱斗はどうした!!?』

ウォーロックが二人の間に割って入って、伯爵を問い詰める。

確かに、伯爵を倒すのは最重要事項ではあるが、それよりもまず、

熱斗とアリエルの安否を確かめることが先決だ。

『ムッ、そつだジャンゴ、今は捕らえられている子供の安否を確かめなくては！』

オテンコサマはジャンゴの傍によると、熱斗達の安否を確かめるように言う。

「熱斗？ アリエル？ ああ、この者達のことか？」

伯爵はウォーロック達の話を聞くと、自分の後ろにあるものを見せるように体を反らした。

そこには、黒い煙で造られたようなリングに体を縛られている熱斗とアリエルが倒れていた。

「熱斗君！！！」

『アリエル！！！』

スバルとウォーロックは二人の名を呼ぶが、まったく反応がない。

「気を失っているみたいなの。熱斗君とアリエルがアイツの傍にいるから、

なかなか攻撃できなくて・・・。」

ハープ・ノートが少し弱弱しくスバル達に話す。ずーっと一人で不利な状況の中、戦っていたので限界が来ているのだろう。

「ミソラちゃん、ありがとう、後はボクやジャンゴ君に任せて、科学省にいる人達をお願い。熱斗君とアリエルは僕達が必ず助ける

！！！」

スバルは真剣な瞳でミソラに頼み込む。

「うん、お願いね、スバル君！！」



『ウォーロック、アリエルになんかあったら許さないわよ!!』

『ケツ、分かってるよ、ハーブ!!』

ハーブの憎まれ口ウォーロックは力強い答えで返した。

そしてハーブ・ノートは、伯爵と対峙しているスバル達を背に、科学省内へと入っていった。

「スバル君、伯爵はイモータル、闇の力の化身のような奴だ。普通の攻撃では倒せない。」 普

『ウム、しかも伯爵はこの世界に漂う闇の力をも得ている。太陽銃の攻撃も効くかどうか……。』

ジャンゴとオテンコサマがスバルの隣に来て、今の伯爵の状態を説明する。

「そ、そんな!!?」

『じゃあどうやって、倒すんだよ!!』

「……ボクに考えがある。ボクが伯爵の気を引いている内に、熱斗君とアリエルを取り戻して。」

ジャンゴはそういうと、スバル達よりも一歩前に進んだ。

「太陽少年 ジャンゴ、今日こそ決着を付けてくれる!!」

伯爵は剣を瞬時に手元にだすと、剣先をジャンゴに向ける。

『ジャンゴ、お前まさか、あの力を使う気か?』

「うん、他に手はないから……。」

ジャンゴはオテンコサマにそういうと、突然雰囲気が変わった。

「『』……!!?!?』」

スバル、ウォーロック、伯爵はジャンゴの雰囲気が変わったことに驚き、顔を強張らせる。

「伯爵……、お前が闇の力で無敵になったというのなら……。」「ジャンゴの体から黒いオーラが溢れ出す。」

「その力を、お前と同じ闇の力で消し去るまでだ……。!!!!」

第五十二話 伯爵の野望（後書き）

たとえそれが暗黒の力であつたとしても、  
力そのものには正義も悪も無い  
大切なのはそれを使う者・・・その者の心だ

光差すところ、影は落ちる  
影なき光など、ないのだ・・・

光が強ければ強いほど、その光が生み出す影もまた強くなる・・・

第五十三話 黒ジャンゴ（前書き）

ジャンゴ

「とうとうトランスが発動したね!!」

スバル

「作者、久しぶりにいっぱい書いたね!!」

熱斗・ウォーロック

「『……………』」

スバル

「? どうしたの二人とも? そんな顔真つ青な顔をして?」

熱斗

「…………奥で、フレイム・ナイトが…………」

ウォーロック

『黒魔術に身を染めている…………』

ジャンゴ

「はっ!? どうゆうこと?!?!?」

熱斗・ウォーロック

「『後書き見れば分かる…………』」

## 第五十三話 黒ジャンゴ

「ジャ、ジャンゴ君・・・？」

スバルは驚きのあまり声が震えている。

突然ジャンゴの体から黒いオーラが溢れ出し、ジャンゴの体を包み込もうしているからだ。

「おい、ヒマワリ野郎！！？ アイツどうなってやがんだ！！！？」  
ウォーロックはジャンゴを指差しながらオテンコサマに詰め寄る。

「・・・以前、ジャンゴはある者との戦いで、その身にダークマター・暗黒物質を体に取り込まれてしまった。暗黒物質には、人をイモータルに、ヴァンパイアに変える力がある。」  
オテンコサマはジャンゴから目を離さず、スバルとウォーロックに説明する。

「じゃあ、ジャンゴ君は、伯爵と同じ、ヴァンパイアなの！？」  
「確かに、ジャンゴは半ヴァンパイアだ。しかし、太陽仔としての力によって自我を保つことは出来た。そして、仲間達との絆によって・・・。」

ジャンゴから溢れ出していたオーラが完全にジャンゴを包み込む。

『己の中の闇を完全に制御できるようになったのだ！！！！』

オテニコサマが叫んだ瞬間、ジャンゴを包み込んでいたオーラが弾け飛んだ。

そしてそこに居たのは、いつものジャンゴではなかった。

クリーム色の髪は黒ずんだ茶色に、背中からは赤い翼が生え、手には鋭い爪が、

そして身に付けていたバンダナで目元を覆ったその姿は正にヴァンパイアというべき姿だった。

「ジャ、ジャンゴ君……。」

スバルはジャンゴの変身に戸惑いを隠せない。

そして不意に、ジャンゴが後ろを向いてスバルを見た。

「スバル君、伯爵は僕の持つ太陽銃でも浄化出来ない程、強い闇の力に守られている。

だから、同じ闇の力でその守りを引き剥がす。君はその間に熱斗君達を……!!」

ジャンゴは伯爵に聞こえないように、小さく、落ち着いた声でスバルに話す。

「わ、分かった。」

スバルはやつとそれだけ言うと、いつでもダッシュ出来るように身構える。

「クッ、クハハハハハ！　まさか太陽少年ともあるうものが闇の力を使おうとはな・・・。

だが、そのような中途半端な闇の力で、私に対抗出来るかな？」

伯爵はそこまで言うと、剣を構え、ジャンゴに突進してきた。ジャンゴはそれをジャンプして交わす。

「ブラッドランス！！」

伯爵が両手を天に向かって上げる。すると、地面から赤い槍が突き出してきて、ジャンゴに襲い掛かってきた。

だがジャンゴはそれを避けようとはせず、その場にジッと立っている。

『おい、アイツなんで避けないんだ！？』

「ジャンゴくーん！！」

スバルとウォーロックがジャンゴに逃げるように叫ぶ。

「暗黒魔法、チェンジ・ウルフ！！」

ジャンゴは右手を高く上げて叫んだ。すると、ジャンゴの足元に黒い魔方阵が現れ、ジャンゴは黒い狼のような姿に変わった。そして、次の瞬間、ジャンゴの姿が全員の前から消えてしまった。

「な、何！？　奴はどこに！！？」

伯爵は、突然消えたジャンゴを辺りを隈なく見て探す。

「こつちだよ！」

不意に、伯爵の頭上からジャンゴの声が聞こえてきた。

伯爵が上を見上げると、ジャンゴが腕を大きく振りかぶっていた。

「ダーククロウ!!!」

ジャンゴは伯爵目掛けてその鋭い爪でその胸ぐらを切り裂いた。

「ぐあああ!!!」

「今だ！ スバル君!!!」

苦痛に悲鳴を上げる伯爵。それをチャンスとジャンゴがスバルに合図を送る。

スバルはそれを待っていたとばかりにダッシュして熱斗とアリエルの傍に駆け寄ると、

スバルが熱斗を、ウォーロックがアリエルを抱きかかえ、伯爵から遠ざける。

「熱斗君！ 熱斗君!!!」

『アリエル、しっかりしろ!!!』

スバルとウォーロックが、熱斗とアリエルに呼びかける。

「う、ううん。。。」

熱斗はうめき声をあげると、ゆっくりと目を開けた。

「熱斗君!!! 大丈夫!!!?」

「・・・スバル？ オレ、どうしてたんだっけ？ 確か後ろから誰



かが黒いリングを投げてきて、それから……あつ！」

熱斗はそこまで思い出すと、今の自分の状況をやっと理解できた。熱斗は、伯爵の手から救出はされたが、まだ熱斗の周りを黒いリングが纏わり付き、

熱斗の体の自由を奪っている。それはアリエルも同じだった。

「……あ、ウォーロック様……？」

「アリエル、大丈夫か？」

「……うん、また、助けられちゃったんだ……。」

アリエルはそういうと、ウォーロックに助けられた嬉しさと、また足手纏いになってしまった不甲斐無さに複雑な顔をする。

「ぐっ、許さんぞ！！ ジャンゴ」

伯爵が胸を抑え、苦痛に堪えながらジャンゴを睨んだ。

ジャンゴはそんな伯爵を見ると、静かに構える。

「……えっ！？ ジャンゴ！！？ あれが……！？」

伯爵の言葉を聞いた熱斗が信じられないように黒ジャンゴを見る。

「えっ、熱斗君、ジャンゴ君を知ってるの！？」

「ああ、前、シェードマンを倒すのに、協力したことがあって……。」

「なんでもあのジャンゴっての、昔、ダークなんとかって物を……、闇の力みたいな物を」

体に埋め込まれて、あの姿に変身できるようになったらしい。』  
ウォーロックが少し気まずそうに熱斗に説明する。

「・・・それって、ダークロックマンと同じ・・・」  
悲しげな瞳で黒ジャンゴを見る熱斗。 熱斗の目に、黒ジャンゴとダークロックマンが重なって見える。

『どうした、少年？ ダークロックマンとは？』

そんな熱斗の様子を見ていたオテンコサマは、ダークロックマンの事について聞いてきた。

「実は・・・」

熱斗に説明させるのは酷だと思い、代わりにスバルがオテンコサマに説明した。

ロックマンが悪の組織に捕らわれしまい、闇の力に支配されてダークロックマンとなってしまった事を・・・。

すると、スバルの話聞いたオテンコサマが静かに、熱斗に静かに話しかけてきた。

『少年よ、気持ちは分かる。 確かに表の世界、太陽が照らす世界に生きている者にとって、闇とは忌み嫌われるモノだ・・・。だが、たとえそれが暗黒の力であったとしても、力そのものには正義も悪も無い。 大切なのはそれを使う者・・・その者の心だ。』

オテンコサマは諭すように、熱斗にやさしく話しかける。

『光差すところ、影は落ちる。 影なき光など、ないのだ・・・。光が強ければ強いほど、その光が生み出す影もまた強くなる・・・。つまり、心に深い闇を持つ者は、それと同じ位、心に強い光を持っているといつこと・・・』



「ダークフアングー!!」

ジャンゴが伯爵の後ろを取り、伯爵に噛み付く。

「ぐおおおおおお・・・!!」

伯爵は痛みには耐えながら、ジャンゴを背中から引き剥がそうとするが、

ジャンゴはその牙でしっかりと伯爵に噛み付き、離れない。

『いいぞ、ジャンゴ!! 伯爵の体から闇のオーラが抜けていつて  
いるー!!』

「あっ!」

『リングが・・・!』

熱斗とアリエルの体を拘束していたリングが霧のように姿を変え、霧散して消えた。

伯爵の闇の力が弱まったからだ。

『少年達よ!! 伯爵の闇の力が弱まった今、通常の攻撃が効くはずだ。』

ジャンゴと協力して、伯爵に止めを刺すのだ!!』

「おう!!」

「いくよ、熱斗君、ウォーロック!!」

『当たり前だ!! クロス・マジシャンだ!!』

『がんばって!!』

熱斗、スバル、ウォーロック、アリエルの順に言う。

「ええい！ 離れる！！」

伯爵はとうとうジャンゴを背中から引き剥がすと、ジャンゴの体を放り投げた。

ジャンゴは空中で一回転すると、地面に難なく着地する。

「月光魔法、トランス！！」

ジャンゴがそういうと、黒ジャンゴの周りを太陽の光が包んだ。光が収まると、そこには、いつもの赤いマフラーにクリーム色の髪の毛の少年 ジャンゴがいた。

「クロス・マジシャン、発動！！」

熱斗の言葉と共に、スバルが光に包まれる。

光が収まると、そこには、白い体にプラチナのマントを羽織り、両腕両足に銀色のアーマーを身に付け、白く光る聖剣を持った、聖騎士のような姿をした少年 スバルが立っていた。

「クロス・マジシャン、Ver・ナイトマジシャン！！！！」

ジャンゴとスバルが隣同士で立ち、伯爵と対峙する。

「伯爵、覚悟しろ！！ 次はこの太陽の力で……」

ジャンゴは太陽銃・ガンデルソルを構え、

「この聖なる剣で……」

スバルは白く光る聖剣を構え、

「お前を倒す！！！！」  
「  
伯爵に立ち向かった！！！！」

第五十三話 黒ジャンゴ（後書き）

スバル・ジャンゴ

「くっくっく」

フレイム・ナイト

「ヤモリの死骸に蛇の血、そしてムラサメさんの送ってきたバトルカードをこの鍋に入れて・・・フッフッフ、アーハッハッハッ！  
！！」

スバル

「い、一体、何をやってるんだ・・・（恐）」

ジャンゴ

「伯爵との戦いにネタが尽きて、自暴自棄になってるのか・・・？」

フレイム・ナイト

「最後に、生きた太陽を入れれば・・・、最強（最恐）のバトルカードが・・・。」

オテンコサマ

『わ~~~~！！ 助けてくれ~~~~！！！！』

ジャンゴ

「お、オテンコサマ~~~~！！！！」

フレイム・ナイト

「くるりー！！」

ジャンゴ・スバル

「「ギクッ!!!」」

フレイム・ナイト

「・・・太陽少年とシューティングスターってのもいいかも・・・」

スバル

「わーーーー!!! 作者!!!! 話の続き行き詰ってるからって・・・!!!」

ジャンゴ

「黒魔術に手を出すなーーーー!!!」



第五十四話 ブラッドレイン（前書き）

フレイム・ナイト

「~~~~」

ウォーロック

『なんかやけに機嫌がいいな、作者』

スバル

「次の章の全体的な話のストーリーが思いついたんだって！」

熱斗

「へへ、それはよかったな。」

フレイム・ナイト

「剣と魔法とプリンスでプリンセスとシャルウェダンスの宇宙戦争で……」

熱斗が見ている先では、そんなことを鼻歌まじりで呟きながら、パソコンに向かっていているフレイム・ナイトがいた……。

熱斗

「一体、どんな話考えてんだ……（顔面蒼白）」

スバル

「今の内に逃げ出そうかな……。」

## 第五十四話 ブラッドレイン

「ガンデルソル!!!」

ジャンゴが太陽銃の太陽ショットで伯爵を攻撃する。

伯爵はそれを横に避けることによってかわすが、その隙にスバルが伯爵の前に立ち、

聖剣で切りかかる。

「ホーリーブレード!!!」

スバルは伯爵を真横一文字に斬る。

「グオ!!!」

伯爵はそれを一瞬、身を引くことで直撃を避ける。

『きゃ〜〜!!! ウォーロック様〜〜!!!』

「いつけー、スバル!!!」

『がんばるのだ!!!』

アリエル、熱斗、オテンコサマがスバルとジャンゴを応援する。

「スバル君、伯爵に止めを!!!」

ジャンゴがスバルに攻撃するように促す。

「終わりだ、伯爵!!! HFB、シャイニングオーバーロード!!!」

スバルは、剣から光の極太レーザーを伯爵に向けて放つ。

この場にいた誰もが「勝った!!」と思った。だが・・・

バシユン!!

HFBが伯爵に当たる直前、シャイニングオーバーロードが蒸発したかのように消えうせた。

「えっ!!!?」

スバルとジャンゴは突然起こった現象に驚く。

「クツクツク、念には念をと思っていたのが、役に立ったな・・・」

伯爵はひざまずきながら、不気味な笑い声と共に言った。

よく見ると、伯爵の周りには、いや、頭上から赤い雨のようなものが降っていた。

「!? なんだ、あの赤い雨は!?!」

「ひえ、気持ち悪い!!」

ウォーロックとスバルは赤い雨に気が付くと、一歩後ず去る。

「！ブラットレイン！！」

『いかん！！少年、こっちに来るんだ！！ジャンゴ！！』

ジャンゴとオテンコサマは何かに気が付くと、ジャンゴはスバルをオテンコサマの所に押して移動させる。

「えっ！？ジャンゴ君！！？」

スバルはジャンゴに押されるまま、オテンコサマの傍に行き、ジャンゴを見る。

「月光魔法、トランス！！」

だがジャンゴは、そんなスバルにお構いなく、再び黒ジャンゴに変身すると、

単身、伯爵に攻撃を仕掛けようとする。

『みんな、私の傍によるのだ！！太陽おー！！！！』

オテンコサマがそう叫ぶと、熱斗やスバル達の周りに薄い金色の膜が張られた。

「どうしたんだよ！？オテンコサマ、ジャンゴ！！」

『この雨は・・・！！！？』

熱斗は二人のいきなりの行動に驚くが、アリエルも何かに気が付いたらしく、

顔を強張らせる。

『どうした、アリエル？何か知ってるのか？』

『うん、ウォーロック様、私、この雨にやられたの……。この

雨は、アイツの攻撃よ！！！！』

「なんだって！？」

『そうだ、少年。これは伯爵の必殺技、ブラッドレイン！！血の雨を降らせ、相手にダメージを与える技、少しでもこの雨に触れたら、人などひとたまりも無い！！』

オテニコサマは熱斗に説明する。

「でも、この雨どこから・・・！？」

スバルはそう言うと、オテニコ様の太陽の膜から、周りを見渡す。

そして気が付いた。

ホールの消火用スプリングラーから、血の雨が降っていることに・・・。

「！ みんな、あそこ！！ スプリングラーから雨が降ってる！！」  
スバルが天井を指差して言った。

「フッフッフ、気づかれたようだな・・・。」

伯爵はそう言いながらも、余裕の笑みを浮かべている。

「卑怯だぞ、伯爵！！」

ジャンゴは伯爵に飛び掛りながら言った。しかし伯爵はそれを意図も簡単にかわす。

「何度でも言うがいい。この血の雨が降っている限り、あいつらはオテニコの太陽の結界の中から出られない。出た瞬間にお陀仏だからな。」

そしてジャンゴ、お前はあの姿でいる限り、我がブラッドレインの中にいても平気だが、

太陽の力を使うことは出来ない。それすなわち、私に止めを刺すことは出来ないということ！！ じっくりとなぶり倒してやる！！」

「くっ……。」

『ジャンゴー!!』

「一体、どうすれば……。」

ジャンゴ、オテンコサマ、熱斗はそういつと、歯軋りをする。

打つ手がまったく見えないのだ。

熱斗とアリエルを伯爵の手から取り戻し、形勢逆転したかと思っただが、伯爵の卑劣な罠によって、再び危機に陥ったジャンゴ達……。

だが彼らは、ブラッドレインが発動したその瞬間から、希望が動き始めていたことに気が付いていない……。

第五十四話　ブラッドレイン（後書き）

【ボツになった話】

伯爵

「終わりだ！！　太陽少年！！！！」

地面に膝まづくジャンゴを見下ろしながら、伯爵は勝ち誇ったようにあざ笑う……。

ジャンゴ

「くっ……」

スバル

「ジャンゴ君！！」

オテンコ

『ジャンゴ……！！！！』

?????

「待ちなさい！！」

全員

「……！！！！？」

全員が声が出した方を見ると、そこには仁王立ちで立っているやいとがいた。

熱斗





フレイム・ナイト

「実はこれ、本当に本編でやるうかなくなって考えました……。」

やいと以外の小説登場キャラクター達

「考えるな！！！！！！！」

## 第五十五話

やいとは神出鬼没なお嬢さん！？（前書き）

今更何ですけど、科学省はテレビ版と同じ見取りになっています。

第五十五話 やいととは神出鬼没なお嬢さん!?

—— 科学省 メインルーム ——

「クツ、これは……!!」

「博士、駄目です!! 何度やってもアクセス拒否されてしまいました!!」

光博士と名人が、慌てた様子でキーボードに文字を入力して、科学省のネットワークにアクセスしようとする。

しかし、どの画面も赤いフレームで『NO ACCESS』の文字が表示されている。

ウィーン……

不意に、メインルームの自動ドアが開く音がした。博士と名人が反射的にドアの方に視線を向けると、そこには、メイルと銀色が立っていた。

「メイルちゃん、銀色ちゃん!!」

「おじさん!! あの、熱斗は!?!」

「光博士!! アリエルは、見つかったんでしょうか!?!?!」

メイルと銀色は不安な表情で、光博士に詰め寄る。

「落ち着いて二人とも!!」

光博士はメイルと銀色は落ち着かせると、現在の伯爵とスバル達

の戦闘状況を説明した。

「つまり、今熱斗達が戦っている伯爵ってのが、科学省のネットワークに侵入して・・・」

「消火用のスプリンクラーから、あの赤い雨を降らせているんですか？」

メールと銀色がメインルームに取り付けられている画面を見る。画面にはホールの監視カメラから送られている映像が映し出されていて、オテンコサマの張っている太陽結界の中にいる熱斗、スバル、アリエルと、赤い雨の中で伯爵と戦っている黒ジャンゴが映し出されていた。

「あの、ヒマワリみたいなのと、黒い男の子は？」

メールは画面に映っている黒ジャンゴとオテンコサマを指差す。

事情を知らない人には、二人はすごく怪しい人物なのだろう（ひどい！！ byジャンゴ、オテンコ）

「あの二人は味方だよ・・・。」

不意に、ドアの方から声が聞こえてきた。

全員が振り向くと、そこには壁に寄りかかって荒い息遣いのハーブ・ノートが立っていた。

「ミソラちゃん!？」

メールはミソラに駆け寄ると、肩を貸してミソラを近くの椅子に座らせた。

「ミソラちゃん、大丈夫!？」

「大丈夫よ、メイルちゃん、かすり傷だから・・・。」

「ミソラ君、あの二人が味方とは？」

光博士がミソラにジャンゴとオテンコ様について質問する。

「私も詳しくは分からないんですけど、あの黒い男の子、どうしてあんな姿になっているか分からないけど、ジャンゴって呼ばれててスバル君と一緒にやって来て、スバル君はあの男の子と一緒に戦うって言ってるんです。それにあのヒマワリみたいな、スバル君達を守っているみたいだし、きっと味方ですよ!!!」

ミソラは必死にジャンゴとオテンコ様が味方だと訴える。

「落ち着いてミソラちゃん、私もあの二人が味方だと信じるよ!」

光博士はミソラの頭の上に手を置いてミソラを落ち着かせる。

「光博士!!!」

真剣に必死でネットワークにアクセスしようとした名人が光博士を呼んだ。

「どうした!? 名人!!!」

光博士は名人の隣に立つと、名人の見ていた画面と一緒に覗き込む。

「やっと科学省のネットワークにアクセス出来ない原因が分かりました!!!」

科学省のセキュリティプログラムにナビが侵入していて、アクセスを拒否させているんです!!!」

「何だって!!!?」

名人の報告に、光博士は思わず声を上げる。

「名人さん、あの赤い雨を止める方法は無いんですか!？」  
銀色が名人に聞いただす。

「さんはいらない!!! 方法はある。侵入したナビは、科学省の外の警備システムと中の情報システムを守るセキュリティプログラムの中に一体ずつ潜伏しているんだ。その二体のナビを倒せして、セキュリティを元に戻せば、科学省のネットワークにアクセスすることが出来る。」

「アクセスさえ出来れば、あのスプリンクラーを止めることが出来る。」  
名人は目の前の画面に科学省のネットワークのマップを映しながらみんなに説明する。

「なら、私とロールがそのナビを倒します!!! ねっ、ロール!!!」  
「うん、メールちゃん!!! 任せてよ!!!」

「でも、問題があるんだ……。」  
張り切るメールとロールに、光博士が重たい口調で言った。

「『えっ?』」  
「外のセキュリティプログラムに入るためには、外に備え付けてある端末にプラグインする以外方法がないんだ。しかも、今この科学省で戦えるネットナビとオペレーターと言えば、君とロール以外いなくて……。」

「『あっ!!!』」  
銀色とメールが思わず声を上げる。

確かに今は、炎山はアリエルを探しに外へ出たきり帰っていない、銀色はアリエルがいないので電波変換することが出来ない。さらにミソラは伯爵との戦いで体力はあまり残っていない。熱斗とスバルに至っては伯爵と戦っている真つ最中。メイルとロール以外、セキュリティシステムにプラグインして中の二体のナビと闘える者はいないのだ。しかもロールはバトルタイプのナビではないので、二体も相手にするのは不可能に近い。

「メイルちゃんとロールだけじゃ、二体のナビを相手にするのは無理だわ……。」「

銀色は冷静に状況を整理し、呟く。

「ど、どうしたら……。」「

万事休すの状況に全員黙りこくってしまう。しかし……

PPP!! PPP!!

不意にメイルのPETから着信音が鳴り出した。

『メイルちゃん、やいとちゃんから通信だよ!!』

「えっ!?!」

メイルは急いで通信を繋げる。

「やいとちゃん!!」

「メイルちゃん、そしてみなさん……」

状況は大体理解してま

すわ……。」「

何故かやいとは気づいた口調でみんなに話しかけてきた。

「私、今科学省の外の端末の目の前にいますの。」「

やいとはフンツと鼻を鳴らして自慢げに言う。

「……ええっ?!?!?」「」「」

みんなその言葉に驚きの声を上げる。

「私が外のセキュリティに潜んでいるナビを倒すから、メールちゃんはそのプログラムにいるナビをやっつけて!!」「

「えっ!?!? ちょっと、やいとちゃん!?!?」「

やいとは言いたいことだけ言うと、プツツと通信を切ってしまった。

「えーっと、これは……。?」「

「逆転のチャンス……。なのかな?」「

みんな突然の事に、緊急事態の時でありながら、少しの間うーんと考え込んでしまった。

「チャンスよ、チャンスよ、チャンスよ、チャンスよ、大チャンスよ!?!?!?!」「

科学省の外、備え付けられている端末の前で、やいとは握りこぶしを作り、興奮していた。

『やいと様、落ち着いてください。何がチャンスなのですか!?!?』



グライドは興奮しているやいとをなだめる様に言う。

「だってグライド!! やっと来たのよ、私達の出番が!! この小説で初めて!!」

『やいと様!! 本編でそんな事言っちゃいけません!!』

「今まで炎山やさらにはデカオにまで出番があったのに、私達はまったく言っていない程出番がなかったのよ!! 興奮せずにはいられないわ!!」

やいととの興奮は最高MAXに高まっているようで、グライドの言葉はあまり耳には入っていなかった。

『ハア~~~~。。。』

グライドは深くため息を付く。

「プラグイン!! グライド、トランスミッション!!」

「。。。準備はいいね? メールちゃん。」

「はい!!」

場面は戻ってここは科学省メインルーム、メールはPETを構え、何時でもプラグイン出来るようにしてある。

「外のプログラムは、やいとちゃんが何とかしてくれる。メールちゃん、がんばってくれ!!」

光博士はメールに応援の言葉をかける。

「メールちゃん。。。」

メイルの後ろから、銀色が声をかけてきた。メイルは後ろを振り向くと、銀色と向かい合う。

「ゴメンネ、力になれなくて……。」

「ううん、私だって、フルーラの町ではちっとも役に立てなくて、銀色さんに助けてもらっちゃって。今度は私がかんばらなくちゃ

！！」

メイルは銀色に笑顔を見せて、大丈夫そうに振舞う。

「……健気だね、熱斗君が好きになるのも当然だね。」

「えっ!!!? そんな、そんな事……。」

銀色の言葉にメイルは慌てて否定しようとしたが、否定しきれず、顔を真っ赤にしてうつつむいてしまう。

「……あなたと熱斗君は、どうか、私と彩斗のような事が起きないように……。」

銀色は光博士と名人に聞こえないように、小さくそう呟いた。

「えっ……?」

「さ! 早く行かなくちゃ、やいとちゃんが先に敵を倒しちゃうよ!！」

銀色はメイルの背中を押して、端末の前に立たせる。

「メイルちゃん、信じてるから……。」

「はい!!!」

メイルは力強く返事をする、一回大きく深呼吸をする。

「プラグイン！！　ロール、トランスミッション！！！！」

第五十五話 やいとほ神出鬼没なお嬢さん！？（後書き）

次回、急展開！！

少女はとうとう秘めた思いをさらけ出し、  
またある者は愛する者の願いに反応して、ついにあの力を発動させる！！！！

第五十六話 VS ヴァンパイア・ドール!!! (前書き)

熱斗

「ヴァンパイア・ドール・・・強敵だぜ・・・」

スバル

「アレ？ フレイム・ナイトとウォーロックは？」

ジャンゴ

「あつちでダーククロイドつてのと戦ってるよ。」

熱斗

「なんだ、ダーククロイドと戦って・・・」

熱斗・スバル

「えええええっ!!!? なんで!!!?」

オテンコサマ

『なんでも本編に文句があるらしい。ダーククロイド達が・・・。』

ジャンゴ

「ウォーロックは戦えるならなんでもいって、フレイム・ナイトと一緒に戦っているよ。」

スバル

「ウォーロックのバカ!!!」

熱斗

「一体、何を言い争ってんだ？」

第五十六話 VS ヴァンパイア・ドール!!!

科学省 外部警備システムの電腦

「そこまでです!!!」

グライドが右腕のキャノンを構え、警備システムの前に立っているナビに言い放った。

「・・・・・・・・。」

グライドに背を見せていたナビは無言のままゆっくりと振り向くと、

冷たい目でグライドを睨み付けた。そのナビは、全体的に紫に近い黒いナビで、

両腕両足にシンプルな濃い灰色のアーマーを身につけている。

その黒く長い茫々の前髪から見えるその顔には表情と言う物はなく、まるで死人のようだ。

「何よ！ 死神みたいなカッコしちゃってさ！！ 何とか言いなさいよ!!!」

「・・・・・・・・。」

やいとは黒いナビに怒鳴る。しかし、黒いナビはピクリとも動かず、だんまりを続けている。

「き、気持ち悪いナビねえ……。 グライド!!!」

さっさとやつつけてシステムの制御を取り戻すのよ!!!」

「ハイ、やいと様!!!」

グライドは下ろしていた腕を上げると、キャノンの標準を黒いナビに向けた。

『グライドキャノン!!!』

グライドは弾丸を黒いナビに向かって、二・三発放つ。  
だが黒いナビはそれでも動かず、何かブツブツ呟いていた。

『……敵……消去……。』

フツ……

『……!!!』

キャノンが当たる瞬間、黒いナビはフツと幽霊のようにグライドの目の前から姿を消した。

『なっ、奴はどこに!!!?』

グライドは辺りを見回して黒いナビを探す。だがグライドはその影すら見つけられない。

「……!!! 後ろよ!!!」

やいとは何かに気が付くと、グライドに向かって叫ぶ。だがグライドが後ろを振り向く前に、タツと誰かが地面に足を付ける音が聞こえた。

『……我、ベイト……。』

黒いナビ・ベイトはグライドに聞こえるか聞こえないかの小さな声で呟くと、その鋭い爪でグライドを襲った。

「おやおや、これは可愛らしいお嬢さんだこと……。」「  
黒のダークスーツに白い手袋、一見、青年の執事のような男が、  
向かい合ってるロールに微笑みかけた。

『あなたね！！ システムを操って、あの赤い雨を降らせているの  
は！！』

ロールはロールアローを構え、戦闘体勢に入る。

「はい、私伯爵様に仕えしイモータル、ヴァンパイア・ドールと申  
します。」

男は、ヴァンパイア・ドールはあっさりとロールに自分の事を話  
す。

だがロールは緊張をさらに高めると、構えたまま二、三步後ずさり  
する。

（何コイツ？ こんなにあっさりと自分の事喋っちゃうなんて……  
）

「気をつけて、ロール、あいつ、絶対に強いよ！！」  
メイルはバトルチップをいつでも転送できるように手に握り締め  
る。

少しの間だけ、ロールとヴァンパイア・ドールは動かず、睨み合っ  
ていた。

先に動いたのはロールだった。

『ロールアロー！！！！』



ロールはアローをヴァンパイア・ドールに向けて放つ。  
ヴァンパイア・ドールはアローを体を横に反らすことかわす。

「それでは次はこちらから・・・。」  
そうゆうとヴァンパイア・ドールは指を一回、パチンツ！！と  
鳴らした。

すると、ロールの背後から一、二枚のトランプが飛んできた。

『えっ！？』

「バトルチップ・バブルラップ、スロットイン！！」

メイルがバトルチップをスロットインすると、ロールの回りを水  
の泡が包み、

ロールをトランプから守る。

「おやおや、避けられてしまいましたか・・・では、」

パチンツ！！ ヴァンパイア・ドールはまた指を鳴らす。 する

とヴァンパイア・ドールの後ろから、短剣が飛んできた。

短剣はヴァンパイア・ドールの横を通り過ぎ、ロールに向かう。

『バ、バブルラップ！！』

ロールは再びバブルラップで剣を防ぐ。

「ならばこれで！！」

ヴァンパイア・ドールは今度は両手で連続で指を鳴らした。

そして今度はなんと四方八方からロールに向かって、トランプが飛  
んできた。

『きゃああああ！！！？』

バブルラップは飛んでくるトランプの攻撃に耐え切れず、弾け、  
ロールはトランプの中に飲みこまれてしまった。

「終わりですか・・・あっけなかったですね・・・。」  
ヴァンパイア・ドールはやれやれというように肩をすくめる。

『フウ、フウ・・・』  
「・・・!？」

不意に、ヴァンパイア・ドールの後ろから誰かの声が聞こえてきた。

ヴァンパイア・ドールが驚いて振り向くと、そこには荒い息遣いのロールが座り込んでいた。

「バトルチップ・カワリミ!!」

フウ、とメールが息を吐く。トランプがロールに当たる直前、メールはバトルチップ・カワリミをスロットインしてロールを回避させたのだ。

『ありがとう!! メールちゃん!!』

「うん、どういたしまして」

「やれやれ、以外にしつこいお嬢さんですね・・・。」  
ヴァンパイア・ドールはウンザリというような顔で頭を左右に振る。

『しつこくて悪かったわね!! 今度はこっちの番なんだから!!』  
ロールは再びロールアローを構える。

「そうは言いますが、お嬢さん・・・。」

ヴァンパイア・ドールはそこまで言うと、指を一回鳴らした。すると、周りから、シュツ！！ シュツ！！ と誰かが姿を現した。

『・・・！！？』

「これだけの数を相手にして、お嬢さん一人で勝てますか？」

気が付くとそこには、ロールとヴァンパイア・ドールの周りをグライドが戦っているナビ・ベイトと同じ姿の黒いナビ、数十体がり囲んでいた。

そう、今までのトランプや短剣はこの黒いナビ達の仕業だ。

つまり、黒いナビ達はヴァンパイア・ドールの合図に合わせ、ロールに攻撃をしていたのだ。

四方八方からトランプや短剣が飛んできたのも当たり前だ、至る所に隠れていたナビ達が攻撃していたのだから。

『な、何これ！？』

「このナビ達は一体！？」

ロールとメイルはその余りの多さに驚く。

「これが私の能力、無限に自分の手下となる『アンデット』を作り出し、操る能力、

『ヴァンパイア オブ マリオネット』（吸血鬼の操り人形）・・・」

ヴァンパイア・ドールは優雅にロールに礼をしながら自分の能力を説明する。

だがロールはそんな場合ではなかった。

『あ、ああ……。』

ロールは呻き声のような声を出すと、その場で尻餅をついた。異形の姿の気味の悪い敵ナビ達に囲まれ、怯えているのだ。

「おや？ 怯えているんですか？」

ヴァンパイア・ドールは目を細めてロールを見る。その目には怯えたロールが映し出されている。

『……ゴメン、メイルちゃん……。私……。怖い……。』

ロールは搾り出すようにメイルに話す。

「口、ロール！！ 諦めないで！！」

「無理ですよ、お嬢さん……。」

ロールに諦めない様に言うメイルにヴァンパイア・ドールが話しかける。

「この圧倒的不利な状況で、このピンクのお嬢さんが勝てる可能性はゼロです。」

それに、もう一つのシステムにいるあなた方の仲間も、私の手下の『アンデット』に倒されているはずです。」

「……！！?」

「もうすぐ伯爵様が太陽少年達を葬ります。あなた方もすぐに我らイモータルの世界の為の生贄にしてあげましょう。あの、バナナの少年のように……。」

「……!! (熱斗……!!)」

メイルはヴァンパイア・ドールが言っている少年が熱斗だと気が付くと、

PETを更に強く握り締める。

「あなた達に出来ることはありません。諦めてそこで伯爵様があなた達を捕らえに来るのを待って……」

「……させないわ!!!!」

「『『『……!!?!』』』」

ヴァンパイア・ドールの言葉を遮り、メイルが大きく声を張り上げた。

「メイルちゃん……!!?!」

銀色はメイルが怒りで我を忘れてしまったのかと思い、メイルに呼びかける。

「熱斗は絶対死なせない!! 生贄になんかさせないから!!」

メイルはヴァンパイア・ドールに怒鳴るように言い放す。

「フツッ、そんなに熱くなるなんて、お嬢さんはその少年に思いを寄せていられるのですか?」

ヴァンパイア・ドールは少しからかう様にメイルに問いかける。



『・・・クスツ　分かったよ、メールちゃん』

ロールは必死のメールに笑顔になると静かに立ち上がる。その姿にさつきまでの怯えた様子は微塵もなかった。

「・・・立ち上がるんですか？　勝てる見込みなんて無いというのに・・・」

『でも、私はメールちゃんのネットナビで、メールちゃんは熱斗君がホントに好きだから・・・、だから、その思いがあるから、私達は強くなれる！！　勇気を奮い立たせるんだ！！』

「ならば、その思い、あなたごと壊して差し上げましょう！！」  
ヴァンパイア・ドールはそういうと指を鳴らすために構える。  
手下のアンドットに一斉攻撃させるつもりだ。

『・・・うつ・・・』

「びびるすねば・・・？」

「メールちゃん・・・。」

メールの傍で銀色が手を組んで、目を閉じる。

私、好きだから、ホントに熱斗のこと好きだから！！  
力になりたいと思ひし、助けたいと思っただもん！！

(私も、彩斗が本当に好き……。だから、あなたを助けたいと思っ……。)

どこかで……、

(でも、お願い、彩斗……。)

誰かが……、

(メイちゃんを……。)

銀色の願い)……)に反応して……、

(熱斗君を……。!!)

その力を……

(助けて……。!!)

引き出す!!!!

—— 电脑世界のどこか ——

『……。オラシオン・ロック!?!?』

ダークロックマンが手に持っていた錠前・オラシオン・ロックの異変に気づき、驚き、目を見開く。



ダークロックマンが手に持っていた錠は、透き通ったグリーンの色をしており、時たま、幾何学模様の光が錠の中を駆け巡る。

だが今は、オラシオン・ロックは眩いほどの金色の光を放っている。

『オラシオン・ロックの中の何かが、誰かの願いに反応している！

！？』

ダークロックマンはそういうと、しばらく黙り込む。

そして、呟く様に自分の推測を声を漏らした。

『銀色？ 熱斗？ 僕に語りかけているのは……？』

第五十六話 VS ヴァンパイア・ドール!!!! (後書き)

シエードマン

『納得いかん!!!』

ブリザードマン

『どうして僕達を再登場させる案を……』

クラウドマン

『破棄して……』

コスモマン

『新キャラ登場なぞ……』

スワローマン

『させたんだ!!!』

「ダーククロイド達が自分達の必殺技をフレイム・ナイトとウォーロックに繰り出す。」

フレイム・ナイト

「バトルチップ・ドリームオーラ、スロットイン!!」

フレイム・ナイトはドリームオーラで攻撃を防ぐ。

フレイム・ナイト

「だーかーらー!!! あんた達を登場させるには無理があったんだって!!!」

ウォーロック



第五十七話　パイルドライバー（前書き）

【ボツになった話】

伯爵

「このブラッドレインからは誰も逃げられん！」

熱斗・スバル・ジャンゴ

「ゲツ・・・！！」

?????

「それはどうかしら！！？」

伯爵

「ビクッ！！　そ、その声は・・・」

熱斗

「・・・まさか！！？」

みんなが冷や汗を流しながら声のした方を振り向くと、そこにはやはり仁王立ちで立っているやいとがいた。

伯爵

「キ、貴様・・・！！」

伯爵はそういうと、やいとから遠ざかる。

やいと

「フッフッフ・・・。　出でよオテンコ！！！！」

やいとへの掛け声と共に、やいとの後ろからオテンコサマが現れた。

ジャンゴ

「オテンコさま!!!?」

熱斗

「この展開は・・・」

スバル

「やっぱり・・・!?」

やいと・オテンコ

「『究極合体攻撃!! サンやいと・オテンコフラッシュアタック  
ク!!!』」

やいとのおでこから発せられる光を受けたオテンコさまが伯爵に  
向かって砲弾のように放たれた。

伯爵

「ぐおおお!!! こんな太陽の技に破られるなんて・・・!!!」

オテンコ

『ちっちゃいと自覚し、敵を油断させて倒す。その自覚こそが・  
』』

やいと・オテンコ

「『ボクらの太陽!!!!』」

ジャンゴ

「絶対ちがーう!!! みんな、真に受けないでー!!!」

熱斗

「作者、本当にこんなラスト考えてたのか……(汗)」

スバル

「聞けば分かるけど、聞くの怖いね……。」

## 第五十七話 パイルドライバー

「ハア、ハア、ハア……。」

「グライド！ 大丈夫!!?」

片膝をつき、満身創痕のグライドを心配するやいとがグライドに呼びかける。

グライドの目の前には、変わらず冷たい目でグライドを見下ろすベイトが立っていた。

「……トドメ……。」

ベイトはそう呟くと、右手の鋭い爪をグライドに向かって振り下ろす。

「……クッ!!」

「バトルチップ・ドリームオーラ、スロットイン!!」

やいとがバトルチップをスロットインすると、グライドの周りを紫色のオーラが包み込んでベイトの攻撃を防いだ。

「……。。。」

ベイトは攻撃を防がれるとグライドから距離を置く。

「~~~~!! 気持ち悪いわね~~~~!! どうすればいいのよ!!」

「やいと様、私ではあのナビのスピードには敵いません……。」  
「それでもやるしかないのよ!! バトルチップ……。」

『ぐっ!?　ぐがああああ!!!?』

やいとがバトルチップをスロットインする瞬間、ベイトがいきなり頭を抱えて苦しみだした。

「えっ!?　何!?　どうしちゃったのアイツ!?!?」

今まで言葉らしい言葉は全て聞こえるか聞こえない小声のベイトがいきなり絶叫を上げたので、やいとはあたふたとパニックになってしまった。

『わ、分かりません!　でもチャンスです、やいと様!!　早く強力なバトルチップを!!!』

グライドは満身創痍の体でよろよろと立ち上がると、やいとにバトルチップの転送を促した。

「オッ、オッケー!!　バトルチップ・リーダーズブレイド、スロットイン!!!!」

やいとがバトルチップを転送すると、グライドの目の前に赤と黒の剣士のようなネットナビが現れて、ベイトにそれぞれ斬りかかった。

『ぐぎゃ　あああああ!!!』

ベイトはたまらず悲鳴を上げる。

「オーホッホッホ!!　まだまだ行くわよ!!　バトルチップ…….!!!!!!」

やっと来た攻撃のチャンスにハイテンションになったやいとが新たにバトルチップを

転送しようとする。　しかし……



『あの、やいと様……』  
ハイテンションのやいとにグライドが手を上げて恐る恐るといった感じで呼びかけた。

「何よグライド!! 今が活躍のチャンスなのに!!!」

『でも、あいつももうデリートされてしまってますよ……。』

「……えっ?」

そう、さっきのリーダーズブレイドでベイトはすでに倒されてしまっていたのだ。

『私、あんまり戦ったって言えませんね……。』

グライドの周りに冷たい風が吹いた。 やいとの周りも例外なく……。

「つて! 私達の活躍これだけ!?!?」

『テレビもゲームも漫画もあまりバトルで活躍してませんかからね……』

。。  
あんまり思いつかなかったんでしょう……。』  
「きーーーーーっ!!!!!!!!!!」

『ぐおおおお。。。!!!!!!』

ロールとヴァンパイア・ドールを囲んでいたアンデット達が突然、頭を抱えて苦しみだした。

「な、なんだ!? 一体どうした!?!?」

ヴァンパイア・ドールは、自分の手下達の変化に驚く。

『どうしたの!? 突然!?!?』

ロールも異常な事態に辺りを見渡す。

すると、地面から淡い金色の光が漏れ出し、電腦世界全体をその光で包み込んだ。

その光は、スバルが始めてクロス・マジシャンした時に、スバルを包み込んだ光と似ている。

「。。。っ!? うぐああああ!?!」

光が電腦世界を包み込んだ瞬間、ヴァンパイア・ドールもアンデット達同様に苦しみによる悲鳴を上げた。

『ええっ!? あいつまで、一体何がどうなってるの!?!?』

ロールはもう訳が分からず、あたふたと目を回してしまう。

それは、メールや光博士達も同じだった。

「これは、一体・・・!?」

「光博士!!! 科学省の電脳世界全体に、謎の膨大なエネルギーが注ぎ込まれています!!!」

名人の目の前に映し出されているディスプレイには、科学省の電脳マップに波紋の様に広がる黄色の円が広がり、マップそのものを黄色に移し変えていた。

「謎のエネルギー!? 一体どこから!!!?」

光博士には心当たりがなく、考え込んでしまう。

「それより!!! メールちゃん!!! 今がチャンスよ、強力な攻撃であのヴァンパイアを倒すの!!!」

謎のエネルギーによる異常事態の中、ミソラだけが冷静に、メールに攻撃の指示を出す。

「えっ!? あ、うん!!! ロールいくよ!!! プログラムアドバンス!!!」

メールはそういうと、ホルダーから三枚のチップを取り出した。

「わ、分かったわ!!! メールちゃん!!! プログラムアドバンス!!!」

ロールも今がチャンスはこの状況に、苦しんでいるヴァンパイア・ドールに向かって構えた。

「バトルチップ・ガンデルソル3x2、ジャンゴSP、スロットイン!!!」

「プログラムアドバンス!!!」

ロールが天に向かって右手を上げる。すると、ヴァンパイア・ドールの前後に、円盤の付いた巨大な装置が現れる。

「!!! パイルドライバー!? やめるおおおおお!!!」  
今までの紳士のような振る舞いがウソのように、ヴァンパイア・ドールは

ロールに向かって怒鳴り散らす。

「『いつけえー!!!! パイルドライバーー!!!!!!!!!!』」

「  
メイルとロールの掛け声と共に、パイルドライバーの太陽光線がヴァンパイア・ドールに向かって放出された。」

「ぐあああああ!!! これが、思いの・・・愛の力なのか・・・?  
伯爵様ー!!! お許しをー!!!! ああああああああ

あああ!!!!!!」

ヴァンパイア・ドールは、太陽の光の中へと消えていった・・・。

『勝った・・・。。』

ロールはそう呟くと、ヨレヨレとその場に座り込んだ・・・。

「ロール、ありがとう。 ゆっくり休んでね・・・。」  
メイルはそう言うとロールをプラグアウトさせた。

「よし、やいとちゃんの方の敵ナビの消滅も確認した。名人！！」  
「はい、光博士！！ これであの赤い雨も止められます！！」  
名人はディスプレイから目を離さず、スプリングラーを止めるようにプログラムにアクセスする。

「これで後は……。」

「熱斗君達があ伯爵つてのを倒せば……。」  
メールの言葉を銀色が繋ぐ。

「……スバル君、勝ってね。」

ミソラは手を握って、スバル達の勝利を願った。

第五十七話　パイルドライバー（後書き）

次回予告

ジャンゴ

「いつけー！ー！！　ライジングサン！！！！」

伯爵

「決着を付けよう！！　太陽少年　ジャンゴ！！」

ダークロックマン

「勘違いするな・・・。　僕はただ、確かめに来ただけだ・・・。　」

熱斗

「オレ、信じてるからな！！　お前の心の光を・・・！！」

スバル

「これが、僕たちの意思、太陽の力だ！！」

第五十八話      ライジングサン！！（前書き）

【なんだか状況が複雑になってきた第八章の現在状況】

？ 戦いの場は科学省の玄関ホール

？ その場にいるのが、ジャンゴ、スバル、熱斗、ウォーロック、オテンコ、アリエル、そして敵は伯爵

？ 科学省メインルームにいるのが、マイル、銀色、やいと、名人、光博士で、戦いの行く末を見守っている。

？ 炎山、デカオ、忘れられている。

？ スバルはナイトマジシャンの姿のまま

・・・で、状況説明はこれで大丈夫かな・・・？

第五十八話 ライジングサン！！

「んっ！！？ どうなっている！！」

伯爵が頭上を見ながら叫んだ。

「雨が・・・！！」

「上がっていく！！？」

スバルと熱斗も頭上の異変に気づく。

今まで槍のように降っていた雨が突然降り止んだのだ。

「どうなっているんだ！！？」

「チッ！！ ヴァンパイア・ドールめ、しくじったな！！」

ジャンゴは驚き、伯爵はヴァンパイア・ドールが敗れたことに気づき、舌打ちする。

『ジャンゴ！！ 何故雨が上がったか分からぬが、今がチャンスだ！！』

「うん、オテンコサマ！！」

ジャンゴはそういうと黒ジャンゴから再び元の太陽少年のジャンゴに戻ると、

太陽銃を伯爵に向かって構えた。

「クッ！ だがしかし、ブラッドレインに含まれていたダークマターを吸収したおかげで私の力も回復した。簡単に倒されはせぬ！！」

「伯爵！ ヴァンパイア・ハンターの名に賭けて、僕は絶対に負け



ない!!」

ジャンゴは太陽銃の引き金を引こうとする。しかし・・・、

「!?!? うぐつ・・・!!」

ジャンゴは急に自分の胸を押さえると、その場で膝をついた。

「『『『『ジャンゴ!!?!?』』』』」

みんな驚いてジャンゴに向かって叫ぶ。

「クツ、クツクツクツ・・・。　　どうやら、あの黒い姿の時でもブラッドレインによるダメージがあったようだな・・・。」

伯爵も少し驚いたようだが、すぐに冷静に状況分析をしてジャンゴを嘲笑った。

ジャンゴはブラッドレインの雨を黒ジャンゴ・ヴァンパイアの時を受けていて、ダメージが無いように見えたが元は人間、やはりその影響があり、そのダメージが今一気に来たのだ。

「終わりだ!!　太陽少年　ジャンゴ!!!!」

地面に膝まずくジャンゴを見下ろしながら、伯爵は勝ち誇ったように両腕を高く上げた。

ブラッドランスでトドメを刺す気だ。

「くつ・・・」

ジャンゴは立ち上がるうとするが、体に力が入らず立ち上がれない。

『ジャンゴー！！！』

オテンコサマの絶叫が、科学省に響いた。

「ロックバスター！！」

「ぐっつ！！」

ブラッドランスを出す直前、スバルのロックバスターが伯爵を直撃した。

「伯爵、相手はジャンゴ君だけじゃないぞ！！」

『俺達が相手だ！！』

スバルとウォーロックがいつの間にかジャンゴの前に立ち、伯爵と対峙した。

「フツ！ 人間の小僧が私に適うと思うな！！」

（・・・そうだ、太陽の力がなければ、伯爵を倒すことが出来ない。

）  
ジャンゴは残った力を振り絞り、右手を頭上に上げた。

『ジャンゴ！！？』

「えっ・・・！！？」

オテンコサマがジャンゴのやるうとしている事に気づき、スバルはとっさに後ろにいるジャンゴの方を振り向いた。

「スバル君、頼んだよ……！！ 月光魔法、ライジングサン！！」  
「ジャンゴの右手から、小さな光の玉が現れ、それが大きく弾け飛んだ。」

第五十八話　ライジングサン！！（後書き）

次回、新しいクロス・マジシャンと、アイツが参戦・・・！！？

第五十九話 Ver・サンシャインマジシャン！！！（前書き）

伯爵

「ぬおおおお！！ 納得いかん！！ なんだ私のあの最後は！！？」

フレイム・ナイト

「それは、アイツが来ることへのインパクトが、伯爵最後の場面よりも凄かったからだ！！」

ウォーロック

『嘘付け、結局まともな倒されシーンがおもいつかなかったただけ？』

第五十九話 Ver・サンシャインマジシャン!!!

「月光魔法、ライジングサン!!!」

ジャンゴの右手から放たれた小さな光の玉が上空に放たれ、弾けた。

すると、今は夜だと思えない位、周りが明るくなる。

「又オオオオオ・・・!!!」

伯爵は思わずマントで目を光から遮る。

「これは・・・」

「あつたけえ・・・」

スバルと熱斗は、その光に心が温まるような気がした。

『少年!!! ジャンゴの魔法によって今この場には太陽の光が満ちている!!!』

伯爵の力が弱まっている内に倒すのだ!!!』

オテンコサマがスバルに攻撃をするように促す。

「うん!!!」

『いくぜ、この吸血鬼野郎!!!』

スバルとウォーロックは伯爵に向かって突進する。

「なめるな!!! 火の玉!!!」

伯爵はマントを広げ、そこから数発の火の玉が現れ、スバルを襲う。

「スバル、危ない!!」

『ウォーロック様!!』

熱斗とアリエルが叫ぶ。

だがその叫びも虚しく、火の玉は全てスバルに直撃した。

しかし、その直前、ホープ・キーが光っていることに誰も気が付いていなかった……。

「ス、スバル君……」

力尽き、地に伏せているジャンゴが弱弱しくスバルの名を呼んだ。スバルの立っていた場所は、火と煙が立ち上がり、スバルの様子を確認することが出来ない。

「次はお前だ、太陽少年 ジャンゴ……」

伯爵がゆっくりとジャンゴに近づく。

「グッ……」

「ジャンゴ君に近づくな!!!!」

『まだ俺達はやられてないぞ!!』

そこに、火の中からスバルとウォーロックの声が聞こえてきた。

「チッ! まだ生きて……なっ!?!」

「スバル君、その姿は……!!?!」

煙が消え、その姿を現したスバルは、さっきまでのナイト・マジシャンの姿とは違っていた。

赤茶色のボディに深紅のマントを羽織り、両腕両足に赤い宝石をはめ込んだ黄色いアーマー、太陽を連想させるヘルメットを身に着け、スバルはそこに立っていた。

「『クロス・マジシャン、Ver・サンシャインマジシャン!!!』」

「何!!!?」

「サンシャイン・・・太陽の光・・・!!!」

『あれは、ジャンゴと同じ太陽の力か!!!?』

『キターーーーー!!!』

「新しいクロスマジシャン!!!」

順に、伯爵、ジャンゴ、オテンコ、アリエル、熱斗が言う。

「・・・フツ、面白い・・・。その力、私に見せてみる!! 太陽の力を使う者よ!!!」

伯爵は両手を頭上に掲げる。

「・・・!!! ブラットランスが来る!!!」



『ゆけ、少年！！！！』  
ジャンゴとオテニコ様が叫ぶ。

「ブラッドランス！！！！」  
「HFB、ソル・プロミネンス！！！！」  
伯爵とスバルの攻撃が同時に放たれた。

伯爵からはスバルに向かって地面から赤い血の槍が、スバルの突き出した手からは赤く燃え上がる太陽の光が放出される。  
そして、伯爵のブラッドランスは、スバルのソル・プロミネンスの光に貫かれ、伯爵に向かっていく。

「ぐああああああ！！！！」  
ソル・プロミネンスが伯爵に直撃し、伯爵の体は火に包まれる。

「やった！！！！」  
スバルは勝利を確信し、握り拳を作る。

『……！！！！？ まだだ！！！！』  
オテニコサマがそう言い終わらない内に、火の中から伯爵が飛び出し、熱斗に飛び掛ってきた。

「熱斗君！！！！」

『ヤベエ!!!』

スバルはダッシュで熱斗の元に走るが、間に合わない。

「せめて、一人だけでも……!!!」

伯爵は熱斗を道連れにしようと、火達磨になった体で、熱斗に突進する。

「熱斗くーーーーん!!!」

『ロックバスター!!!』

スバルの絶叫が響いた瞬間、熱斗の後ろから一発の弾丸が放たれた。

その弾丸は、伯爵に向かい、伯爵の体を貫いた。

「ぐ……があ……」

伯爵はその場に倒れこみ、そのまま太陽の光の火に焼かれ、消滅

した。

しかし、その場にいた全員が伯爵の最後を見ていなかった。  
全員が見ていた者は……、

「……ロックマン……？」

熱斗は恐る恐る振り返り、後ろにいたダークロックマンと向き合った。

第五十九話 Ver・サンシャインマジシャン！！！（後書き）

フレイム・ナイト

「ねえ、今思ったんだけど、ウォーロックとロックマンって、さらわれ癖がない？」

ウォーロック

「はあ？」

フレイム・ナイト

「アニメでの話しなんだけど、ウォーロックってスターフォースの時も、トライブの時も敵にとっ捕まってなかった？」

スバル

「そう言えば、僕を助けるためにキグナスやエンプティーに捕まっちゃったんだっけ……」

熱斗

「ロックマンも、アニメやゲームでさらわれた回数、五回位あったような……」

フレイム・ナイト

「ちなみにスバルは人質になり癖が、熱斗は後先考えずひどい目にあい癖が……私は……」

熱斗・スバル・ウォーロック

「お前は人を怒らせる癖だーーーー！！！」

フレイム・ナイト

「ギヤ……！」



第六十話 君の中の心の光を信じる・・・

「ロックマン・・・」

熱斗はダークロックマンと向き合って、静かにその名を呼んだ。

『ジャンゴ、大丈夫か？』

オテンコサマがその間にジャンゴの傍によって、声をかける。

「う、うん・・・。でも、あれってロックマンだよね・・・？」

事情をまだ知らないジャンゴは、自分が知っているロックマンと雰囲気が違うことに困惑している。

『ロックマンは・・・、ロックマンの心は今、闇の深遠にあるのだ・・・』

オテンコサマは熱斗達から聞いた事をジャンゴに話した。

「ロックマン、俺を・・・助けてくれたのか・・・？」

熱斗はダークロックマンに静かに問いかける。

『勘違いするな・・・、ボクはただ、確かめに来ただけだ・・・。』  
ダークロックマンは熱斗にそう吐き捨てる、サンシャインマジシャンになっているスバルを見た。

『・・・オラシオン・ロックとの共鳴と、何かしらの力の影響を受けて、新しい力を手に入れたようだな・・・』

「・・・ロックマン」

スバルとダークロックマンの間に緊迫した空気が流れる。





だから！！ オレはもう迷わない！！ オレはロックマンの中の心の光を信じる！！ 俺が必ず、ロックマンの心の光を取り戻す！！！！」

熱斗は半分叫ぶように、でもはっきりとダークロックマンに宣言した。

『・・・・・・・・・・・・・・・・』

ダークロックマンは何も言い返さなかった。

熱斗とダークロックマンは、しばらく互いの目を見ていたが、ダークロックマンは目を逸らし、そのまま闇の中へと消えていった・・・。

「・・・・・・・・もう行くのか？ ジャンゴ、オテンコサマ？」

熱斗がジャンゴとオテンコサマに話しかける。

「うん、こうしている間にも僕達の世界で伯爵のような奴等が何かをしようとしているかもしれない。」

『我らはヴァンパイア・ハンターとして、行かなくてはいけないのだ。』

あの後、ダークロックマンが去った後、体力が回復したジャンゴとオテンコサマは、時空の歪みが消える前に帰ると言って、立ち去るうとしいた。

「ジャンゴ君、ありがとう!! 君のおかげで伯爵を倒すことが出来たよ!!」

『感謝するぜ!』

『ありがとう』

スバルとウォーロックとアリエルがジャンゴにお礼を言う。

「えへへ、そうだ熱斗君、ロックマンの事なんだけど……」

「ジャンゴはそこまで言うと言葉に詰まる。」

「? なんだ、ジャンゴ?」

「……僕も信じるよ!! ロックマンが必ず戻ってくるって!!」

『私もだ! 少年!!』

ジャンゴとオテンコサマは力強く熱斗に言った。

「ジャンゴ、オテンコサマ……ありがとう!!」

熱斗はニカツと笑いながら、ありがとうと返した。

『それではサラバだ、少年少女達よ!! 太陽と共にあらんことを』

「熱斗君、スバル君……明日もまた日は昇る!!」

「ああ!!」

「また会おうね!!」

ジャンゴとオテンコサマはそのまま時空の歪みを通って、太陽の街『サン・ミゲル』へと去っていった……。

『……ウォーロック様……』

『あん？』

アリエルがウォーロックにオズオズと話しかけてきた。

『あの、ゴメンナサイ、心配かけちゃって……、それに、私何の役にも立てなくて……』

『……』

ウォーロックは何も言わずに、しょぼんとしているアリエルの頭に手を乗せた。

『……？』

『別に、俺は……お前のこと、役立たずなんて思ったことないぜ……』

『……!!? ……ありがとう、ウォーロック様……』

アリエルがその時、ウォーロックに見せた笑顔は太陽のように輝いていた……。

第六十話 君の中の心の光を信じる・・・（後書き）

名人

「光博士、熱斗君達が敵を倒しました!!」

光博士

「アア、よかった・・・。」

ミソラ

「メールちゃん、銀色さん、スバル君達に会いに行こう!!」

銀色

「ええ!!」

メール

「そうだね!!」

ミソラ

「さっきの告白、熱斗君にもちゃんと言おうね、メールちゃん」

メール

「・・・えっ?」

ロール

『メールちゃん、ヴァンパイア・ドールに向かってみんなの前で思いつき熱斗君のこと好きって言ったじゃん!!』

メール

「あっ!?! いや、えと、あのその・・・。あああああああ



現在状況報告 ｛ Part ・・・ ｝ (多分・・・)

何だかんだで、とうとうこの小説も六十話を掲載し、次はいよいよ第九章に・・・

それで何だか作者まで混乱するような複雑な事に成ってきた我が小説・・・

てな訳で、ここいらで話を整理しておこうと思います!!

【設定】

? スバル(シューティングスターロックマン)・ミソラ(ハープ・ノート)は常に熱斗、メイルのPETの中にいる。

? ホープ・キーは熱斗のPETに保存されていて、スバルがクロス・マジシャンのどれかに変身した時、スバルがペンダントのように首から下げて身に着けている。

? Dr. ガルナはムーの技術を悪用して、ネットナビを実体化させる装置を開発している。

? 銀色は熱斗達と同じ時代の人間だが、ウォーロックを追って未来からやって来た電波星人『アリエル』と電波変換して、『アリエル・ウォーテーター』に変身する。

? 電波変換している時、銀色はスバル達と同じように電脳世界に入って、戦うことが出来る。

? ブライは、ムーの技術を悪用したネビュラを追って、二百年後の世界からやって来た。

? ファントム・ブラックは生きていて、スバルに復讐するため、

ネビュラと手を組んでいる。

? 熱斗・彩斗兄弟の過去は小説オリジナルとなっている。(激重要!!!)

### 【第八章終了時の現在状況】

? 『ホープ・キー』は残り一つのパーツで完成する。

? 『ホープ・キー』には、それと対になる錠前『オラシオン・ロツク』がある。

? ロツクマンはダークロツクマンとして、熱斗達の前に立ち上がる。(しかし、ネビュラに絶対服従というわけでも無い。その真意は・・・?)

? 『オラシオン・ロツク』はダークロツクマンが所持している・・・!!!

? 銀色の愛した人物は物語、最重要人物!!!?

? メイルの告白について知っているのは、銀色、ミソラ、光祐一郎博士、名人、ロール、ハーブのみ

? ダークロツクマンの事で落ち込んでいた熱斗はもう立ち直っている。

? ジャンゴとオテンコ様はもう既に、『サン・ミゲル』へと帰っていった・・・。

? ダークロツクマンはDr・ガルナの発明によって、実体化が出来る。(だがダークロイド達は実体化出来ない。機械との相性が必要のようだ。)

? ブライはネビュラを探して、熱斗達の世界をさまよっている。

? 熱斗の夢に出てくる謎の少年、肉体が『オラシオン・ロツク』に封印されていて、精神はネビュラに囚われていると言いが・・・!?

【クロス・マジシャン】

「Ver・スノーマジシャン」

水属性、持っている杖で氷の武器を造って戦う。

HFBは『ダイヤモンド・ダスト』

「Ver・アースマジシャン」

無属性、大きなアーマーのついた拳で押し切るパワーファイター。  
全ての攻撃に貫通能力が付加される能力がある。

HFBは『アース・ブレイク』

「Ver・ナイト・マジシャン」

無属性、白く輝く剣モデルはガイアブレードによる接近戦型の変身。

ブルースと同じく、剣から衝撃波を出すことが出来る。

HFBは『シャイニングオーバーロード』

「Ver・サンシャイン・マジシャン」

火属性、『オラシオン・ロック』と共鳴している時に、

ジャンゴの放った「ライジングサン」の太陽の光を受けたことが原因で生まれた変身。

ジャンゴ同様に太陽の力を使いこなす。

HFBは『ソル・プロミネンス』

クロスマジシャンについて、何かアイデアがあったら、ぜひ教えてください！！

こんな感じであってるかな？ 何か説明不足のところがあったり、矛盾しているところがあったら教えてください！！





特別番外編！！ フレーム・ナイト×天空 翼 長つたらしい状況説明を省略

本当にやっちゃいました！！ 他の作者さんとのコラボ！！

私を書いたのをベースに天空 翼さんが所々付け足した感じになっ  
ています！！

天空 翼さんの文を尊重して、天空 翼さんの書いたところはあえ  
てそのままにしました！！

みなさんはどこが私で、どこが天空 翼さんが書いたところか分か  
りますか？

「なんでこんなことに・・・」  
合気がガツクリと肩を落とす。

あの後、列車を間違えた気が付き、慌てて暴走した銀八が車掌に列車を止めるようにと襲い掛かった。  
しかし・・・

「無理に決まってるんだろ？ なんだよアレ？ なんでDr・リーガルが車掌勤めてるの？」

銀八が空ろな目で熱斗と炎山を見る。

442

「俺達を知るわけないだろう・・・」  
「一番大変だったのは俺達なんだ。アイツとは本当に色々と因縁があるから、終始ものすごく重い空気の中にいたんだ。」  
炎山はグツタリと疲れた感じに、熱斗も片手で頭を押さえながら言った。

「まあ、来てしまったのは仕方がないから、この世界で早く買出し済ませて帰りましょう。」

「さんせ〜い!!」  
アイチの意見に權が手を上げて賛同する。

「アイチの言うとおりだな、どこで買おうか・・・。」  
合気が辺りをキョロキョロ見渡し、店を探す。

「ロックマンエグゼの世界でカレーと言ったら、あそこだよ!!!」

「ここが……」

「マハ一番……点……」

「ダッシュ! マハ一番、だよ!!!」

合気の間違いを熱斗が修正する。

ここはマハ一番の入り口前、熱斗の『エグゼの世界でカレーと言  
つたらマハ一番だよ!!!』と言う意見に、みんな賛同して、  
熱斗の案内の元、マハ一番に買出しに来たのだ。

「おーなんかいい匂いしてるな。」

「本当だ、美味しそう!!!」

權とアイチがカレーの匂いを嗅ぎつける。

「でも熱斗君、大丈夫かい？」

銀八が意味ありげに熱斗に聞いてきた。

「ん? 何?」

「入った途端、こつちの世界の熱斗や炎山、この小説の登場キャラ  
クター達と鉢合わせなんかしたら……」

「アハハ、大丈夫だよ!!! ゲームの世界の設定だし、マハが出て

きたことなんか一度もないんだから・・・」

熱斗はそう言いながら、お店の入り口を開けた。しかし、そこに待っていたのは・・・

「えっ・・・」

「なっ・・・」

「熱斗と炎山君が・・・!!」

「ふたりずついる・・・」

「なんで!!?」

「・・・!!!?!?」

熱斗、炎山、メイ、デカオ、やいと、銀色がカレーを食べていた。

「……………いた……………!!!」

「何で炎山や熱斗が学ラン着てこんな所に!?!」

「ど、ドッペルゲンガーか!?!」

「いやいや、違います!マジで馬鹿教師の言つとおり鉢合わせしちまったよ!?!」

「とりあえずザケ!」待て!こんなところでドラゴニック・オーバーロードを呼び出すな!」

「こっちの炎山ナイスツツコミ!」

「合気もツツコミストに戻れ!俺じゃツツコミきれない!」

「ブラスター・ブレード、僕をここから連れ出して。」

「アイチも現実逃避するな！頑張って生きるんだ！」

「え？何に？」

「熱斗は口を出すな余計にややこしくなる！」

「ガン！」

「まあ、馬鹿だし。」

「馬鹿はねえだろっ合気！」

「黙れや！」

「お前ら…喧嘩するなああああ！…！」

「」「炎山（君）が切れたあああああ！…！」

「ストップしなさい！何が起こったのか説明しなさいよ！」

「こつちの世界のやいとちゃんはちよつと黙ってて！」

「てめえらしい加減にしろおおおおお！…！」

「炎山、皿投げないで、落ち着こつ！ちよつと落ち着こつ！…！」

「というか若干キャラ崩壊してるんですけどおおおおお！…？！…？」

「お前らしい加減にしろおおおお！！炎山落ち着けええええ  
！！！」

「權いいいい！！こんな店で拡声機使わないで！マジ耳痛いから  
！」

「ハッ！俺はいつたい……」

「よかつた炎山君が戻ってきた！」

「うがあああ！！ドラゴニック・オーバーロード！」

「今度は權君が暴走したああああ！！！」

「お前らしい加減にしろおおおおお！！！」

「……ドラゴニック・オーバーロードが火を噴いた！ギヤアアアア  
アアア！！！！」

「もう、落ち着いて事情説明してえええ！！こっちの熱斗と炎山が  
固まっちゃってるわ！！！」

「実はカクカクシカジカでここに居るのは異世界の熱斗と炎山なん  
だ。」

「なるほど。」

「……今までのくだりなんだったのおおおおお！！！！？！！？！！？！！  
？」





權とアイチが煙で煤だらけになった顔を拭きながら叫ぶ。

『銀色！ キッチンの電腦からウィルスの反応があるよ！！ この爆発はそいつらのせいよ！！』

「なんですって!?!」

アリエルが銀色にウィルスの事を知らせる。

「よし!! 炎山、ウィルスを退治するぞ!!」

「分かっている!! 行くぞ! ブルース!!」

「ロックマンエグゼ!!」

「トランスミッション!!」

と、熱斗と炎山はスプーンとフォークを端子に差し込もうとする。

「.....」

その場にいた全員が『なにやってるの?』という顔で熱斗と炎山を見る。

感じている人がいると思うが、この熱斗と炎山は、『憂鬱な学園生活〜合気のドタバタ学園生活〜』の方の熱斗と炎山だ。

「お前ら、自分のナビどうした?」

合気は遠慮がちに聞いた。

「.....学園に置いてきたの忘れてた.....」

「遊戯君、熱斗君知らない？」

「炎山様もいないんだ。」

「ううん、知らないよ。」

遊戯が首を縦に振って、答える。

「あー、あいつらなら別の小説に放り込んできたー!!」

そこに通りかかった神楽があっさりと答える。

「「えー！ー！ー！ー！ー!!」」

――場面戻ってマハ一番――

「どけ・・・俺達がやる。」

『ロックマンエグゼ 願いが希望に変わるとき』の炎山がブルースをプラグインする。

「ここは俺達の小説だしな」

と、熱斗もスバルをプラグインする。

「「がつくり」」

――キッチンの電脳――

「・・・何なの？ このウィルスの数・・・」

『・・・異常だ・・・』

スバルとブルースがげんなりとした顔で言う。

スバルとブルースの周りには、千匹に近い数のドリームビットがうじゃうじゃいた。

「なんだこの数!? なんでこんなにウイルスが!!!?」

「……どこからかやって来たのか?」

「……合気? なんで逃げようとしてるんだ?」

權が抜き足差し足で出口に向かう合気を呼び止める。

「あ、いや、その……」

「お前まさか……」

銀八が変な考えに至り、ワナワナと振るわせた手で合気を指差す。

「違ーーうー!! これ見て!!」

合気はその場にいる全員に自分のPETを見せる。

そこには、緊急メールがあつて……

注意!! ウイルス『ドリームビット』に感染した次元列車が一台混じって運行している事が発覚しました。  
気を付けてください!!!!

「ウイルス連れてきたのお前らかー!!!」

「すみません!!!!」

「でーい!! どうすんだよ!!!」

デカオが叫びながら、そこら中を走り回る。だがそれが仇になつて、權にぶつかり、銀八にぶつかり、そして、『ロックマンエグゼ 願いが希望に変わるとき』の

熱斗にぶつかった。

「イデ!!!」

「ゴハ!!!」

「アダ!!!」

ポツチャン!!!

「……えっ!?!」

ドミノ崩しのように床に倒れた熱斗が恐る恐る自分の手を見る。  
その手にPETはなかった。

「……」

全員、熱斗がPETをないのを確認すると、カレーの入った寸胴鍋を見た。熱斗の手から離れたPETがブクブクとカレーの中に沈んでいた。

「……ギャアーーーーー!!!!!!」

熱斗が今までにない絶叫をする。

「ヤベーよこれ!!! 何!?! 主人公カレーの海で溺死って!!!  
原作的にまずいよこれ!!!」

銀八が慌てて寸胴鍋を引っくり返す。

「あ、あつたよ!!!」

メイルが床にぶちまけられたカレーの中から熱斗のPETを見  
つけ、タオルできれいに拭き取る。

「ありがとう、メイルちゃん!!!」

熱斗はメイルからPETを受け取る。すると、PET画面が突然光りだした。

「なんだ!？」

「まさか、壊れた!？」

やいとと銀色が熱斗のPETが壊れたのではと驚く。

「違う、これは・・・!！」

—— キッチンの電脳 ——

「スバル!？」

ブルースがスバルを見て驚く。スバルの体を淡い光が包み込んでいたのだ。

「スバル! これは・・・!!！」

「うん、クロス・マジシャン発動!!！」

その瞬間、その場は眩い光で満たされる。光が収まった時、そのいたのは・・・

空色のマントを羽織り、その背には弓と巨大な剣を背負っている。そして、その周りには、小さな雷雲や普通のプカプカした白い雲が浮かんでいた。

「クロス・マジシャン、Ver・インドラマジシャン!!!」

「インドラマジシャン!？」

「なんだ? インドラって!？」

デカオが呟くように疑問を口にした。

「インドラってのは、インドの神話に出てくる神様で、天空の主であり雨と雷霆の支配者だ。アシュラと永劫にわたって戦い続ける者で二頭の赤い馬に牽かれる黄金の戦車を駆る戦士であり、その臨場に際しては空に虹が現れるという。神々の英雄であり、軍神であり、ヴァジュラを放って悪魔を撃ち懲らす。

広く信仰された神であり、様々な別名を持っていて、その名はマヘーンドラ（偉大なるインドラ）、マガヴァーン（惜しみなく与える者）、グリトラハン（グリトラを殺したもの）、ヴァジュラパーニ（ヴァジュラを手にする者）、メーガヴァーハナ（雲に乗る者）、デイヴァスパティ（天空の主）、プランダラ（都市を破壊する者）  
.....」

「アイチ、もういい.....」

アイチの長い説明を權が制す。

「待って、インドの神様って.....」

「カレーの本場はインド.....」

やいととデカオはそこまで言うと、互いの顔を見る。

——ニホン某所——

『……?』

オラシオン・ロックをマジマジと見つめながら、ダークロックマンは首をかしげる。

『ホープ・キーが何かに反応している? ……何に?』

それがカレーという事実は、さすがのダークロックマンでも分かるわけが無かった……。

「HFB、デイヴアスパティー!!!」

スバルは背負っていた矢を上空に向けて放つ。すると、矢は上空で巨大な白い雲に変わる。

さらにスバルは剣を上空の雲に向かって放り投げる。すると、雲は雪雲に変わり、あられになってドリームビットを襲った。

『すごい……。』

ブルースが思わず呟く。インドラマジシャンの攻撃はドリームビット全てに降り注ぎ、千匹近くいたドリームビットはデリートされた。

「あながとな!!! こっちの世界の熱斗達!!!」

合気がたくさんのカレーのスパイスが入った紙袋を抱えながらお礼を言う。

「気にすんなよ!!! それより、文化祭絶対成功させるよな!!!」  
熱斗が親指を立てながら言った。

銀八・合気・炎山・アイチ・櫛・熱斗、天空 翼さんの小説のキヤラクター達はそれぞれ、カレーのルーや野菜等、カレーに必要な材料を抱えていた。

「絶対成功させるぜ!!!」

「お前ら~~~~!!! そろそろ行くぞ~~~~!!!」

次元列車のドアの前に立っている銀八が、合気達を呼び戻す。

「またコラボする時が会ったら・・・」

「よろしくな!!!」

合気と熱斗は互いの拳をコツンと当てた。

そして合気達は、次元列車に乗って、パラレル学園に帰っていった。  
.....

「学園祭、絶対成功させるぜ!!!」



「「「おおおお！！！！！」」」

「頑張れよー俺はジャンプ買いに「ガシッ！」へ？」

銀八の肩を炎山が掴んでいた。

ものすっごい黒い笑顔で…

「逃がしませんよ銀八先生？」

「あ、あ、ああああああああ！！！！！！！！！！」

（（（炎山（君）怖ええええええ…）））

特別番外編！！ フレーム・ナイト×天空 翼 長ったらしい状況説明を省略

コラボするにあたって、これ二日かけて仕上げました。  
づがれた・・・。

でも、初のコラボがマジで実現できて、満足感がぎゅっしり詰まっています！！

合気君たち、文化祭がんばってね！！

第六十一話

夢（前書き）

熱斗

「あれ？ フレイム・ナイトの奴、一体どこにいったんだ？」

スバル

「熱斗君、大変だ！！ これ見て！！！」

スバルは一枚の紙切れを熱斗に見せる。

「この小説の作者、フレイム・ナイトを預かった。

返して欲しければ、私と勝負しろ。」

ファントム・ブラック」

スバル

「大変だよ熱斗君！！ 早く助けに行かなくちゃ！！！」

熱斗

「・・・怪しいな・・・。」

スバル

「えっ？」

熱斗

「これってさ、ネタが尽きた作者が苦し紛れにやった自作自演なんじゃ・・・。」

スバル

「あ、なんだ、心配して損した！」

ウォーロック

『哀れだな・・・フレイム・ナイト・・・。』

スバル

「ウォーロック!?!?」

## 第六十一話 夢

ワン！ ワン！ 一匹の犬が草むらを走る。

「待つてよ、ガウ！！」

青いバンダナを着けた小さな男の子が、ガウと呼ばれた犬を追いかけて抱き上げる。

しかし、犬の重さに耐え切れず、男の子は草むらで尻餅をついてしまふ。

「大丈夫？」

水色のワンピースを着た、小学生位の女の子が男の子に手を差し出す。

「うん……。」

バンダナの男の子は少し目に涙を浮かべながら、手を握る。

「熱斗、泣かないで」

そこに、バンダナの男の子によく似た、もう一人の小さな男の子がバンダナの男の子の頭に手を乗せた。

「うん、彩斗兄ちゃん！！」

ボタンー！

「……夢？」

ベットから転げ落ち、寝ぼけ眼で熱斗は呟いた。

(何だっただ・あ・あの夢?)

熱斗は目をこすりながら立ち上がる。

「熱斗君、大丈夫？」

『お前必ずベットから転げ落ちて起きるよな〜』  
PETからスバルとウォーロックが熱斗に話しかける。

「……お早う……。」

「どうしたの、熱斗君？」

なんだか元気がない熱斗にスバルは聞く。

「いや、なんでもない！ それより今日はいよいよ最後のパーツを  
手に入れるんだから、  
早く科学省に行かないと!!」

熱斗はそういうと、急いで服を着替えた。



「しかも、なんかメールちゃん俺のことを避けてないか？」  
熱斗は知らない。まさかメールが銀色達の目の前で大告白をしてしまったことに。

「うん、そうだね、何かあったのかな？」  
スバルもその事実を知らないので、首を傾げて熱斗と一緒に考え込む。

PPP!! PPP!!

『オイ、なんかメールが来たぞ!!』  
ウォーロックが熱斗にメールが入ったことを知らせる。

「メール？ パパからか？」  
「ううん、NO NAME？ 差出人不明だ・・・」  
スバルは慎重に添付されたメールを開く。  
メールにはそっけなく、短い文が書かれていた。

「光 熱斗へ お前の秘密を知っている。 旧秋原エリアに來い。」

「俺の秘密・・・!？」  
熱斗はメールに書かれている文面に驚きを見せる。

『旧秋原エリアってなんだ？』  
ウォーロックが熱斗に問いかけてきた。



「あ、ああ、十年位前、今の秋原エリアが造られる前に使われていたインターネットで、今は閉鎖されている電腦世界なんだ……。」  
「そんなところで、一体何を？」

「……。」

熱斗は黙ってメールをじっと見る。

熱斗にはこのメールがただの悪戯にはとても思えなかったのだ。

「……行ってみよう！なんかすごく気になるんだ！！」

「いいの熱斗君？何かの罠かもしれないよ？」

スバルが熱斗に問いかける。

「ああ、だけど、行かない訳にも行かないだろ！？頼むよ、スバル！！」

「……そこまで言うなら、分かったよ！！熱斗君！！」

『へっ！面白いことになってきたじゃないか！？』

「よし！早く家に帰って、プラグインだ！！」

熱斗はそういうと、家への歩を早めた。

第六十一話

夢（後書き）

ウォーロック

『ぐうう・・・』

スバル

「どうしたの、ウォーロック!? その怪我!?!?」

ウォーロック

『それが、突然ファントム・ブラックが現れて、俺と作者をボコボコにして作者を連れ去っちゃったんだ・・・。』

熱斗

「ええ!? それじゃあこの紙マジ!?!?」

ウォーロック

『ファントム・ブラックの奴、作者を拉致して前書き後書きを乗っ取るつもりなんだ!?!』

スバル

「なんだって、そんなことされたら一体何を書き込まれるか・・・!?!」

熱斗

「ロックマンだけじゃなく、フレイム・ナイトまで取り戻さなくちゃならなくなっちゃったな・・・。  
行くぜ! スバル、うでナビ!?!」

スバル

「うん！」

ウォーロック

『おお！』

フレイム・ナイト救出の戦いが始まった！！

T o b e c o n t i n u e d . . .

第六十二話 旧秋原エリア（前書き）

スバル

「ファントム・ブラック!!」

ファントム・ブラック

「よく来たな、星河 スバル!!」

熱斗

「やい、フレ임・ナイトを返せ!!」

ファントム・ブラック

「フフフ、そうはいかない、フレ임・ナイトは一応女性だからね・  
・この脚本のヒロインになってもらうよ・・・。」

スバル

「何、この脚本のヒロインだと!? 確かに作者は一応女の人だけ  
ど、無理があるだろ!!」

熱斗

「そうだぜ!! 一応女の人ではあるが、俺達は女の人扱いしたこ  
と全然ないんだぞ!!」

ファントム・ブラック

「フレ임・ナイトが一応女性ということは置いて、お前達、  
自分達の置かれた状況が分かっているのか?」

熱斗

「何!?!」

ファントム・ブラック

「私が捕らえているのはこの小説の作者、言わば創造主だよ？」

スバル

「あつ！ そうか、その気になれば前書き・後書きどころじゃなくて、この小説そのものがファントム・ブラックに乗っ取られてしま  
う。」

ファントム・ブラック

「その通り！ まあ、フレイム・ナイトは一応女性だから、手荒な  
ことはしないけどね・・・」

ウォーロック

（作者がこの会話聞いたら大爆発しそうだな・・・）

## 第六十二話 旧秋原エリア

「ここが、旧秋原エリア……。」

スバルは周りを見渡すと、静かにそう呟いた。

その後、メールを見た後、熱斗は直ぐにスバルをプラグインし、スバルは今旧秋原エリアにいる。

使われなくなつて十年近く経っているため、所々道がボロボロになつている。

それにナビは一人もいないため、古く寂れたゴーストタウンの様になつてしまつていた。

「来たはいいけど、メールの差出人はどこにいるんだ？」

「人っ子一人いねえじゃねえか!!！」

熱斗とウォーロックは揃つて不満声を出す。

「なんでお前達がここにいるんだ？」

不意に、後ろから声が聞こえてきた。

「！ その声は……!?!？」

スバルは慌てて後ろを振り向く。

そこには、不気味な笑みを浮かべるファントム・ブラックが立っていた。

「ファントム・ブラック!! まさか僕達を呼び出したのはお前か!?」

「呼び出した? 何のことだ、私はここにホープ・キーのパーツを捜しに来ただけだぞ?」

「な、何だつて!?!」

熱斗はファントム・ブラックの言葉に驚く。

「フッフ、まあそんなことはどうでもいい……。

せつかくだ、どちらが先にホープ・キーのパーツを見つけるか、競争しようじゃないか?」

『競争だと!?!』

ファントム・ブラックにウォーロックが食って掛かる。

「先に失礼するよ……」

ファントム・ブラックはそう言うと、マントを翻し、姿を消した。

「大変だ、スバル! 俺達もホープ・キーを捜しに行こうぜ!」

「うん、熱斗君!」

『あの野郎にだけは負けねえ!』

スバルはそう言うと、旧秋原エリアの奥へと進んでいった。

第六十二話 旧秋原エリア（後書き）

【ボツになった話】

「ファントム・ブラック！ まさか僕達を呼び出したのはお前か！？」

「呼び出した？ 何のことだ、私はここにホープ・キーのパーツを捜しに来ただけだぞ？」

「な、何だって！？」

熱斗はファントム・ブラックの言葉に驚く。

「フフフ、まあそんなことはどうでもいい……。

せっかくだ、どちらが先にホープ・キーのパーツを見つけるか、競争しようじゃないか？」

『へっ！ そんなこと言つて、本当は全然小説に出てこれなくていじけてただけじゃないのか』

ファントム・ブラックにウォーロックが食って掛かる。

「な、何を馬鹿な……（実は、ウィルス『オロロン』と一緒にどうやって小説に出られるか作戦会議してたなんて言えない……）」

「とにかく、先に失礼するよ……。」

「『あつ、逃げた！』」

「逃げてない！！！！」





第六十三話 鍵と扉（前書き）

ファントム・ブラック

「それでは私から君達への挑戦だ！ この挑戦をクリアすることが出来たら、作者は返してやるよ！！」

熱斗

「へっ！ 望むところだ！！」

ファントム・ブラック

「問題！ 最後のホープ・キーのパーツを手にするのは誰だ！？」

ウォーロック

『挑戦つてゆうか予想問題じゃねえか！！』

スバル

「そんなの、僕たちに決まってるだろ！！」

ファントム・ブラック

「フッフ、それはこの章を最後まで読めば分かる！！」

第六十三話 鍵と扉

「スバル、炎山達に連絡したぜ！！ 今こっちに向かってるてさ！！」

「OK！ 熱斗君」

走りながらスバルは熱斗に返事した。

スバルは広大なこの旧秋原エリアをとにかく走りまくっていた。

「ウォーロック、本当にこっちの道で合ってるの？」

『おう！ 俺の勘がそう言ってるぜ！！』

「・・・え？」

スバルはそういうと走るのを止めて、ウォーロックをげげんそうな目で見る。

「ウォーロック、僕は今までウォーロックの指示した道を走って来たけど・・・」

まさか、何の考えもなしに闇雲に走ってただけ・・・？」

『何をぉ！！ 俺の勘は生半可な考えよりもよく当た・・・\$%&

#』

スバルはウォーロックが最後まで言い切る前に、ウォーロックの顎に蹴りを入れた。

「とにかく進もう、ウォーロックの勘なしで・・・！！」

スバルはそういうと、今度はゆっくりと歩いて慎重に道を決めて進んだ。

「ハ、ハハハ・・・」

『……………』

熱斗は苦笑いを浮かべ、ウォーロックにいたっては気絶していた。

…ワン…  
…って…ガ…！

「えっ？」

「どうした、スバル？」

突然歩を止めたスバルに熱斗が呼びかける。

「熱斗君、今何か声みたいなのが聞こえなかった？」

スバルは周りを見渡す。

「えっ？ 俺には何も聞こえなかったぜ！？」

『誰かいるのか？』

キーン…

「えっ…？」

熱斗も声ではないが、不思議な音が聞こえ、辺りを見渡す。  
そして気づいた。 自分のPET画面が光っていることに。

「！ P E Tが光ってる！！」

「熱斗君！ こっちでも、向こうから何か光が見えるよ！！」

スバルが熱斗のP E Tと同様に電脳世界の一部が光っていることに気づく。

『・・・行ってみようぜ！』

「うん！！」

スバルはそう言うと、光っている場所へと走った。

「これは・・・扉？」

スバルは目の前で光っている物を見て呟いた。

それは青白く光り輝く巨大な扉が浮くように立っていた。

『オイ、この扉、鍵穴が付いてるぜ。』

「えっ？」

ウォーロックに言われ、スバルは扉を見る。

確かに扉の取っ手らしきもの下に小さな鍵穴があった。それはつまり、この扉を開けるためには鍵が必要ということだ。

「・・・・・・・・。」

スバルは少し考え込むと、不意にある事を思いついた。

（もしかして・・・）

スバルは組んでいた腕を解いた。

「熱斗君、P E Tに保存しているホープ・キーのパーツを僕に転送

してくれないかな？」

「えっ？ ああ、分かった。」

熱斗はP E Tに保存していたホープ・キーのデータをスバルにインストールする。

すると、スバルの目の前にホープ・キーが姿を現した。

『どうすんだ、スバル？』

ウォーロックはスバルの行動に質問する。

「うん、もしかしたらなんだけど・・・」

スバルはそういうと、鍵穴にホープ・キーを突っ込んだ。

『！ スバルお前まさか・・・！？』

ウォーロックもようやくスバルの考えに気づき、スバルの顔を見る。

「・・・いくよ・・・。」

スバルはゆっくりと鍵穴に入れたホープ・キーを回した。

ガチャ・・・。。。

小さく鍵が開く音が聞こえた。すると、扉は誰も取っ手を触つてないのに静かに開き始めた。

第六十三話 鍵と扉（後書き）

ファントム・ブラック

「さあ、一体誰がホープ・キーのパーツを手に入れることが出来るかな？」

熱斗

「だから俺達に決まって・・・」

スバル

「待って、熱斗君！！ よく考えたら、ファントム・ブラックは作者、この小説を書いている人を捕まえてるんだ！！ その気になれば誰かパーツを手にするか、書き換えることが出来る！！」

ウォーロック

『なるほど・・・俺達が正解を言っても、書き換えてハズレにすることが出来るって訳か・・・』

熱斗

「それってインチキじゃないか！！！！」

ファントム・ブラック

「フフフ、今頃気づいても遅・・・」

フレイム・ナイト

「ただいま～～～～」

全員

「え～～～～～～～～！！！！？」

ファントム・ブラック

「バ、バカな!!!? あの頑丈な枷を外せる筈が……!!!?」

フレイム・ナイト

「いや〜、まさかアイツ等に助けられるとはな〜」

フレイム・ナイトが指差した先には、今まで登場したダーククロイド達が仁王立ちで立っていた。

シールドマン

『キキッ！ 我々が今だに再登場できてないというのに……』

ブリザードマン

『再登場して、出番だして貰ったくせに……』

クラウドマン

『作者さらって小説を独占しようとするなんて……』

コスモマン

『許さ〜〜〜ん!!!!』

スワローマン

『お前に全ての怒りをぶつけてやる————!!!!』

ファントム・ブラック

「お前らなんか脚本に載せていないぞ〜〜〜!!!!」

ファントム・ブラックの声が空しく後書きにコダマした……。



フレイム・ナイト

「事情知ったダーククロイド達がファントム・ブラックの思い通りにさせるかってんで、助けてくれたんだ……。」

熱斗

「ハ、ハハ……使い捨てキャラって辛いんだな……。」

スバル

「まさかダーククロイドが小説最大のピンチを救うなんて……。」

フレイム・ナイト

「ところで熱斗、スバル、一応女ってどうゆうこと？」

熱斗・スバル

「ギグツ!!」

フレイム・ナイト

「ファントム・ブラックはダーククロイド達が片してくれてるし、お前らは……私が……!!」

熱斗・スバル

「わあああああ~~~~~!!」

ウォーロック

(やっぱり大爆発した……!!)

第六十四話 Akihara Town In Past (前書き)

更新遅れて誠申し訳ない!! m) > < ( m

## 第六十四話

## Akiharatown In Past

「こ、ここは・・・？」

スバルは自分の周りを見て呆然とした。

スバルは今自分の身に起こったことを必死に考える。

『俺達、あの光る扉にホープ・キーを突っ込んで、そんでもって・・・』

『扉が開いて、気が付いたら・・・』

ウォーロックの言葉をスバルは紡ぎ、再び周りを見渡す。

「スバル・・・俺も画面を通して見てるけど、そこはどつ見ても・・・」

熱斗もPET画面を通してスバルが見ている場所を見る。

「『秋原町！！？』」

そう、スバルのいる場所は熱斗の家の玄関の前、つまり、秋原町にいるのだ。

「まさか、スバル達が現実世界に来たってコトはないよな・・・？」

「た、多分違う・・・。それにこの町の雰囲気は秋原町と大分違うみたいだし・・・」

『どうやら秋原町の姿をそっくりそのままデータ化したエリアみたいだな・・・。』

すると、向こうから若い女性がスバルの前を通り過ぎようとした。

「わっ！ ヤバッ！！」

スバルは慌てて身を隠そうと辺りを見渡す。何故なら、スバルは今電波変換している状態だからだ。

現実世界ではないと分かっている状態でも、電場変換した状態で普通の人が目の前に現れたと思って慌ててしまったのだ。

「向こうの広場、公園になるのよね！ 楽しみだな」

女性は、スバルの目の前で独り言を言うと、そのままスバルには気づかず、通り過ぎていつてしまった。

「えっ……？」

「おい、今の奴、スバルに気づかなかったのか？」

スバルとウォーロックは女性の反応に驚きを通り越して啞然とする。

「もう何がなんだか分かんねえ……」

P E Tからその様子を見ていた熱斗がそう声を漏らす。

「……分かった！ ここはパストビジョンなんだ！！！」

啞然としていたスバルは、不意にオラン島での出来事を思い出し、声を張り上げた。

「えっ、パストビジョン？ 何だっけそれ？」

「ほら、前にオラン島に行った時、ブルースが話してくれたろ？」

現実世界の特定の時間や場所をまるごとデータ化し、保存しておく技術のことで、保存された現実世界は、電脳世界でそのまま再現される。

そして実用化されず、電脳世界のいたるところにパストビジョンへ通じる扉が残されてしまったらしいって……！！！」

『なるほどな……ここはそのパストビジョンの一つって訳か……』  
ウォーロックが腕を組んでスバルの説明に納得する。

「……ちょっと待てよ……このパストビジョンへの扉は、ホー  
プ・キーで開いたんだよな、  
それってつまり……」

「このエリアのどこかに最後のパーツが隠されているんだ……」  
熱斗の言葉をスバルが繋ぐ。

『よっしゃあ、スバル……俺の言うとおりに進むんだ……！』

「進むかあ（怒）……！！」  
ウォーロックの言葉をぶった切り、スバルはパストビジョンの奥  
へと進んでいった。

「フフフ……Dr. ガルナが言った通り、こんな場所が隠されて  
いたとは……」  
スバルがパストビジョンの奥へ進んだのと同時に、ファントム・  
ブラックがパストビジョンの中へと入って来た。  
たかさんのオロロンを引き連れて……。

「熱斗君、この場所ってどこ分かる？」

スバルは、今自分がある場所について熱斗に問いかける。

そこは、ピンクのリスの銅像があつて、周りには木が植えてある、公園のような場所だった。

「そこ……秋原公園だ！ そのピンクのリス、間違いないぜ！！」  
「そっか……でも、なんでリス……？」

『……このリス、侮れねえ……百戦錬磨だ……！！』  
「「なんで！！？」」

ウォーロックの謎のリスへの見解に、熱斗とスバルは同時に突っ込む。

ワン！ ワン！

「えっ、なんだ？」  
スバルが後ろを振り向くと、スバルの足元を一匹の犬が走り過ぎる。すると……、

「待つてよ、ガウ！！」  
青いバンダナを着けた小さな男の子が、ガウと呼ばれた犬を追いかけて抱き上げる。  
しかし、犬の重さに耐え切れず、男の子は草むらで尻餅をついてしまふ。

「大丈夫？」

水色のワンピースを着た、小学生位の女の子が男の子に手を差し出す。

「銀色姉ちゃん……。」  
バンダナの男の子は少し目に涙を浮かべながら、手を握る。

「熱斗、泣かないで」

そこに、バンダナの男の子によく似た、もう一人の小さな男の子がバンダナの男の子の頭に手を乗せた。

「うん、彩斗兄ちゃん!!」

三人の子供達は、目の前にいる電波人間には気が付かず、無邪気な会話をする。

それは、その子供達はパストビジョンにあるデータで、昔のことを再現しているだけだからだ。

だが、電波人間には、スバルにはそれはあまりにも異形な光景だった……。

「熱斗君!!!? 銀色さん!!!?」

スバルはパストビジョンで、過去の熱斗と銀色に出会ったのだ。

第六十四話

Akihara Town In Past (後書き)

最後ちょっとくっつけ方無理があつたかな？

次回は一体どうなるのか・・・!!？



第六十五話 VS・・・リス!!!? (前書き)

【ボツになった話】

「おい！ まさかあのリス、あの公園のリスの銅像か!？」

「でもなんで銅像が動いてるの？ しかも巨大化してるし!!!?」

『だから言っただろう!! あのリスは百戦錬磨だって!!』

熱斗、スバル、ウォーロックが互いに言い争うように話す。

そして・・・、

『出番くれ〜〜!!』

熱斗・スバル・ウォーロック

「ええええええええええええ!!!!?」

フレイム・ナイト

「これは、一体誰の叫びだったのかな・・・?」

熱斗

「当てはまる人いっぱいすぎて判んない!!」

第六十五話 VS・・・リス!!!?

「熱斗君、銀色さん!!?」

スバルは、目の前で無邪気に笑いあっている子供達に向かって叫んだ。

だが三人の子供達は、スバルの何にも気を止めず、無邪気に遊ぶばかりだった。

「オイ、ちよつとはこつち向けよ!!!」

「無駄だよ、ウォーロック。今僕達の目の前にいるのは昔のことを再現しているデータであって、本当の人間じゃないんだから・・・」

スバルはウォーロックを落ち着かせる。そして、子供達を再びまじまじと見た。

「ねえ、熱斗君、あのバンダナの男の子って・・・」

「・・・オレだよ、間違いない・・・」

熱斗は少し小さな声でスバルにそう告げた。

熱斗はスバルの目の前で遊んでいる、バンダナの男の子は自分だと断定すると、その隣にいる女の子を見た。

銀色のロングヘア、そしてエメラルドグリーンの瞳・・・。

そして「銀色姉ちゃん」と呼ばれていたこの少女は間違いなく、幼き頃の銀色だと熱斗は確信した。

「ここは過去の秋原町を再現した場所なんだよな? だったら、ど

うしてオレが銀色さんと一緒にいるんだ？ オレ、銀色さんにあつた覚えなんてないぞ！？」

熱斗は過去に、フルーラの街へ行く以前に銀色と会った覚えがなく、少し声を張り上げた。

「落ち着いてよ、熱斗君！ だとしたら、ここはパストビジョンじゃないってことなのかな？」

スバルは首を傾げる。

確かに、熱斗の言うことが真実だとしたら、ここは過去の秋原町を再現したエリア、パストビジョンでは無いという事になる。

『それと、熱斗と銀色と一緒にいるあのガキは誰なんだ？』

ウオーロックはそういうと、幼い熱斗と銀色と一緒にいる男の子を指差した。

熱斗と同じ髪の色に、銀色と同じエメラルドグリーンの瞳に、年齢以上に大人びた感じを持つ男の子、

その子は……、

「……なんだか、ロックマンに似てる……」

熱斗は男の子を見てそう呟いた。

ゴ……ゴゴッ……

『んっ』

「どうしたの、ウォーロック？」

『今、なんか石が動くみたいな音がしなかったか？』

「いや、僕は何も・・・」

スバルは首を振ってウォーロックに返事をする。

「・・・おい・・・。。。」

熱斗は、スバルとウォーロックを青ざめた顔で呼びかける。

「どうしたの、熱斗君？ そんな鳩が豆鉄砲喰らった様な顔して・・・。」

「・・・スバル、後ろ、後ろお・・・!!!？」

「後ろが何・・・。。。」

スバルは後ろを振り向いた瞬間、熱斗と同じ青ざめた顔になった。

なぜなら・・・スバルの後ろには、スバルと同じ高さのリスの銅像が立っていた(・・・)のだ。

そして次の瞬間・・・

「ええええええええええええ!!!？」

スバルは大きく悲鳴に近い声を上げると、すぐに後ろへ下がる。

そして、気づいた。リスの銅像が置いてあった台座が空っぽになっていることに。

「おい！ まさかあのリス、あの公園のリスの銅像か!？」

「でもなんで銅像が動いてるの？ しかも巨大化してるし!!!？」

『だから言っただろう!! あのリスは百戦錬磨だつて!!』  
熱斗、スバル、ウォーロックが互いに言い争うように話す。

そして……、

『オロロ~~~~ン!!』

両手を高く上げ、奇声を上げながらスバルに突っ込んできた。

「『オロロ~~~~ン!!?』」

スバルはとっさに上にジャンプしてリスの突進を交わす。

「くっ! やるしかない、熱斗君!!」

「バトルチップ・マグナム、スロットイン!!」

熱斗がバトルチップを転送すると、スバルの左腕がカーソルの付いた砲弾に形を変えた。

「当たれ!!」

スバルはカーソルの標準をリスに合わせて、砲弾を発射させた。しかし、リスは砲弾が当たる瞬間に、スバルの前から姿を消す。

「なっ! 消えた!？」

『!？ スバル、上だ!!』

ウォーロックの言葉にスバルを上を見上げる。

リスが降ってくるように、上から落ちてくるのをスバルは自分の視界に捕らえた。

「いつの間に!？」

するとリスはどこからか取り出した黒い何かを、スバル目掛けて

投げてきた。

スバルはそれを身を後ろに引くことでかわす。

「何だアイツ幽霊みたいに!!」

熱斗はリスの異様な動きに声を張り上げる。

(幽霊みたいに・・・?)

スバルは熱斗の発言が頭の中で引っかかる。

そして、自分目掛けて投げられてきた黒い物体を見ると眼を見開いた。

「・・・そっか・・・そうゆうことか・・・!!」

スバルはそう呟くとニタツと笑ってリスを見る。

「熱斗君、広範囲系の攻撃チップ持ってる?」

「? ああ、エアホイールなら持ってるけど・・・。」

熱斗はホルダーから『エアホイール』のチップを取り出す。

「よし! 熱斗君、僕アイツの正体があったかもしれない!!」

「何! それ本当か!?!」

「多分、僕が合図したらチップを転送して!!」

「分かった!!」

スバルは熱斗との会話を終えると、リスを見据えて構える。

「オイ、スバル大丈夫か?」

「ウォーロック、僕達の世界では散々バスターリング(・・・・・・・・)してきた相手なんだ、大丈夫さ!!」

シー…………ン……

スバルとリスの間に、緊迫した空気が流れる。  
そして、不意に、リスの姿が消えた。

「！ また…………！！」

「落ち着いて、熱斗君！」

スバルはそういうと目を閉じる。 数瞬後、カッと目を見開く。

「熱斗君、今だ！！」

「バトルチップ・エアホイール、スロットイン！！」

スバルは熱斗から送られてきた、巨大な扇風機の円盤を思いっきり自分の右上に投げる。

すると、円盤の向こうにリスがフツと姿を現す。

「喰らえ！！」

エアホイールはリスに当たるとその場で思いっきり回転してカマイタチで切り裂く。

『オロロ…………ン！！？』

すると、リスの銅像の後ろから黒いシルクハットを被った白い幽霊のようなものが姿を現した。

「な、幽霊！！？」

「違う、アレは電波ウィルス・オロロンだ！！」

そう、スバルの言う通り、あの幽霊こそ、リスの銅像に取り付き

スバルを襲わせたウイルス・オロロンだ。

スバルはリスの攻撃パターンと投げってきた黒い物体・黒のシルクハットを見て、オロロンの存在に気が付いたのだ。

『へっ！ 元いた世界じゃ何度もあの幽霊野郎を倒してたんだ、経験でどこに現れるか位分かるんだよ！！』

ウォーロックは熱斗に自慢するようつに話す。

オロロンがエアホイルの攻撃によってデリートされると、リスの銅像は元の形に戻り、スバルの目の前に落ちた。



第六十五話 VS・・・リス!!!? (後書き)

【ボツになった話】

シー・・・ン・・・

スバルとリスの間に、緊迫した空気が流れる。  
そして、不意に、リスの姿が消えた。

「！ また・・・!!!」

「落ち着いて、熱斗君！」

スバルはそういうと目を閉じる。 数瞬後、カッと目を見開く。

「熱斗君、今だ!!!」

「バトルチップ・ハックション!!!」

スバル

「喰らえ、ハックションって、ええ!!!?」

熱斗

「ゴメン、クシャミしちまった。」

ウォーロック

『このタイミングでかよ!!!?』

第六十六話 最近本編が短くなってきたと思う今日この頃・・・

(前書き

第六十二話で熱斗がみんなに連絡した時・・・

ミソラ

「ロールちゃん！ メールちゃんが熱斗君からの連絡で、昔の秋原エリアでファントム・ブラックが現れたって！！」

ロール

『グライド！ 昔の秋原町の電脳でファントム・ブラックが出たって！！』

グライド

『ガッツマン！ 昔の秋原町であの黒いシルクハットに仮面の怪人ナビが出現したと！！』

ガッツマン

『ブルース！ 大変でガス！！ 秋原町には昔怪人がいたんでガス！！！！』

ブルース

『それがどうしたんだ・・・？』

第六十六話 最近本編が短くなってきたと思う今日この頃……

「ゼエ、ゼエ……び、びっくりした〜。」  
スバルはその場で尻餅をついて座り込む。

『もう 動かねえよな？』  
ウォーロックは壊れたりリスの銅像を爪で小突いて確かめる。

「止めなよウォーロック、また動いたらどうす……」  
『ガッツ〜！！ どこでガスかここ！！？』

『「うわああああ！！」』  
スバルが言い終わる前に、誰かが叫ぶ声が響き渡った。  
スバル達はびっくりして叫ぶ。

『ガス〜？ どうしたんでガスか、スバル？』  
すると、そこにガッツマン、ロール、ミソラ、グライド、ブルースがやって来た。

「み、みんな……」  
『脅かすんじゃないよ……』  
スバルとウォーロックは、ホッと息を吐くとみんなの方に向かい合った。

『まさかこんなところにパストビジョンが隠されていたとは……』  
ブルースはそういうと辺りを見渡す。

「うん、だからこのエリアの何処かにパーツが隠されていると思う

んだ。」

『分かりました。』

『任せて!』

「私達も探すわ!」

『絶対あの怪人野郎より先に見つけるでガスく!!』

『先に行っているぞ。』

グライド、ロール、ミソラ、ガッツマン、ブルースはそう言つと、バラバラに分かれて行った。

「よし、僕達も行くぞ熱斗君!!」

「……………」

「どうしたの、熱斗君?」

「……オレ、パパにどうしても聞きたいことがあるんだ。」

『そんなの後で聞きゃいいじゃねえか?』

ウォーロックがパーツ探しを優先するように促す。

「いや、今どうしても聞きたいんだ!!」

熱斗はスバルとウォーロックに力強く言う。

「熱斗君……分かった、行こう!!」

『チツ、しゃあねえな……』

スバルはそう言うとプラグアウトした。

第六十六話 最近本編が短くなってきたと思う今日この頃・・・

(後書き

次回、全てはパパが知っている・・・!!!?

第六十七話 葛藤（前書き）

みんなは覚えているか！？

ネットバトル 戦歴69連勝

数々のナビを操るオペレーター ション能力を持つネットバトラー・名人  
のことを……！

そして知っているか！？

名人がネビュラと戦うため、新しく造り出したネットナビ・フット  
マンのことを……！

彼らは今……！！

第六十七話 葛藤

科学省

「名人さ〜ん！」

熱斗が書類を持ってセカセカと働く名人を、大声を上げて呼び止める。

「熱斗君、どうしたんだい？ 壊れたデータならまだ修復中だよ？」  
名人が立ち止まって、熱斗の方を向く。

「・・・名人さん、何も知らないの？」

熱斗は、旧秋原エリアやファントム・ブラックについて何も知らないのかを聞く。

「？ 何もって、何を？」

『こいつ、何も知らされてねえのか・・・？』  
ウォーロックは名人の反応に、PETの中からあきれた声を漏らす。

「ア、ハハ・・・。名人さん、パパは？」

「光博士なら自分の研究室でデータの修復をしているよ。」  
名人が熱斗の苦笑いに首を傾げながらも、熱斗の質問に答える。

「ありがとう、名人さん！」

熱斗は名人にお礼を言うと、奥へと進んでいった。

「さんはいらぬぞ〜〜！」  
そんな熱斗の背中に向かって名人はお決まりの台詞を言い放った。  
。。。。。

科学省 光博士の研究室

カチャカチャカチャ……………

部屋には光博士がパソコンのキーを叩く音とパソコンの起動音だけが聞こえる。

光博士は部屋に入ってきた熱斗に気づかず、一心不乱にパソコンの画面を食い入るように見ていた。

「……………パパ。」

熱斗は少し遠慮がちに自分の父に話しかける。

「ん？ 熱斗、どうしたんだ？」

「……………。」

呼びかけられ、パソコンから目を離し熱斗と向かい合う光博士。  
熱斗はそんな光博士を黙ったまま見ていた。

「熱斗？」

いつもとは打って変わって暗く黙り込む息子に、光博士は熱斗に歩み寄る。

「熱斗、何かあったのか？」

光博士は熱斗と同じ目線までしゃがむと、熱斗の肩に手を置いた。  
すると熱斗は光博士の目を見据え、口を開いた。

「……………パパ、銀色さんって何者なの？」



一言一言区切るように言った熱斗の言葉に、光博士は僅かにビクツと体を振るわせる。

「さつき、科学省を出た後・・・」

その後、熱斗は科学省を後にしてからこれまでの話を光博士に話した。

謎のメールに呼び出されたこと、旧秋原エリアでのこと、そこでパストビジョンと思われる謎のエリアを見つけたこと、パストビジョンで見たもの、そして、連絡したはずの銀色がその場に来なかったこと・・・。

熱斗はとにかく思い出せる限りの全てを話した・・・。

「もし、もしあの電腦世界がパストビジョンなら、オレは前に銀色さんに会ったってことだよな？」

「だけどオレ、全然覚えてなくて・・・。」

熱斗は話していくうちに段々顔色が悪くなっていく。

作った握りこぶしはワナワナと震えていた。

「熱斗、落ち着け・・・!」

そんな熱斗の肩を揺さぶり、光博士が熱斗にやさしく呼びかける。

「他にも、オレと銀色さんと一緒に遊んでいたあの男の子のことも全然覚えてなくて・・・!」

「熱斗!」

「オレ、オレ、何かとても大切なことを忘れ・・・!」

「熱斗!!!」

光博士がとうとう大声を張り上げて熱斗に呼びかける。

熱斗は光博士の声が届いたのか、ハツとした顔になり、顔からは汗

が吹き出している。

「・・・パパ、オレ、本当に何か大切なことを忘れてしまっているみたいで・・・怖いんだ。」

熱斗は今にも泣き出しそうな顔で、光博士に訴えるように話す。光博士はそんな熱斗を見ると、顔を伏せた。しかし直ぐに顔を上げ、静かに口を開いた。

「・・・銀色ちゃんは、昔秋原町に住んでいたんだ。」

「えっ!?」

光博士の告白に、熱斗とPETに入っていたスバルとウォーロックが驚いて声を上げる。

「熱斗、銀色ちゃんは・・・」

PPP!! PPP!!

そこに、タイミングを計っていたかのように熱斗のPETからオート電話がかかる。

「!? なんだこんな時に・・・!」

「熱斗君、ミソラちゃんからだ! もしかしたらパーツが見つかったのかも!」

熱斗は話を邪魔されたことに不愉快な気持ちになるが、スバルの推測に無視できないと考えた。

「熱斗、もしそうだとしたら大変だ、電話にでなさい。」

光博士も熱斗に電話に出るように指示する。

熱斗は渋々ホルダーからPETを取り出すと、電話を繋げた。

「スバル君！？ お願いすぐに助けに来て！！」

開口一番、電話が繋がった事が分かったミソラが悲鳴に近い声で叫んだ。

「助けてって・・・何があったの!？」

「ファントム・ブラックが現れて、みんなの攻・・・げ・・・な・・・さ・・・れて・・・。」

「? どうしたのミソラちゃん！ 全然通じないよ!!」

スバルはとにかく大声で叫んでミソラに呼びかける。

「ス・・・バル・・・く・・・。」

プツッ!!・・・。そこまででミソラとの通信が切れた。

後に残るのは何が起きているのか判らず、呆然と立ち尽くすスバル達だった。

「・・・ハッ！ スバル、ボーっとしてる場合じゃない！ 早く戻らないと、みんなが危ない!!」

熱斗はミソラとの通信の内容から仲間達全員の危機を感じ取り、研究室から出ようとする。

「熱斗!!」

そんな熱斗を光博士が呼び止める。

数瞬の間、熱斗と光博士は互いに向かい合う。

「・・・行ってくるぜ、パパ!!」

「・・・コクッ!!」

光博士は無言で頷く。そして、熱斗は再び急秋原エリアにプラ

ゲインする。

「プラグイン！！ シューティング・スターロックマン、トランス  
ミッション！！！」

第六十七話 葛藤（後書き）

ネビュラ隊員達

「……………ゴクッ」

ネビュラ隊員達の視線の先には、『名人&フットマンの玩具屋さん』と『本日限り、プラモデル半額』と言う看板が掛けられた店があった。

リーガル

「……………それで、我が組織の活動資金を全てプラモデル代に注ぎ込んだと……………」

ネビュラ隊員達

「ハ、ハッ！ 誠に申し訳……………」

リーガル

「で、私の分はあるのか？」

Dr.ガルナ

「リーガル様！！？」

ネビュラ隊員達

「やるんすか！！？」

第六十八話 ガウ（前書き）

名人

「熱斗君！ 新しいナビカスタマイザーのプログラムがあるんだけど、

見ていかないか？」

熱斗

「マジ！？ 見る見る！！」

名人

「フッフ、これが新しいプログラムだ！！」

名人が指したプログラム、それには、『ホープ・キー最後のパー  
ツ』と書かれていた。

熱斗

「・・・・・・・・。」

名人

「どうしたんだ、熱斗君？ 顔が青いよ？」

## 第六十八話　　ガウ

「みんな！　どこにいるのー！ー！！」

『返事しろー！ー！！』

旧秋原エリアの謎の空間、ミソラからの連絡で急いでこのエリアに戻ってきたスバルとウォーロックは声を張り上げて叫ぶ。

「みんな、どこ行っただろう？」

『オイ、熱斗！　本当に誰とも連絡つかないのか？』

「ああ、メールちゃんとも炎山とも、誰とも連絡がつかないんだ。」

熱斗はP E Tを操作しながらウォーロックに返事をする。　P E

T画面にはザーザーとノイズが走っている。

妨害電波が出ているのかもしれない。

「・・・とにかく、みんなを探し・・・！！？」

スバルは最後まで話さず、顔を強張らせてエリアの奥を見た。

「どうした、スバル？」

熱斗がスバルに呼びかける。

「今の、まさか・・・！！？」

スバルはそういうと駆け出す。

『オ、オイ！　スバル、どうしたんだ！？』

「今、向こうのほうに人影が・・・！　あの人影はもしかして・・・！！」

『クツ……!』

「こんなことって……!」

ブルースとミソラが肩で息をして、相手を睨み付ける。

「ソフフ……。どうだすごかろう？　これが闇の力だ!!!」

ファントム・ブラックが漆黒のマントを翻し、ブルースとミソラに、自分の持っていたステッキを向けた。

「……………」

スバルは自分の前方を静かに見据えている。

ここは先程、スバルがオロロンと戦った公園。そこでは、リスの銅像が壊れていること以外は変わりなく、子供達が同じ事を繰り返していた。

そう、子供達だけは……………。

「……………ロックマン!」

熱斗は、スバルの目の前にいる人物・ダークロックマンの名を呼んだ。

『星河　スバル　ウォーロック　光熱斗……。』  
ダークロックマンもスバルを見据える。



「ロックマン、どうしてここに!？」

「オイ! 俺達の仲間をどうしやがった!！」

スバルとウォーロックがダークロックマンに問いかける。

「君達の仲間は今、このエリアのどこかでファントム・ブラックと戦っている。そして僕は・・・」

言葉を途切れさせると、ダークロックマンは自分の足元を見た。

スバルもそれにつられてダークロックマンの足元を見る。

そこには、子供達とじゃれあっている筈の犬が、ダークロックマンの足に擦り寄っていた。

「その犬は!？」

「この犬はこのパストビジョンの住人じゃない。」

スバルが驚くにも係わらず、ダークロックマンは淡々とした口調で言った。

「・・・やっぱりここはパストビジョンだったのか・・・。」

ウォーロックが呟く様に言う。

スバル達も最初ここはパストビジョンではないかと推測はした。

しかし、このエリアで出くわした幼き熱斗と銀色と思われる存在にその推測を否定した。

熱斗には幼き頃、銀色と出会った記憶がなかったからだ。

パストビジョンは過去の出来事を再現するエリア。過去にそのようないないのでは、ここはパストビジョンではないということになる。

(ここがパストビジョン? じゃあ、やっぱり俺は前に銀色さんと

会ったことが・・・？)

熱斗はスバル達との会話から、そう考える。だがどうしても銀色と会った記憶が思い出せない。

『久しぶりだね、ガウ・・・。』

「クウーン」

ダークロックマンが犬の名をガウと呼び、頭を撫でる。ガウは甘えた声を出すと、ますますダークロックマンの足に擦り寄ってくる。

『このガウこそ、このパストビジョンに隠されたデータ・・・。』

ダークロックマンはガウの頭を撫でるのを止めるとスバルの方に目をやった。

『・・・ホープ・キー、最後のパーツそのものだ。』

第六十八話 ガウ（後書き）

ネビュラにプラモデルを買わせ、活動の妨害をし、さらに熱斗達にホープ・キー最後のパーツを見つけさせる。

熱斗

「あれ、見つけたって言うのか？」

スバル

「さあ……。」

本編にこそでず、影から暗躍せし者、それが名人……！！

Dr・リーガル

「……という夢を見たので、即刻名人を抹殺しろ！！」

Dr・ガルナ

「夢落ち……！！!?」

フレイム・ナイト

「お後がよろしいようです」

名人 実は影で暗躍するより、本編でバトルしたいと思っている。

第六十九話 VS ファントム・ブラック!!! (前書き)

デカオ・ガッツマン

「……………(泣き)。」

スバル

「どうしたの、二人とも？」

熱斗

「自分達が全然出番無いのに、ブルースが今回出てるのに落ち込んでいるんだよ。」

炎山

「……………。」

ブルース

「も、申し訳ありません！ 炎山様!!!」

ウォーロック

「おまえもかよ!!!?」

第六十九話 VS ファントム・ブラック!!!

「その犬が・・・!?!」

『最後のパーツ!?!?』

スバルとウォーロックは驚きを隠せず、思わず声を張り上げる。

『そう、このガウこそが、ホープ・キー最後のパーツ・・・。』

ダークロックマンはそう言うと、ガウを抱き上げた。

抱き上げられたガウは目を細め、尻尾を小さく振る。

『ガウは僕が貰う!!』

「クツ、そうはさせない!!」

スバルはそう言い終わらない内にダークロックマンに向かって駆ける。

しかし、

ドゴオン!!!

「『『『・・・!!?!?』』』」

いきなりの轟音にその場にいた全員が音がした方を向く。

そこには、大量に崩れた瓦礫が地面に散らばっていて、土煙が上がっている。

「なんだ!?! 何があつたんだ!?!」

『何かが戦っているのか!?!?』

「アレは・・・!!?!?」

熱斗とウォーロックが驚く中、スバルは土煙の中から倒れている人影を見つける。

スバルはダークロックマンから視線を外し、倒れている人物に駆け寄る。

「ブルース!!!」

スバルは倒れている人物、ブルースに向かって叫ぶ。

『・・・スバルか?』

ブルースは全身傷だらけで、立ち上がるのがやっとという感じだった。

スバルはそんなブルースに肩を貸して立ち上がらせる。

「ブルース! どうしたんだその怪我!？」

熱斗がブルースに話しかける。その声には僅かながらの焦りを感じられた。

あのブルースを一体誰が!?・・・と。

「ソフソフ・・・。また会ったな、星河 スバル!」

スバルは反射的に声のした方を向く。

瓦礫が崩れたことに湧き上がる土煙の中から、黒いマントに身を包んだ紳士的な格好をした人物、ファントム・ブラックが現れた。

「ファントム・ブラック!」

『テメエの仕業か!』

ウォーロックは実体化すると、ファントム・ブラックから守るようにスバルとブルースの前に立つ。

「ファントム・ブラック、みんなをどうした!？」

『落ち着けスバル・・・オレ以外はプラグアウトして、全員無事だ・

「……」

ブルースがスバルに全員の無事を伝える。  
だがその時、ファントム・ブラックが卑しい声で笑い出した。

「ンフフ……。失礼、しかしそのナビも馬鹿な奴だ。ハーブ・ノートを庇って攻撃なんぞ受けていなければ、もうすこしまともな戦いが出来ただろうに……。」

「ミソラちゃん!?!?」

「お前達の中で一番冷静な判断が出来る奴だと思っていたが、私の間違いだったようだ。」

ファントム・ブラックは首をヤレヤレと振る。

「グツ! ブルースの、仲間を思う気持ちを馬鹿にするな!?!」

「バトルチップ・センシャホウ、スロットイン!?!」

スバルが叫ぶのと同時に熱斗がバトルチップをPETに転送する。PETがバトルチップのデータを読み込むと、スバルの左腕が巨大な砲弾に変わる。

『待て! そいつは……。!?!』

「シユート!?!」

ブルースが静止する前に、スバルはセンシャホウをファントム・ブラックに向けて放つ。  
しかし、

バシユン!!

「『』!?!?!?!」

砲弾はファントム・ブラックに当たる瞬間、自ら（・・・）ファントム・ブラックを避けているかのように軌道を反らし、全然見当違いのところに向かってしまった。

『なんだ今の！？』

「まるで、弾が自分からファントム・ブラックを避けた様な・・・？」

ウォーロックと熱斗が驚いて反れた弾丸を見た。

『無駄だ・・・！ どんなキャノン系のバトルチップを使っても、今のように弾が反れて奴に当たらない・・・！！』

『先に言えよ！！ そーゆう大事なことは！！！！』

『言う前に撃つたんだろうが！！！！』

ブルースに文句を言ったウォーロックがブルースに反論される。

「だったら接近戦に持ち込んでやる！ バトルチップ・ワイドブレード、スロットイン！！」

熱斗がバトルチップを転送する。

スバルの腕が砲弾から黄緑色の光を帯びた横幅の広い剣に変わる。

「ウォーロック！！」

『おうよ！！！！』

スバルはウォーロックアタックを使い、ファントム・ブラックとの距離を一瞬で縮める。

そして剣を振り被った瞬間、ふと疑問に思った。



”何故ブルースはあんなにボロボロなのか？”と。

ブルースはソード系の攻撃による接近戦を最も得意とするナビだ、今の自分と同じようにファントム・ブラックに斬りかかったはずだ。なのにあんなにボロボロだった。

つまり……………。

「！しまっ……………！」

スバルは慌てて足でブレーキを掛けて攻撃をとめようとす。でも時すでに遅し……………。

ファントム・ブラックの不敵な笑みを見たスバルは一瞬、意識が途切れる。

『スバル……………！！！！』

ブルースの声は、スバルには届かなかった……………。

第六十九話 VS ファントム・ブラック!!! (後書き)

じ、次回！ スバルの運命は……!!!？

第七十話 共鳴（前書き）

フレイム・ナイト

「フウ、遂に七十話突破か……。長かったな。」

熱斗

「そうだな……。何だかんだで一年以上経つんだよな。」

フレイム・ナイト

「忙しくなる前に、そろそろ最終戦に登場させるキャラ達を呼び出しておくか。」

スバル

「……。さ、作者？　なんで黒いローブ羽織ってるの？」

フレイム・ナイト

「……。フツ、決まってるじゃないか……。？」

熱斗・スバル

「ま、まさか……。!!!？」



『しかし、ここはどこだ？』  
ウォーロックが目の中の空間を切り裂くかの様に腕を振る。

「まるで宇宙の中にいるみたいだ……。」  
スバルは、上も下も、まして右や左も分からない空間をそう表して言う。

「ソフフ……。そう、ここは闇宇宙……。」

「『……!?!?』」

スバルとウォーロックは声のした方を見る。  
そこには、嘲笑うかの様な目でスバルを見る紳士の姿　ファントム・ブラックが立っていた。

「ファントム・ブラック……!」

『オイ、ここは一体どこなんだ!?!』

ウォーロックがファントム・ブラックに向かって叫ぶ。

「ソフフ……。今言った通りさ、ここは闇宇宙。ネビュラの闇の力によって生み出されし空間だ……。」

「闇の力によって、生まれた空間……!?!?」

驚くスバルに構わず、ファントム・ブラックは持っていたステッキの先端を自分の頭上に向ける。

「終わりだ、星河 スバル・・・!!」  
ファントム・ブラックがスバルに向かってステッキを振り下ろす。すると、スバルの遙か頭上から白い光球が降り注いで来た。

「なっ・・・!?!」

「避ける! スバル!!」

ウォーロックアーマーに変形しているウォーロックが、スバルを引っ張る。

だがスバルは、ファントム・ブラックが繰り出してきた技に驚いていた。

(これは、メテオライトバレッジ!?!?)

スバルは自分を襲った技が、自分がかつて、ノイズチェンジの時に使っていた技だと知り、驚愕する。

「逃すか!」

ファントム・ブラックがさらに、ステッキを真横に振る。  
ステッキが振り終わった瞬間、今度はスバルの身長より遙かに二倍を超す、巨大な津波が出現した。

「!?! この技は・・・!?!?!」

「ダイナミックウェーブ!!!」

津波は、スバルとウォーロックが逃げる余裕を与える間無く、二人を飲み込んだ。

「んっフ・・・。自分の技にやられる気分はどうだ!? クククッ、アーハッハッハ!!!!!!!」

闇宇宙の中、ファントム・ブラックの笑い声だけが響いた・・・。

『スバル！ しっかりしろ、スバル！！』

「どうしたんだよスバル！？ 目を覚ましてくれよ！！！」

ブルースと熱斗が、仰向けに倒れているスバルに（・・・）呼びかける。

だがその目は虚ろで、何も見ていない。ウォーロックアーマーの目に当たる部分も同じ感じだ、機能が停止してしまっているかのようには光が無い。

「クツソ〜！ 一体どうなっちまってんだ！？ ファントム・ブラックまで黙り告っちまうし・・・！！！」

熱斗はそう言うと、ファントム・ブラックを見た。

ファントム・ブラックも、スバルの様に倒れているのではないが、スバルやウォーロックと同じく、虚ろな目でその場に突っ立っていた。

『・・・オレの時も同じだった。 オレも奴に斬りかかり、そこで意識が途切れた。』

気が付くとオレは、ボロボロになってスバルに支え起こされていた・・・。

ブルースが淡々と自分とファントム・ブラックとの戦闘を語る。

「炎山達と、連絡は・・・？」

「駄目だ、通信機能がイカレテしまって、炎山様と連絡が取れない・・・」

ブルースはそう言うと奥歯を噛み締めた。

今現在、この電腦世界では妨害電波らしきモノが発生していて、PET同士の通信は不可能。

かろうじてネットナビとオペレーターとの通信は出来るのだが・・・。

スバルは原因不明の状態異状で意識不明、ブルースの通信機能も壊れてしまい、ブルースを通しての炎山や仲間達との通信も封じられてしまった。

「どうすれば・・・。。。」

熱斗はPETを強く握り締める。

キイイン・・・・・・・・

「。。。！！？」

不意に、不思議な金属音が電腦世界に響いた。

そしてその瞬間、熱斗のPETと、ダークロックマンのナビマークから、淡い光が出始めた。

「ホープ・キー!？」

『オラシオン・ロック!』

熱斗はPETに保存していたホープ・キーを、ダークロックマン



はナビマークの中に収納していたオラシオン・ロックを見る。キーとロックはまるで互いの存在を感じ取り、呼び合っているかの様に光を発している。

『！ 光が段々強くなっている！！？』

ブルースはそう言うと、手で光を遮る。

最初、淡い光を発していたキーとロックは、今は目が眩むかの様な光で輝いている。

そして、次の瞬間……。 周りが見えなくなる程の強い光が電腦世界を包み込んだ。

熱斗は目を覆っていた手を下ろし、ゆっくりと目を開いた。

白い光に満たされた空間。 光には微かに濃淡があり、不規則に揺らいでいる。

熱斗は気が付くと、その光の空間の中に立っていた。

『……またココに来るなんて……。』

不意に、熱斗の後ろから誰かの呟く声がした。

熱斗が振り向くと、そこには熱斗とは別の方向を向いて、光の空間を見ている人物、ダークロックマンが立っていた。

「……ッ!？」

熱斗はダークロックマンに話しかけようとしたが、その顔を見た瞬間、恐怖で一歩ダークロックマンから後ずさった。ダークロックマンのその表情、一見無表情に見えるが、その目は怒りに燃え、全身から殺気が漏れ出している。

「やっと会えたね……。」  
その時だった。落ち着いた声が熱斗とダークロックマンに語りかけてきたのは。

『僕は会いたくなかった……。』  
ダークロックマンはそう言つと声のした方を向いた。

『……イキシアー!!』

そこには、熱斗が今まで夢の中で会ってきた謎の少年が、悲しい微笑みで立っていた。

第七十話 共鳴（後書き）

フレイム・ナイト

「エロイム・エッサイム、エロイム・エッサイム……我は求め訴えたり!!」

スバル

「マ、マズイ！ また作者が黒魔術に手を染め出しちゃったよ!!」

熱斗

「ロックマンエグゼ　～願いが希望に変わるとき～ 黒魔術師フレイム・ナイト暴走食い止め隊出動!!」

スバル

「長ッ！ ってゆうかそんなのあったの!!?」

フレイム・ナイト

「出でよ！ 黒魔術師フレイム・ナイト暴走食い止め隊!!」

熱斗

「えっ~~~~~!!?」

スバル

「作者が呼んじゃった~~~~~!!」

第七十一話 イキシア（前書き）

イキシア

花言葉は、『誇り高い 秘めた恋 団結して当たろっ』

## 第七十一話 イキシア

「イキ・・・シア!？」

熱斗は無意識にダークロックマンの言葉を繰り返す。

そんな熱斗を気にせず、ダークロックマンと『イキシア』と呼ばれた謎の少年は互いを見る。

だが、ダークロックマンに至っては睨み付けているというのが正確かもしれない。

何度も熱斗の夢に現れては、意味深な言葉を残して消えていった謎の少年。

最初は小さな子供として現れ、次に出会った時には熱斗と同じくらいの年の少年に変貌を遂げていた。

全てが謎に包まれていた少年とダークロックマンには因縁がある。

熱斗には一体何がどうなっているのか分からず、二人のこれからのやり取りを見守るしかなかった。

「・・・熱斗君達がパーツを集め、ホープ・キーを完成に近付ける度に、クロス・マジシャンの力を発動させる度に、僕は少しずつ、自分が何者なのか判ってきた・・・。」

「ダークロックマンは何も言わない。ただ『イキシア』と呼ばれ

た少年を睨み付ける。

イキシアは構わず話し続ける。

「……そして、あの時、銀色の願いが聞こえた時……」

その時、初めて、ダークロックマンの心に揺さ振りがかかった。目を驚きで見開き、拳を強く握り締める。

驚きという点では熱斗もダークロックマンと同じだった。

(銀色!? どうしてここで銀色さんの名前が!? この三人って一体……!?)

熱斗は訳が分からず、気が遠のいてしまいそうになった。

「僕は断片的にだけど……」

イキシアがそこまで言った時、ダークロックマンが動いた。

「僕達の記憶を取り戻した。」

ダークロックマンがイキシアの首元にロックバスター押し付けたのと、イキシアが話し終えたのは、ほぼ同時だった。

「なっ……!?!」

「……」

熱斗はダークロックマンの突然の行動に驚くが、イキシアは何の

素振りも見せず、ダークロックマンを見る。

『それ以上言うな!!』

ダークロックマンがイキシアに向かって叫ぶ。

「心配しなくて良いよ。僕もこれ以上話す気はない。」

イキシアは自分が置かれている状況を気にせず、落ち着いた声で話す。

『だったら、どうして今になって……、僕と光熱斗の前に現れた!!?!』

「……時間が近づいているから、そして……。」  
イキシアはそこまで言うのと熱斗を見る。

「僕は熱斗君の味方だから……。」  
その瞬間、眩い光が全てを見えなくした。

---

闇宇宙

---

上も下も分らない空間、だが今は、先程の『ダイナミックウェーブ』によって出現した水が溜まって湖が出来ており、闇宇宙の『地』と現せる場所を満たしている。

そして、静まり返った湖を見下ろす、薄笑いを浮かべる人物が一人。

「ソフフ……。素晴らしい、あの星河 スバルをいとも容易く……。」

そうゆうファントム・ブラックの声は震えている。よく見ると

声だけでなく、自分の得た力を実感し、全身が小刻みに震えている。

「さらばだ!! 星河 スバル!!!!」

ファントム・ブラックはマントを翻し、後ろを向く。

・・・ドクン!

その時だった。静かだった水が波打ち、湖に小さな波紋が生まれたのは・・・。

コポポツ・・・。

そしてさらに、波紋が生まれた場所から、水の泡立つ音が聞こえる。

「・・・!?!」

その音が聞こえたファントム・ブラックは慌てて振り返り、ステッキを構える。

スバルが息を吹き返したと思って。だが、いくら経っても何かが湖から浮き出る気配はない。



「・・・気のせいかな。」  
ファントム・ブラックは構えていたステッキを下ろし、再びその場を去ろうとする。

ゴポポツ・・・!!

その直後、さらに大きく、はつきりとした水の泡立つ音が、ファントム・ブラックの耳に聞こえた。

「これは・・・!?!」

ファントム・ブラックは驚愕し、そして理解した。

湖の底には赤く光る物体が見え、その物体はどんどん大きくなっていく。  
物体が大きくなるに連れ、水の泡立ちはさらに激しいものへとなっていく。

(これは、誰かが水中で息を吹き返したのではない!)

ザザア・・・!

水面が盛り上がる。

(水中で燃える何かが、水を沸騰させているんだ・・・!!)

バツシャーン！！！！

現れたのは、赤々と燃え上がる鳥だった。鳥は、空中で一回転すると、ファントム・ブラックと同じ高さの空中で止まる。否、鳥と見えたのは現れた一瞬だけ。

その真の姿は………、

赤い翼を広げた少年、星河 スバルであった。

スバルは、炎のように赤い衣を身に纏い、両腕には籠手のような赤いアーマーを身に付けている。

何より一番の特徴はその翼だった。

背中から生える紅蓮の炎の翼は見る者を魅了する美しさがある。

「『クロスマジシャン、Ver・スザクマジシャン！！！！』」

「ほ、星河 スバル……！？」

ファントム・ブラックは、スバルの発する威圧感に押され、閻宇宙に小さな光の亀裂が入ったことに気付かない。

スバルの口が開く。

「ファントム・ブラック、お前のシナリオは……、」  
空間の亀裂が広がる。

「お前の敗北でファイナーレだ!!!」  
その瞬間、亀裂の入った闇宇宙の空間は砕け散る。  
眩い光が全てを見えなくした。

第七十一話 イキシア（後書き）

フレイム・ナイト

「遂にクロスマジシャンの変身も五つに・・・!!」

熱斗

「第五の変身、スザクマジシャン！ 一体どんな能力が!!?」

第七十二話 繋がる疑惑(前書き)

ファントム・ブラック

「許さん！ 許さんぞ、貴様らあゝゝ！！！」

熱斗

「お、オイ！ なんかアイツやばくないか！？」

スバル

「ま、まさか・・・！？」

流星のロックマン3 ファントム・ブラックSPのバトルカード

暗号コード カツパ34080

ウオーロック

「か、カツパだからか・・・！！！？」

ファントム・ブラック

「ぬおおおおおおおおお！！！」



四人を現実へと引き戻したのは、ガウの鳴き声と、ブルースの声だった。

『・・・ガウ。』

ダークロックマンは、悪い夢から覚めたかのように安堵の息を漏らす。

「ここは、科学省？ 戻ったのか？」

現実世界・科学省では、熱斗が辺りをキョロキョロ見渡し、自分の居る場所を確認する。

「ここって、僕達は・・・！？」

『ヘッ！ どうやらあの闇宇宙つてのを抜け出したらしげ、スバル。』

ウォーロックは自分達が元の世界に戻れたと分かるとファントム・ブラックを見る。

スバルに自分の力を破られたからか、ファントム・ブラックはステッキを支えに前に膝を付き、苦しそくに胸を押さえ込んでいる。

「ハア、ハア、ハア・・・。バ、バカな！？ あんな方法で私の幻覚を・・・。何なんだその姿は！！？」

ファントム・ブラックはスバルに怒鳴り散らす。

スバルは自分の姿を見る。スバルは闇宇宙の空間を破った姿のまま、Ver・スザクマジシャンの姿で立っている。

だがスバルはそれよりもファントム・ブラックの言った言葉が気になっっていた。

(幻覚？ 僕とウォーロックは、幻覚を見せられていただけ！？)

「スバル！」

不意に、熱斗がスバルに呼びかけた。

「スバル！ 気が付いたんだな、良かった・・・って、どうしたんだよその姿！！？」

ホツとしたり驚いたり、熱斗の表情と口調はコロコロと変化する。

『やかましい！ これは、あれだ、根性でこつなつた。』  
「なるほど。」

ウォーロックの、めんどくさくて省きに省きたい加減な説明に熱斗は納得する。

「ちっがーーーーー！！！！ 熱斗君も納得しないでよ！

！！！！」

スバルは、熱斗とブルースに何が起こったかを説明する。

「・・・と言う訳で、大波に飲まれて水の中に沈んだら、突然光が僕の体を包んで、この姿になったんだ。」

スバルの説明に、熱斗とブルースがウーム・・・と黙り込む。

(凄い光で周りが見えなくなつたと思つたら元の世界に戻つた？

俺の時とまったく同じじゃないか、これって偶然の一致なのかな・・・

・？)

(ナイトマジシャン、サンシャインマジシャン、そして今回のスザ



クマジシャン……。

だんだん状況に合わせた変身が出来るようになってきている気がするの  
は、偶然の一致なのか……？)

「あの、二人とも？」

『オイ、どうした？ 返事しろ。』

黙りこくってしまった熱斗とブルースにスバルとウォーロックが  
声をかける。

だが熱斗とブルースが返事をする前に、

「キサマらぁ……許さん!!」

ファントム・ブラックが獣の唸りに近い叫び声を上げる。

夜叉……。

今のファントム・ブラックを現すならそんな感じだ。

「な、何だ!? アイツすっごいやバクになってないか!!?」

熱斗の言った通り、ファントム・ブラックは鬼気迫る迫力でこち  
らを睨み付けている。

ファントム・ブラックの頭の中では、今までの忌わしい記憶が駆  
け巡っていった。

ノイズチェンジの力を求め、スバルに敗れるファントム・ブ  
ラック……。

その後、Dr・ガルナに助けられるが、どうしてこうなっ

てしまった？

ムーの力を手に入れたスバルに負けてしまったからだ。

そう、ファントム・ブラックの歪んだ脚本が狂ったキツカケ、

制御不能のはずの未知の力を目の前でスバルが使いこなしたのが始まりだ。

そして今、ファントム・ブラックの目の前には、そのムーの力と同じ未知の力を持ったスバルが目の前に立っている。

自身で気が付いているのか？

ファントム・ブラックは、自分の落ちぶれた人生の始まりのキツカケを作った、未知の力を持ったスバルに恐怖していた。

545

「負けん・・・、負けてたまるかあああああつ！！！！」

ファントム・ブラックの絶叫に電脳世界が震える。ファントム・ブラックがマントを広げた。

「ファントムスラッシュ！！」

ファントム・ブラックのマントから発せられた風がカマイタチの様にスバルを襲う。

（！？ 以前より威力が上がっている！！）

「バトルチップ・アイフォーム、スロットイン！！」

『斬！！』

バトルチップを転送する声が聞こえた瞬間、スバルの目の前でフ  
アントムスラッシュがソードの一閃によって掻き消された。

スバルは一瞬、熱斗がスロットインしたのかと思ったが、声が違っ  
ていた。その声の主は……、

「炎山!!」

「ようやく通信が回復したか……。」

炎山は呟く様に話す。

「よー、熱斗!!」

「あんた達遅いのよ、何やってたのよ!!」

「……。……。……。」

すると、熱斗のPETから一斉に、デカオ、やいと、そして顔を  
赤くして黙り込むメールから通信がかかって来た。

「みんな! やつと通信が回復したんだ!!」

「来るんなら早く来いよな、お前ら!!」

熱斗とウォーロックの返答。 スバルはウォーロックの返答に  
苦笑いをする。

「炎山様。」

スバルの前に立っていたブルースが炎山に呼びかける。 さっき、  
スバルの前に現れてフアントムスラッシュを斬ったのはブルースだ  
つたのだ。

「ブルース、無事だったか。」

そう話す炎山の声には、ブルースの無事に少しホッとした感じ

があった。

「……ところで、熱斗、スバル、一体何がどうなってんだこの状況？」

「ちゃんと説明してよね！」

不意に、デカオとやいとが最もな意見を言う。

確かに、今旧秋原エリアに居るのは、ボロボロのブルースに新たなクロスマジシャンに変身しているスバル、ダークロックマンに夜叉のような気迫を持つファントム・ブラック……。異常と言わずにはいられない状況だった。

「え〜つと……。これは……。」

熱斗は今までの出来事を、スバルとブルースと一緒にかいつまんで説明する。

「お、オイオイ、それって妖術使いじゃねえか!？」

『んな訳ねえだろ、ビクビクすんな!!』

ファントム・ブラックの不思議な力を聞いてオドオドするデカオにウォーロックが吼える。

「でもよお、相手はキャノン系の攻撃を有り得ない動きで避けたり、幻覚を見せる怪人だぜ? どうすんだよ!？」

「落ち着け! この世に妖術なんてあつてたまるか!！」

「そうよ! 飛行機だつて空を飛んでいるんだから。」

今度は炎山とやいとがデカオに言う。

「オレはあの鉄の塊が空を飛ぶのだって信じられないんだよ！」  
「何言ってるのよ！ 飛行機だって、航空力学に基づいてちゃんと浮力を得るように設計されているのよ！」  
デカオとやいとの違い争い。それを聞いて表情を変えたのはスバルだった。

「やいとちゃん……。今、なんて言った？」  
スバルがやいとに尋ねる。

「えっ？ 飛行機だって空を飛んでいるんだから？」

「もつと後、なんで飛行機は空を飛ぶの？」

「それは、航空力学に基づいてちゃんと浮力を得るように設計されているから……」

「……それだあ！！！」

突然、スバルがやいとを指差して叫んだ。

『うおっ！？ どうしたスバル！？ 何がそれなんだ？』

ウォーロックがスバルが突然叫んだことに驚く。

「分かったんだ！ ファントム・ブラックの力の正体が……！」

「……ええ！？」「……」

「空気だよ！ ファントム・ブラックは飛行機の翼のように、空気の流れを自在に操っていたんだよ……！」

スバルは若干興奮気味に話す。

「！ なるほど、それでセンシャハウがあんな妙な動きを……。」

「うん！ これなら説明が付くよね！」  
スバルの説明に、炎山だけは理解出来たようで、二人だけで盛り上がる。

「お、オイ、スバル！ どうゆうことだよ、ちゃんと説明してくれ！」  
よく分かってない組を代表して熱斗がスバルに聞く。

「ファントム・ブラックは自分の身の周りの空気の流れを変える、つまり気流を変化させることによって見えない空気の壁を造つていたんだ。」  
それでセンシャホウは気流に乗せて受け流されていたんだ、だからあんな変な動きになっていたんだよ！」

「そ、そうなのか・・・？」  
熱斗は理解したんだかしてないんだか曖昧な返事をする。  
ちなみにそれはデカオもだった。

『ってことは、俺達が閉じ込められていたあの空間も、空気が原因なのか？』  
ウォーロックがスバルに聞く。

「ファントム・ブラックは幻覚を見せていたって言うだけ・・・。」  
「だとすると、気圧の変化が原因だろうな。」  
不意に、スバルの言葉を炎山が繋ぐ。

「気圧？」

「山等の高いところになると、耳鳴りや頭が痛くなるということが

あるだろ？」

「そっか……。ファントム・ブラックは気流や気圧を操って、スバル君とウォーロックに目眩や頭痛を起こさせて幻覚を見せていたんだ。」

メールが結論を出す。

「なるほどな！ 分かったよメールちゃん！」

「きゃあああああああ！！！」

熱斗がメールに話しかけた途端、メールは悲鳴と共にPET画面の外に消えた……。

「メ、メールちゃん……？」

「……熱斗君、とりあえずメールちゃんのことはい置いて、ファントム・ブラックを倒さない！」

スバルはそう言うと、ファントム・ブラックの方に視線を変えた。ファントム・ブラックは、先程と変わらず夜叉のような鬼気迫る気迫でこちらを睨み付けていた。

今まで攻撃して来なかったのは、スバルのクロスマジシャンの能力の警戒とPET同士の通信が回復したことに気が付いたからだろう。

「でもよ、スバル。能力の秘密は分かったけど、どうやって倒せばいいんだ？」

「大丈夫。ファントム・ブラックがどうしてこんな能力を手に入れたか分からないけど、攻略法を見つけたんだ。」

そう言うスバルの赤き翼からは紅蓮のオーラと共に、炎が滲み出ていた。





第七十二話 繋がる疑惑（後書き）

熱斗

「次回、とうとうスザクマジシャンの能力が明らかになる!!」

ダークロックマン

「そして、物語はラストバトルへ・・・!!」

第七十三話 砕け散れ！ 狂気のシナリオ！！（前書き）

今回、色々展開速くて目が回っちゃいました。

グールグール（@|@）%

第七十三話 砕け散れ！ 狂気のシナリオ！！

スバルの赤き翼から紅蓮の炎がこぼれ出る。

「スバル？」

熱斗はスバル意図が分からず、思わずその名を呼ぶ。

「クッ……。何をしようとも、私に貴様の攻撃は届かん！ さ  
っきのように私の幻覚を破れると思うなよ！！」  
ファントム・ブラックがスバルに向かって叫ぶ。

(確かに今の状況、あまり良いとは思えない……。)

炎山は心の中で今の状況を整理する。

現在、旧秋原エリアにはスバルとブルース、ファントム・ブラック、  
ダークロックマンの四人。

ダークロックマンは戦いに参加する気はなく、ただ傍観するのみ。

ブルースは先程の戦闘でボロボロ、もう戦う力は残っていない。

実質、敵も味方も闘える要員は一人ずつ、スバルとファントム・ブ  
ラックの二人だけだ。

さらに、ファントム・ブラックは気流と気圧を制御・変化させる能  
力によって、遠距離からの攻撃を気流に乗せて反らし、近距離から  
の攻撃のために近づいて来た敵には気圧の変化によって幻覚を見せ  
る。

正にファントム

何者も寄せ付けなない亡霊のようだ。

正直、どう戦えばいいのか分からない相手だ。

『なんか策があるのか、スバル？』

ウォーロックもみんなと同様にスバルの意図が分からず、スバルに質問する。

だがその口調からは緊張感がまるでない。

長年のパートナーだからこそ、その行動の意図が分からなくても、信じられる策があると思っっているからだろう。

「うん。ファントム・ブラックは気流と気圧を操ってるって分かっただろう？ 気流や気圧って言うのは、空気がある場所にしかなくて、空気って言うのは……」

『分かった。策があるならとつとやってくれ。』

ウォーロックはスバルのセリフをぶった切ることによって、スバルのマニアスイッチをOFFにする。

これも長年のパートナーだからこそ……

「スバル、オレはどうすればいい？」

「熱斗君、ゴメン！ ファントム・ブラックとは、僕とウォーロックとで決着を付けたいんだ……」

『今度こそ奴に引導を渡してやる……！』

それはつまり、自分達の戦いに手を出すと言う意味だ。

「……スバル。分かったぜ！ あんな奴ぶっ飛ばして来いよ！」

熱斗は笑顔でスバルを送り出す。

「コクツ！ 炎の翼！！」

スバルは一頷きすると、炎を纏った羽をファントム・ブラックに向かって放つ。

「小癪な！ ファントムスラッシュュ！！」

ファントム・ブラックはカマイタチによる風で炎の羽を消そうとする。

羽は炎を纏ったまま、ファントム・ブラックの周りの地面に突き刺さる。

スバルはそんなことにはお構いなく、どんどん炎の羽を打ち込む。

（一体奴は、何を考えている！？）

ファントム・ブラックはスバルの繰り出す炎の羽を弾き飛ばしながら考える。

程なく、ファントム・ブラックの周りの地面に無数の炎を帯びた羽が散らばった。

「・・・炎の槍！」

スバルの右手に、持ち手が赤色の日本槍が現れた。

「エイッ！」

スバルは槍を思いっきりファントム・ブラックに投げつける。

「無駄なことを・・・！」

ファントム・ブラックは自分の周りの周りの気流を操って、槍の軌道を変える。

しかし、槍が反れた瞬間、スバルがファントム・ブラックの懐に飛

び込んだ。

『待てスバル！ ファントム・ブラックに近づいたら、また幻覚に・  
・・!!』

ブルースがスバルに向かって叫ぶ。

「おそ・・・！」

「炎の小太刀!!」

ファントム・ブラックが気圧を変化させてスバルに幻覚を見せようとする。

しかし、気圧は変化せず、スバルの出した小太刀によってファントム・ブラックは腹を切られる。

「なっ・・・!？」

ファントム・ブラックは痛みによって地面に膝を着く。

「もう、気流も気圧も変化できないよ・・・。」

スバルはファントム・ブラックに言った。

「ば・・・馬鹿な!! ファントムクロー!!!」

ファントム・ブラックは目の前に立つスバルに、体から出した黒い手で攻撃する。

しかし、スバルは翼で上空に飛ぶことによってそれを避ける。

「HFB、火炎乱舞!!!」

スバルの両腕から放たれた巨大な炎は大きな炎の渦となり、ファントム・ブラックを襲う。

「ぐおおおおお！！」

ファントム・ブラックは炎の小太刀のダメージで動きが鈍くなつてしまい、炎に飲み込まれてしまった……。

ファントム・ブラックが炎に飲み込まれたのを確認すると、スバルは地面に降り立った。

「スバル、やったな！ でもどうしてファントム・ブラックは気流を操れなくなつたんだ？」

熱斗が興奮気味にスバルに質問する。

「一番最初に、僕が炎を纏った羽で攻撃して、ファントム・ブラックの周りの地面に羽が突き刺さつたよね？」

それによってファントム・ブラックの周りの空気は暖められていたんだ。暖められた空気は上昇気流を作り、そしてさらに真空状態を作る。」

「真空状態？」

「空気が無い状態だよ！ 空気さえなければ気流も気圧もない。」

つまり、スバルは炎の翼、炎の槍によって、とにかくファントム・ブラックの周りの空気を暖めることにのみ集中する。

暖められた空気は上昇気流を作り、そしてさらに空気がない状態・真空状態を作る。

気流も気圧も空気が無ければ存在しない。ファントム・ブラックは気流と気圧を操ることが出来なくなっていたのだ。

そこにスバルは炎の小太刀、火炎乱舞によって攻撃してトドメをさしたのだ。

「……………」  
熱斗はもはや何も言わない。なぜなら……、

『分かっていないな……。』  
ブルースが溜め息交じりに言った。

「ま、まだまだ……………」

「……………」  
スバル達が声のした方を見ると、そこには炎でボロボロになりながらも、夜叉のような殺気をその身に纏う怪紳士、ファントム・ブラックが立っていた。

「クッ！ まだ戦う気か!？」

『スバル！ 今度こそトドメを刺しちまえ!!!』  
スバルとウォーロックは戦闘体勢をとる。しかし……、





熱斗、スバル、炎山、デカオ、やいと、ブルース、ウォーロック、その場にいた全員がダークロックマンからの決着宣言に驚く。

『そこで、Dr・リーガル、Dr・ガルナ、そして僕も待っている。』

「……！」

熱斗はそこで少し泣きそうな顔になってこらえる。

『……』

ダークロックマンはそれ以上何も言わなかった。そのまま、ガウとファントム・ブラックと一緒に姿を消してしまった。

「上等だ……。」

「えっ？」

熱斗がポツリと言った言葉に、スバルが思わず聞き返す。

「Dr・リーガル達の居場所が分かったんなら好都合だ！！ 乗り込んで今度こそネビュラをぶっ潰して、ロックマンを連れ戻してやるぜ！！」

「フツ……お前ならそう言うと思ったぜ。」

「俺達も一緒に行くぜ、熱斗！！」

「このやいとちゃんにドーンと任せなさい！！」

炎山、デカオ、やいとが熱斗に言う。

「みんな、ありがとう！！」

「熱斗君、僕達もいるよ！」

『今度こそ、あの脚本野郎をぶっ飛ばさないといけないしな……!!』  
スバル、ウォーロックも熱斗に協力すると宣言する。

「よし、行くぜ！ ネビュラ基地……!!」

熱斗は高らかに宣言する。

そして、物語はいよいよラストバトルへ……!!

第七十三話 砕け散れ！ 狂気のシナリオ！（後書き）

【ボツになった話】

スバル

「炎の槍！！」

スバルは槍をファントム・ブラックに向けて投げる。

ファントム・ブラック

「無駄なことを……！」

スバル

（この槍の攻撃で、ファントム・ブラックの周りは真空状態になる。そこで一気に畳み掛けてやる！！！）

しかし！ スバルの予測とは反して、ファントム・ブラックの周りは空気がなくなり、すでに真空状態になっていたのだ。

つまり……。

ファントム・ブラック

「グサツ！！ ぎゃあああああああ！！！」

熱斗

「わぁーーーー！！！！ スプラッター！！」

ウォーロック

『ス、スバル！ いくらなんでも酷すぎ……！！！！』

スバル

「誤、誤解だあ——！！！」

## PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能たんのうしてください。

---

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。  
<http://ncode.syosetu.com/n8998m/>

---

ロックマンエグゼ ～ 願いが希望に変わるとき～

2011年12月19日00時51分発行